

# RIPRESS

**Working Paper No.56**

## 「共創空間」で地球を旅しよう ～ライフスタイルの再発見～

大場 裕之  
麗澤大学 経済学部 教授

ライフスタイル研究会

平成25年3月31日

1+1=2?  
✈️



# 「共創空間」で地球を旅しよう

## ～ライフスタイルの再発見～

大場 裕之

麗澤大学 経済学部 教授

ライフスタイル研究会

**「共創空間」で地球を旅しよう**

～ライフスタイルの再発見～

## 目 次

プロローグ	1
旅前夜 「共創空間」の旅を始める前に	4
第1部 「共創空間」で7日間の地球の旅へ	
Day 1 束縛から自由への旅立ち	
第1話 沖縄・宮古島	7
第2話 韓国	13
Day 2 自由世界の中の不自由と向き合う旅	
第3話 アメリカ	23
第4話 パナマ	34
Day 3 豊かさを考える旅	
第5話 イタリア	43
第6話 ケニア	51
Day 4 貧しさに向き合う旅	
第7話 カンボジア	57
第8話 キューバ	63
Day 5 飢えと渇きに向き合う旅	
第9話 アフガニスタン	71
Day 6 自由の中にある貧しさに気づく旅	
第10話 インド	95
Day 7 自由のワナ、豊かさのツケに向き合う旅	107
～日本帰還 自己満足と無関心からの脱却	
第2部 なぜ地球を旅するのに「共創空間」が必要なのか	125
エピローグ	133
感謝をこめて	138

## プロローグ

ある時、旅好きの7人が集まり、今までに世界を旅した思い出話に花を咲かせた。

この7人は、個性豊かな経歴・考え方の持ち主で、旅を単なる「観光旅行」ではなく「見聞感考旅行」だと思っている。その違いは、観光旅行とは語源からすると「国の光を観る」旅行となるが、それってホント？と問いかけ、光があれば影もあるはずと考える。7人にとって、旅行とは影と光の両面を「見て聞いて感じて考える」時間であり空間だと意識している。

このような見方で旅をすると、訪れた国々の人々の生き方や暮らし方までが見えてくる。つまり、多様なライフスタイルを見聞する事ができる。見聞した後には、そのライフスタイルの背後にあるものを感じて、どのような考え方で暮らしているのかと、次々に興味や関心が湧いてくる。実は、そこから、共創空間という不思議な空間が登場してくることになる。

この7人が実際に旅した国々は、合計すると日本を含めて100ヶ国を超えるが、その中で特に印象に残った10ヶ国をこの本で紹介する。各々の国・地域を紹介する7人はペンネームで登場する。

まず、リオさんは沖縄、ピーナッツさんは韓国、ミーナさんはアメリカ、平ちゃんはパナマとケニア、葉っぱさんはイタリアと日本、トーミンさんはカンボジアとキューバ、ゼロ君はアフガニスタンとインドを担当する。

これらの国・地域を旅行するにあたって「ライフスタイル」がキーワードになっているが、私たち一人一人の生き方と豊かさと貧しさ、自由と不自由（束縛）とのつながりを問うものとなっている。

本に登場する7人は個性派ぞろい。感じ方・考え方も多種多様。だから、読者に対して独りよがりとなる印象を与えるかもしれない。そこで、読者も一緒になって自らのライフスタイルを「共に創って」いくことはできないかと考え、編集することに決めた。この7人はゼロ君が主催する「共創

空間開発」(詳細は後述)の研究会のメンバーなので、この共創空間の技法を用いて、ちょっと風変わりな旅紀行を編集することになった。この本はその成果です。この本では、7人の最も印象に残る10の話を聞きながら自らのライフスタイルと向き合い、新たなライフスタイルを再発見する旅となります。

世界の国々と比較すれば、日本は豊かで自由な国と言える。なぜなら、1人当たり国民所得は世界のトップクラス、国の経済規模は世界3位に位置し、自由と民主主義の憲法をもつ国だからです。

しかし、生活実感として、自由なのになぜか生きづらいと感じている人は多くいるし、豊かなのに充実感が持てない人も多い。もしかすると、モノや情報があふれ、一見自由で豊かに見える世の中は実は偽りで暗闇なのかもしれない。そして、仕方がない、自分のせいではないと思っているその心が実は落とし穴になっているのかもしれない。今一度、自らの生き方・ライフスタイルに向き合うことが必要なのではないのでしょうか。

向き合っても何もできない、自分だけでは限界があると思い込む前に、この共創空間の旅に共に参加して、本当の自由と豊かさを知る生き方なりライフスタイルを見つける旅に出かけませんか。

7人は、この7日間で世界を巡る旅の途中で時々寄り道をして、ライフスタイル研究会(\*)のメンバーと価値観を問う共創マトリックス(詳細は後述)を試みた。テーマは、自己回復・家族・地域社会・幸せ・ニート・愛・健康・自由などをめぐる生き方です。寄り道をして向き合ったテーマで、多様な感じ方・考え方を発見し、共有することで心を開くことができます。

地球の旅の話を聴きながら、あるいはこの旅を終えてから、実は、共創空間という寄り道こそが人生を旅する方向であることに気づかれますように。また、このようなテーマの背後に隠された人類共通の大きな流れ—束縛(貧しさ)⇒自由⇒豊かさ⇒自己満足⇒無関心⇒束縛(貧しさ・孤独)—に気づき、この悪循環から脱出する道があることを発見することができますように!

ここで、ちょっとだけ旅に登場する 7 人のプロフィールを紹介しま  
す。

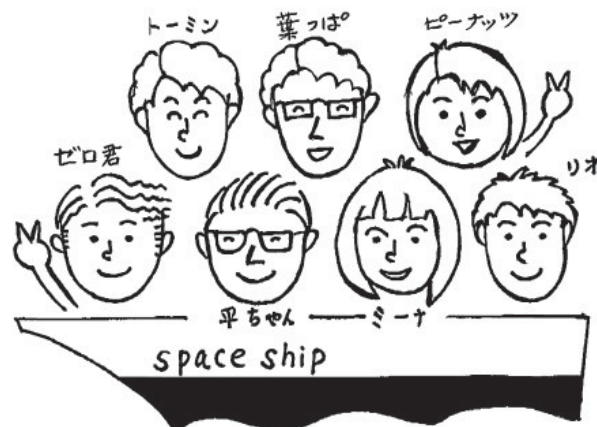
日常は研究員、非日常は宮古島のマンゴー園で汗を流すリオさん。  
韓国ドラマとピーナッツ大好きなアクティブ主婦ピーナッツさん。  
旅は心の栄養ドリンクであり世界一周の船旅をこよなく愛する平ちゃ  
ん。

異文化体験でのショックから社会的弱者に目覚めたミーナさん。

真の豊かさを求め心の窓が開かれた葉っぱさん。

キャリアウーマンから一転し障害者の支援にいのちをかけるトーミン  
さん。

自分が貧しくみじめな者であることを知り神の愛に触れたゼロ君。



さあ、皆さんも一緒に「共創空間」で真の自由と豊かさを発見する旅に  
でかけましょう。

\*「ライフスタイル研究会」とは、麗澤オープンカレッジ（ROCK）の講座「ライフ  
スタイル再発見」の受講者を中心とする研究会です。

## 旅前夜 「共創空間」の旅を始める前に

### 共創空間で旅するって一体どういうこと？

本書のタイトルは、「共創空間で地球を旅しよう」となっているが、多くの読者は「それって、どういう旅なのか」と疑問に思われるでしょう。

確かに、今時の旅は、旅行社のパックスツアーで行くことが多いから、疑問に思われるのは当然ですが、敢えて共創空間で旅をするのは、それなりの理由があるのです。それは直言すれば、疑問や関心を持ち、それを問い続ける心を大切にする旅を目指しているからです。

それでは、何を問い続けるのでしょうか。旅先で見聞して感じたり考えたりしたことは、その旅人の固有のもので、独りよがりかも知れません。もっと他の見方があるのではないか、他の人はどのように思っているのか、といったところまで視野を広げ、問いの輪を広げて問い続けるのです。

このように、自分と他者をまじえて「問い」に対して答え（意見）を出し合い、向かい合う場を「共創空間」と名付けています。この空間を通じて、各人が感じたこと・考えたことを共有し尊重して、新たな答えを共に創り出そうと考えています。個人の固有の旅に終わらせないのが、この本の旅のユニークで面白いところです。

### 「共創空間」と「共創マトリックス」

次に、意見を出し合い・向かい合うにしても、千差万別の言いたい放題では収拾がつかえません。そこで、私たちは「共創マトリックス」と名付けたツール（道具）を使います。その訳は、次の通りです。

私たちの日常生活では、あの人は感情的だとか、この人は理性的だとかを感じる場面が多くあります。また、日常の行動でも「分かっているけど（理性）、やめられない（感情）」という衝動にかられるケースが、多々あります。これは、人間が、理性と感性が共存し一体となった生き物だからです。従って、各人の意見は、理性基準と感性基準が混じり合ったものになります。

世間では、理性を優先させて感性・感情は控えるようにと云われますが、



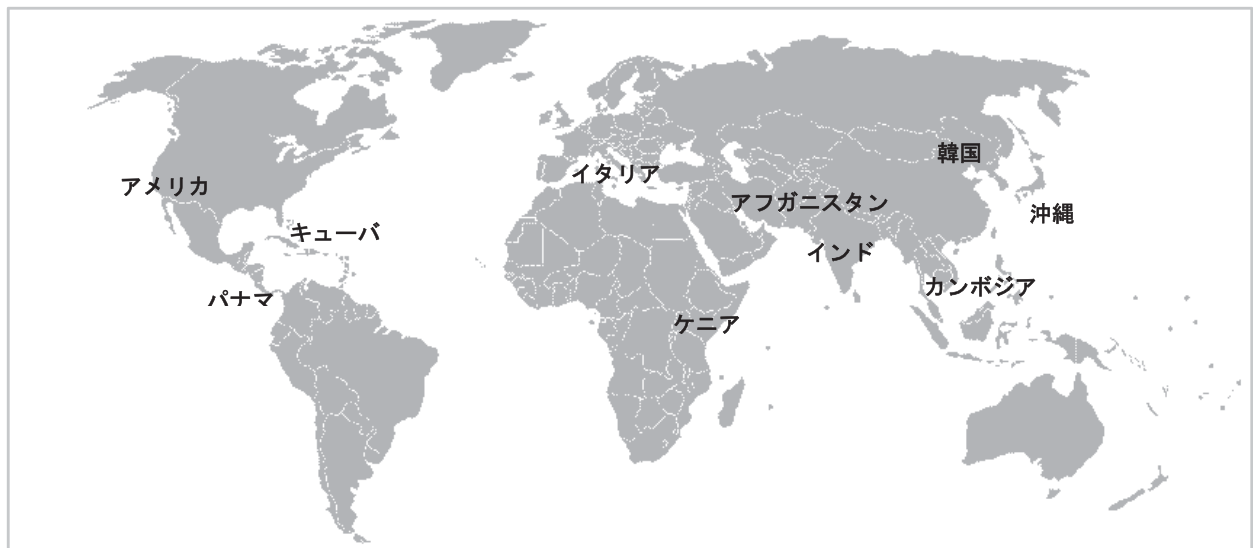
そもそも人間は両者を併せ持っている存在ですから、分離したり優劣の区別をしたりするのは人間的ではありません。

そこで、共創マトリックスでは、縦軸と横軸をクロスさせた十文字の図を作ります。縦軸には理性的な「〇〇はよい・悪い」「〇〇は必要・不要」といった項目を上下に配置し、横軸には感性・感情的な「〇〇は好き・嫌い」「〇〇は欲しい・欲しくない」といった項目を左右に配置します。そうすると、例えば「〇〇はよいと考えるが、嫌いと感じる」という一見矛盾した意見も、十文字の図のどこかに位置を確保できます。

このようにして、千差万別の意見を位置付け、整理して、会話を始め、討論を進めることが、共創マトリックスの良さなのです。

やや長い説明となりましたが、この本では、紀行文と共に普段は聞き慣れない「共創空間」とか「共創マトリックス」が、しばしば登場しますので、あらかじめ概要を述べました。詳細は、第2部を参照してください。

それでは、共に旅に出かけましょう。



## 第1部 「共創空間」で7日間の地球の旅へ

### Day 1 束縛から自由への旅立ち

#### 第1話 沖縄・宮古島

##### 都会生活・労働からの自由・自己回復を求めて

沖縄・宮古島のマンゴー園で労働の汗を流すリオさんが、夏の宮古島に行き始めて10年程が経とうとしている。5月のゴールデンウィークが過ぎた頃になると、友人と今年はいつ頃行けそうかという話になる。だいたい7月の上旬の日程で日程調整を進める。沖縄地方は東京より約1カ月早く梅雨が明けるため、一足早く初夏を満喫できる。またこの時期から収穫が始まる大好物のマンゴーの収穫の手伝いに行くことがリオさんの旅の目的となっている。



##### ゆっくりとした島時間とマンゴー

東京から約1,800kmの距離にある宮古島は、日本でありながら東京とは歴史も文化も異なる異郷だ。サンゴ礁が隆起してできたこの島は、概ね平坦で、沖縄で唯一「はぶ」がない土地柄と言われる。高い建物も少なく、初めて訪れた時から今日まで、さとうきび畑と青い空（ざわわの唄そのも

の)、海の青色のグラデーションと静かでゆるやかな印象のみが残る場所だ。また、東京での生活とは比較しようもないゆっくりとした時間の流れに身を置くと、自然の中で人としての息吹が蘇り、自己回復が図られる、そんな時間が流れて行く。

しかしここ5年程、リオさんは滞在期間1週間の大半をマンゴー収穫の肉体労働?の現場に身を置くようになった。1年間愛情を込めて育てられたマンゴーは、一つひとつが個性を持ちながら非常に美人ぞろいである。宮古島に行き始めた頃は、日々追われる日常生活から抜け出し、自然に抱かれることで魂の回復を図っていた。しかし、今ではその手段がマンゴー園での手伝いにとって代わり、人の営みの深さを改めて見つめる時間になっている。

本州とは1時間程遅い日の出を見に行き、夕方はビール片手に海に沈む夕日を見て、そのまま一番星を見つけ、夜空が満天の星になるまで寝転がっていつまでも空を見ているという日々。

## マンゴーが気づかせてくれた自己回復できる仕事

マンゴーの収穫体験がきっかけで出会った果樹園のおじさん、「親戚のおじさんさながらにマンゴー収穫の手伝い」に行くようになった。子供の時から田舎を持たないリオさんにとって、今更ながらこれがイメージしていた夏休み!満喫できる時間なのだ。

自然と向き合いマンゴーを育てる「親戚のおじさん」は、仕事には非常に厳しい。台風の通り道となっている宮古島で、収穫できるマンゴーまで育て上げることは、自然と向き合ったことのないリオさんにとっては想像もできない苦勞の多さと思われる。都会でお金を出せば、ほぼなんでも購入できる環境にいと、その大変さは頭ではわかっているイメージを持ちにくい。

マンゴー収穫の手伝いをする経験以前は、東京での仕事の形態が、リオさんにとってあたりまえの「労働」の場であった。しかし、マンゴー園で手伝いをするようになり、この仕事も「労働」の一つの形であると気づく。東京での仕事はともすると受注した仕事をこなし、報告書を書き上げて自

## 9 Day 1 束縛から自由への旅立ち

己満足に浸ってしまいがちである。それにひきかえ、自然を相手に果物を育てることは、これだけ天候の変動が激しくなるとなお、収穫の時期を迎えたマンゴーを見るにつけ「よくここまで育てくれた」と、愛おしさと感謝する気持ちが自然に湧いてくる。厳しいながらも素晴らしい仕事である。日常に埋没してゆくことは非常に怖いこと。その世界が全てであると錯覚してしまいがちになるから。しかし、人間の営みは様々な人たち、空間とつながっていて、その営みの中で日々生活していると気づかされる。

宮古島で感じた自己回復の場は、マトリックスによって得られる効果と同様の影響を与えてくれることに気づく。地理的空間を異にした宮古島で体感したことをマトリックス空間でも体験する（そうであれば、わざわざ宮古島でなくてもよいのかもしれないが）。しかし、宮古島はリオさんと呼んでいる。今すぐにも行きたくなるこの衝動は、まだまだ修行の日々である。



東京という大都会と宮古島という大自然の中で育まれる異なる価値観。その異なる価値観を持つ人々が、マトリックスという意識空間で出会う。マトリックス空間に身を置き、非日常の人たちと共に非日常の仕事を行うことで、偏ってしまった自分の位置をマトリックス上で確認できるのだと思う。まさに、マトリックスは一人の人間として日常にどのように向き合っていくのかを気づかされる空間であり、自己回復の時間。リオさんにとって宮古島という島と、マトリックスで味わう自己回復としての島時間は、「人の営みと向き合い自分の気づきに向き合う」とても大切な時間となっている。

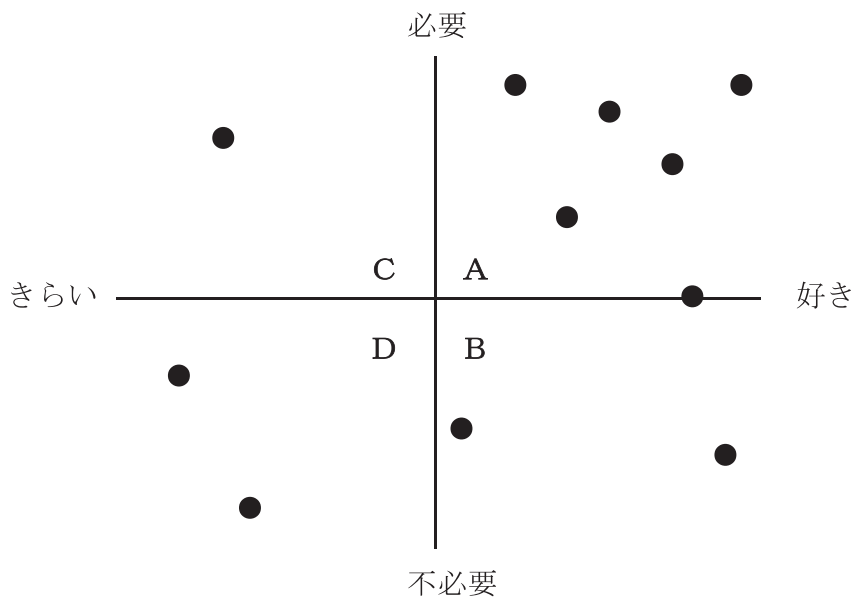
## ☆ 共創マトリックスの世界によろこそ！

### 【設問】

自己回復のために非日常な生活空間に身を置くことについてどう思うか

タテ軸 非日常な生活に身を置くのは必要・不必要

ヨコ軸 非日常な生活に身を置くのは好き・嫌い



### Aゾーンの意見（非日常に身を置くのは必要・好き）

- 本来なまけものなので、自分にタガをはめて暮らしている。毎年具体的な目標（禁酒220日以上、体重70キロ以下、TOEIC600点）を立てている。なまけものにはなりたくない。  
旅は、国内で年17～18回、海外は1～2回行く。自分の知らない体験ができ、新鮮な視点を得ることができる。生き生きとしているためには、自転車のようにこぎ続けなくてはならない。自分の好きなことなので辛くはない。何もしていないのが一番苦手。
- 環境を変えることは必要だと思う。普通の生活では話さない人と話すことで刺激を受けられる。しかし、面倒くさい。旅に出ることも自分で準備するとなると面倒になる。人に全部やってもらって行くのは好きだけど、元来自分はなまけものだと思う。生け花をやっていたこ

## 11 Day 1 束縛から自由への旅立ち

とがあるが、自分は決められたことに凝り固まっていて創造性が何もなかった。自分をもっと解放できればもっと創造的になれるのではとの願望がある。

- 何かに凝り固まることなく、風通し良く暮らしたい。  
すごく旅が好きとか、発散欲望はない。特に異次元に身を置きたいとは思わない。旅の好き嫌いは人それぞれ。準備も面倒、帰ってからの片づけも面倒、お金を使って疲れに行くようなもの、と思う人もいる。
- 自分にとって日常とは何かを考えたとき、家族と一緒にいることが日常。ところが、家族で旅行してかえって疲れた。家族と離れていることが非日常を楽しむ条件だと思った。日常の中では、非日常は体験できない。
- 学生時代、在職時代、退職後とそれぞれの本業（学生時代は勉学、在職時代は勤労、退職後は自己開発とボランティア）をやってきた。本業以外のことをやることによって、新たな自己啓発ができるという意味で非日常は必要だと思う。新たな視点や刺激を得られる旅は好きだ。

### AゾーンとBゾーンの線上

- 退職して毎日が日曜日のようなもので、十分自己回復しているので、必要とも不必要とも思わない。旅をするのは好き。

### Bゾーンの意見（非日常に身を置くのは不必要・好き）

- 回復すべき自己とは何か。ただ流れのままに漂っている。昨日と今日の自分は違う。流れの中でよどみにはまらないよう、異次元体験はちょっと好きだが、回復を必要とまでは思っていない。あるがままに生きる。元来なまけものなので無理はしない。
- 一年に160日ほど旅に出ていると、旅が常態化して、何が日常で、何が非日常なのかが混然一体としてくる。旅先にいることが日常でもあり、逆に家に帰るのが非日常的な体験となることもある。よって、自己回復は、日常・非日常を問わず、自己の精神活動のひとつと思える。しかし、常に非日常的な空間に身を置くのは好き。

### Cゾーンの意見 (非日常に身を置くことは必要・きらい)

- 頭では自己回復が必要だとは思いますが、怠惰なので自分で何かをするのは好きではない。怠惰な人間でいることは楽だ。ストレス解放が必要とは思いますが面倒くさい。家に居続けると不良老人になるとわかっているので、なるべく外に出るように心がけている。本心は、家でごろんとしていたい。

### Dゾーンの意見 (非日常に身を置くのはきらい・不必要)

- 現在就いている仕事の性質上、毎日がドタバタしている感じで、それが自分の日常。自分より若い人と接するケースが多く、出来るだけその一人ひとりに合わせた喋り方でコミュニケーションを取るなので、疲れることも多い。時間があれば、むしろ一人でじっとしていたい。仕事でも成果をあげていかねばならないので、その作業から離れる旅というものの計画を立てるのは好まない。旅先でも“やらねばならないこと”が頭から離れない。加えて昔から旅の計画を立てることは苦手。しかしこういった考え方は自分本位でもある為、本当は変えていかなければならないのかもしれない。
- 日常がある意味非日常（毎日が変化する）なので、わざわざ非日常に身を置く必要を感じないし、あえて非日常を求めない。

### ■共創マトリックスで見えてきたもの

自我の強さから逃れられない自分があることを痛切に感じる。マトリックスの軸を考える時には、既に自分の位置はAゾーンに決めてしまっている。凝り固まった頭を解放する意味からも、マトリックスに向き合うことはとても大事な時間です。

### ■ちょっと一言

マンゴーの収穫体験者から本格的な収穫ボランティアに転身したときのエピソード、感動したおじさんの一言やリオさんの気持ちの微妙な変化を知りたい。

## 第2話 韓国

### 韓流にはまって韓国へ

ピーナッツさんは50歳代の主婦、回りからピーナッツさんと呼ばれている。なぜピーナッツさんかと言えば、ピーナッツの名産地である千葉県に在住し、しかも好物はピーナッツだからだ。夫と子供2人の典型的な4人家族。実は、好きな物はピーナッツだけではなく韓国ドラマも大好き！韓流にはまっているおばさんの一人だ。

お隣の国、韓国は飛行機に乗れば、成田からソウルまで3時間足らずで着いてしまう近い国。以前は近くて遠い国と呼ばれていたが、つい最近までピーナッツさんにとっては近くて知らない国。その専業主婦の彼女が家事労働という束縛から解放され友人とソウルへ旅立った。

ソウル市の人口は、全国民のおよそ5分の1の1千万人。およそ半数の人口が首都圏在住という、日本以上に首都圏一極集中が進んでいる国だ。ソウルは、現在世界の都市の中でトップ10位に評価されている大都市。ソウル市内を漢江という大きな川が、街の中心を横切るように流れている。南北に隔てられた地域は、それぞれ江南、江北と呼ばれている。宮殿やそれを取り囲む城壁などの史跡は、江北に集中する。一方、江南は新興住宅地として開発され、オリンピック関連施設などもある。

文化の面では、韓国の映画、テレビドラマ、歌や踊りなどが、日本の芸能文化に影響を与えていることは、すでに周知の事実だ。

### 家事と日常から解放されて

その韓国にはまったピーナッツさんは、同じく韓国ドラマ大好きの友人と2人で、ドラマによく出てくるソウルタワーを観光に行くことになった。

なんと言っても、家事から解放され、また日常から解放され、乙女心に戻って胸の高鳴りは最高潮。友人はペ・ヨンジュンの大ファン。ソウル市内を観光しているときも、「ヨン様いるかしら！」と、大きな黒塗りの車を見かけるたびにバスの中から覗きこんでいる。それは、あたかも東京へ行ったらキムタクに会えると思うのと同じ。そこまで乙女に戻れるかと感



心した。

夕食を終え、帰りのバスの中でガイドさんが、「今皆様のお泊りのホテルでペ・ヨンジュンがお食事中です。これからホテルに帰るので会えるといいですね」とアナウンスがあり、バスの中がざわめいた。

ホテルの前は、すでにインターネットでヨン様が結婚式に出席することを知っている日本人ファンが集まっていた。早速私たちも仲間入りして、ヨン様が出て来るのを今か今かと待ち構えた。そこで、おばさん達の情報交換が始まる。ある方が、「見て！ヨン様のネックレスを買ったの！」と、嬉しそうに首にかけてヨン様の顔をくり抜いたネックレスを見せてくれる。「ステキ！」それはネックレスがステキというより、嬉しそうなお顔がステキなのだ。お年は私より上で、きっと人生いろいろなことがあり、それを乗り越えられてきた、そのお顔が今キラキラ輝いている。

そこへヨン様が登場。一斉におばさん達がキャーキャー声を上げ、私も一目見たさにピョンピョン飛び跳ね、心は一気に十代に戻る。

今回の韓国の旅で見たものは、友人のヨン様に会いたい！の願いが叶う瞬間。高価なダイヤのネックレスではなくヨン様のネックレスで満足し、



キラキラ輝いていた中年のおばさん。そして、一緒に行動していたおばさん達が、ヨン様と偶然出会えたことで、日々の束縛から解放されたこと。この解放感が旅の大きな収穫だ。

人生楽しく生きる事はとても大切。ウキウキするものを見つけて、心を解放してあげることは大切ですね。

## ■「家族」とほんとうに向き合っている？ 家族は束縛？

沖縄・宮古島で自己回復できたリオさんも、韓国で心が解放されウキウキ気分となったピーナツさんも、東京にそして千葉に戻ってくると、再び日常の世界、家事の世界が待っている。そこでふと思うことは、いくら自己回復できても、あるいは心が解放されたとしても、家族とどのように関わり、どう向き合うのかという問題と結びついていないことに気づかされる。家族がありながら、家族と向き合わない自己回復や解放感、ある種の逃げかもしれない。

現代の家族の在り方は実に様々。なのに、家族はこうあらなくてはいけないとする思いに私達は拘束されていないだろうか。父親、母親、長男、嫁、娘など、それぞれ家族の役割が決められており、気にしているつもりはなくても意外にその役に束縛されている自分に気づくことがある。つまり、家族はよく絆と言われるが、束縛の舞台ともなりうる。もしそうであれば、家族という束縛からの自由とは、一体何を意味するのだろうか。家族と一緒にいることが束縛となり、一緒にいないことが自由なのか？

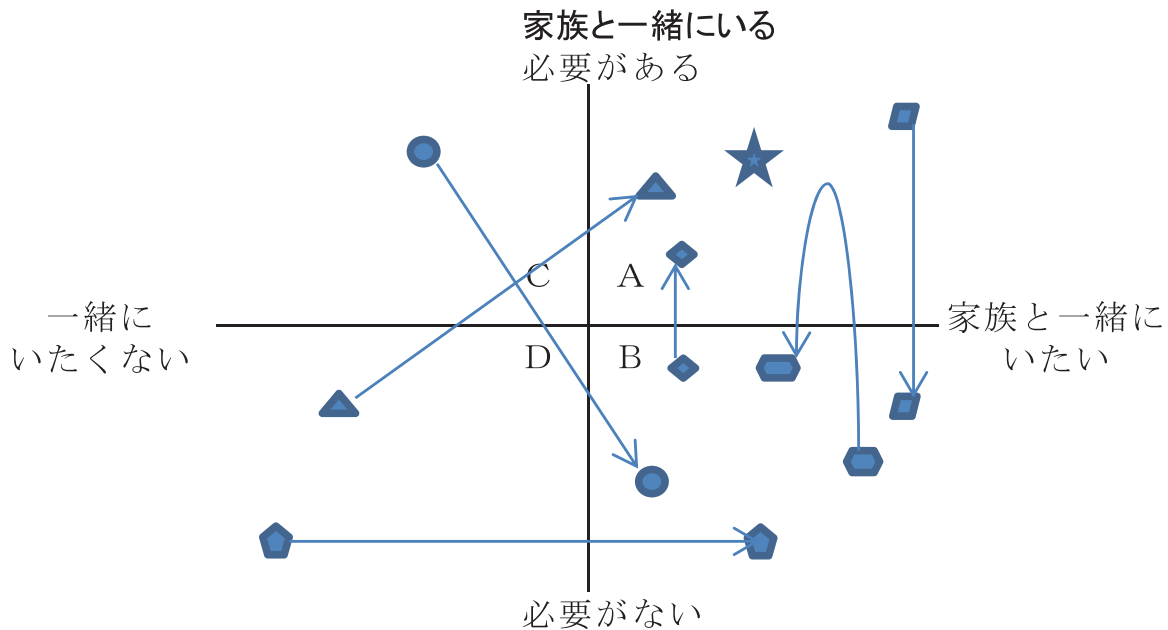
### ☆ 共創マトリックスの世界によろこそ！

共創マトリックスで、各々の置かれている状況なり価値観を知るために、その手掛かりとなる「家族と一緒にいる」必要性和、願望もしくは意思の軸で探ってみよう。

【設問】 家族と一緒にいることについてどう思うか

タテ軸（必要軸）： 家族と一緒にいる必要がある、必要がない

ヨコ軸（願望軸）： 家族と一緒にいたい、いたくない



同じマトリックスで、2回の共創を行った結果、次のような意見が出た。そこに置いた考え方を一度捨てて、別の所へ跳んでみるチャレンジで、その中から根本的な問題が見えてきた。「家族」と向き合ったことで、いろいろな家族観があり、それに対して一つの方向性が見えてくるのが大事。

### ▲ : Dゾーン → Aゾーン

#### 1回目 「家族と一緒にいる必要がない・一緒にいたくない」

「一緒にいたくない」はそれほど強い感じではなく、「一緒にいたいとはあまり思わない」に近い。戦後の教育では、個人の権利と自己実現が重要な価値観として強調されてきた。自分だけの成長のために、自分中心に動くと、家族の人間関係も面倒に思うようになり、家族への思いやりの気持が育ちにくいように思う。しかし、今こういう日本人が多いのではないだろうか。核家族が、少人数家族となり、無縁社会につながっていく要素がある。人間性の崩壊の問題を抱える危険性もあるゾーンだと思う。

#### 2回目 「家族と一緒にいる必要がある・一緒にいたい」

本来の「自分らしく、人間らしく生きていく」には、家族間のコミ

## 17 Day 1 束縛から自由への旅立ち

コミュニケーションを大切にする心遣いが必要だと思う。いつの時代にあっても、人間形成の基盤は家庭にあり、特に子供にとっては大きな意義をもつと思われる。

### ■ : Aゾーン → Bゾーン

#### 1回目 「家族は一緒にいる必要がある・一緒にいたい」

家族は、「いてくれないと困る」存在。たとえ、日常で小さいいざこざが起こったとしても、両親とは、私自身をつくってくれた存在であるので、問題があっても、それらを超越した「尊敬すべき」存在と思っている。一緒にいた方が楽しい。私は様々な面でサポートしてもらっているのだから、一緒にないと困ってしまう。

#### 2回目 「家族とは一緒にいる必要がない・一緒にいたい」

もし転勤があったら、私は行きたくない。家族と一緒にいたい方。でも、行きたいと発想を変えてみると、自立心が芽生え、社会的な仕組みも分かり、視野が広がるような気がする。友達が増えるかもしれないし、自分の好きなサークルとか教室に通い、そこで新たな仲間ができて新しい視野が開けるかもしれない。

### ● : Cゾーン → Bゾーン

#### 1回目 「家族と一緒にいる必要がある・一緒にいたくない」

現在、大学生の娘が、通学に2時間かかり、本人は一人住まいを希望しているが、経済的な問題と、もう一人の子供も許すことになるのではと、夫婦で激論になり、結局自宅からの通学となった。通学が遠いから大変というより、一人住まいを許してしまうと他の問題が絡んでくるから、子供の様子を見るためにも、もう少し家族と一緒にいる必要がある。しかし、子供は親からブツブツ言われたくないだろうし、親も言いたくない。お互いに一緒にいたいとは思っていない。

#### 2回目 「家族と一緒にいる必要がない・一緒にいたい」

私の父は胃がんで亡くなった、母はその後一人になった。今まで父親

にいろいろ不満のある夫婦関係であったが、一人になった母は自立した。母は仕事を持っていたこともあり、光り輝いてきた。それを娘として羨ましいと思う。「一人でいるのは気が楽だ」とも言っている。近い将来、子供達は自立して、一緒にいる必要は無くなってくる、いつか必ず一人になるが、苦ではない。しかし、心の中はいつも家族と一緒にいるつもりでいたい。

### ◆ : Bゾーン → (Aゾーン) → Bゾーン

#### 1回目 「家族と一緒にいる必要がない・一緒にいたい」

家族と一緒にいたいという感情は持ちながら、必ずしも一緒にいる必要がない。現在も過去もこれからも、そう思っているので、2回目は跳ばないマグネットになっている。動物でも、空飛ぶ鳥でも、日常はバラバラに飛び回って、夜になったら一つの森に帰ってくる。人間もそういう大祖先からの遺伝子があるから、それが自然の姿かと思う。一緒にいる感じを持ちながら、必ずしも同じ所にいる必要はない。

#### 2回目 (同じ)

2回目は跳ばないマグネットだが、実は一旦Aに跳んで、Bに帰ってきた。昨年結婚した娘が、家族と一緒にいたことにノスタルジアを感じていたらしく、先日電話がかかってきて、「自分をここまで育ててくれた両親にありがとうと言いたい」と泣き声で言ってくれた。娘は自立心が強く、個性が強く、気が強いと思っていたが、そういう感情もあったのかと思った。娘はDでありながら、Aの気持ちが潜在的にあったのだと思い一旦Aに跳んだが、しかし、やっぱりBに戻った。

### ◆ : Dゾーン → Bゾーン

#### 1回目 「家族と一緒にいる必要がない・一緒にいたくない」

家族と一緒にいたくないと積極的に思っているのではなく、「必ずしも」一緒にいる必要はないと思っている。私たち夫婦二人を家族と考えるか、一緒に育った兄弟を家族と考えるか、いろいろなケースがあると

## 19 Day 1 束縛から自由への旅立ち

考えられる。今年、兄が亡くなり、兄弟三人が集まる時が多かった。いつも一緒にはいないが、繋がっているし、血もつながっている、幼い頃の共通体験がたくさんあるから、何か言えばすぐわかる、そういう家族もある。また、夫婦二人の家族というのは、全然違った別の所で育った二人が一緒に住みだす家族。私は夫と同じ職場で24時間、何十年も一緒にいたので、一緒にいるのは何とも思わない。今は、退職して毎日一緒にいるが、お互い好きな事をして、別々にいる時間が長い。育った家族と作った家族はぜんぜん違う。夫婦は、もともと一人の独立した人間が一緒になっているので、一緒にいるのは苦しくない。子供のいない夫婦にとって、家族は価値観を共有する共同体のようなもの。特に一緒にいたいとか、いなくてはこの束縛を感じたことは少ない。それが当たり前のことになっているように思う。

### 2回目 「家族と一緒にいる必要がない・一緒にいたい」

家族は、必ずしもべったり一緒にいる必要はないと思っているが、大地震を経験して少し変わった。たとえば、大きな天変地異があったとき、家族と一緒にいれば、一緒に被災・避難あるいは死ぬことができる。もし、ばらばらで別の所にいて、片方が被災することを考えると、これからは、できるだけ一緒に行動していた方が、安心な気がする。よって、Bゾーンから少しだけAゾーンに移動。

### ◆ : Bゾーン → Aゾーン

#### 1回目 「家族と一緒にいる必要がない・一緒にいたい」

家族と価値観を結び付けるのに何を考えるかと言うと、共同体だと思おう。私の今のベースは育った家族であり、つくった家族は崩壊してしまった。母親はこれから介護が必要になってくるので、一緒にいたいというよりも、一緒にいる必要が強くなってくる。子供の時だと家族と一緒にいたいだろうし、いる必要があった。人生は、A・B・C・Dをぐるーっと一周りするのだと思う。

## 2回目 「家族と一緒にいる必要があり・一緒にいたい」

今は母と2人である。今後、介護が必要であれば、一緒にいる必要が高くなると思われる。一緒にいたいかという、微妙なところ。誰かハートのキングでも出てくれば、「一緒にいたい」し、「一緒にいる必要がある」になってくる。それも願望として含めてAにした。

## ★ : Aゾーンのまま

「家族と一緒にいる必要がある・一緒にいたい」

人間は不完全な存在だし、弱いものだと思う。だから一人では生きられない。家族はとても大事だと思う。ただ、家族は永遠ではない。いつかは別れなくてはならない。

「一緒にいる必要があり・一緒にいたい」家族には、物的なもの、霊的なものがある。私の家族は、霊的な家族と言う意味。私は聖書を大事だと思い、食べ物だと思っている。人間の肉体は必ず死ぬ。子供の頃、祖母が亡くなり、樽のなかに入れられ埋められたのを今でも覚えており、人間はこうなると思った時、恐怖心を持った。でも、それだけではないのちを与えられた。

人間には魂があるから、霊的な家族はあると思う。理屈ではない。結局、理屈で進めようとする人間に、傲慢があるのではないかと思う。今暮らす物的な家族もAにある。一緒にいたいと思っているが、娘たちはどうか・・・。

## ■共創マトリックスで見えてきたもの

2回目の「跳ぶ」作業で、「家族と一緒にいたい、心だけでも一緒にいたい」という思いが見えてきた。「家族と一緒にいる必要がある・一緒にいたい」Aゾーンが、良い家族だと思っていた。しかし、マトリックスで見えてきたものは、家族は子育てのAゾーンで始まり、子供の反抗期を迎えCゾーンへ、子供が成人し旅立ってしまったらDゾーンへ、そして再び親が年を取りAゾーンへ戻るか、あるいはBゾーンへ。

## 21 Day 1 束縛から自由への旅立ち

一生Aゾーンに留まるよりも、マトリックスを一周できる心の余裕が、幸せなことなのだと気づいた。家族の役割で自分を束縛している心を解放すれば、より豊かな人生を送れるような気がする。

### ■ちょっと一言

共創マトリックスを2回行い、2回の変化が面白かったです。家族は永遠のテーマだと感じました。



## Day 2 自由世界の中の不自由と向き合う旅

### 第3話 アメリカ

#### アメリカ留学をしたミーナさんのサプライズ

アメリカは西海岸にある港町、サンフランシスコ。海に面しているだけあって、シーフードが美味しい。活気に溢れた町だ。1848年にゴールドラッシュがこの地を湧かせたことは有名であろう。このゴールドラッシュが現在のサンフランシスコの経済の基礎をつくったと言われている。その後、1960年代には、反戦を掲げてのヒッピームーブメントが起こった。

ミーナさんが、ここサンフランシスコの大学院で学んだのは1990年代半ば。港のすぐ近くには、ゴールドゲートブリッジ（金門橋）がどっしりと構えている。港町といっても、ダウンタウンから



<http://www.sanfrancisco.travel/49hours/The-Culture-Seeker.html>

内陸に向かうと坂が多い。町にはケーブルカーが走る。

風に吹かれてケーブルカーを満喫していると、やがて高台に出る。高台から遠くに海がキラキラ光っているのが見える。水と丘とを兼ね備えて起伏に富んだ町は、青空がよく似合っていて美しい。緯度で言うと福島県と同じくらいで、夏は最高でも気温は20度前後、冬は最低でも10度前後くらい。雪が降ることはないが、7～8月頃には霧が多い。人口は約81



じくらいで、夏は最高でも気温は20度前後、冬は最低でも10度前後くらい。雪が降ることはないが、7～8月頃には霧が多い。人口は約81

<http://www.sanfrancisco.travel/todo/The-Best-View-in-San-Francisco-is.html>

万人。温暖な気候と美しい自然に恵まれて、人々は往々にしてオープンである。よく聞かれるフレーズは、「自由を愛する町」。しかしその一方で、ここには多民族が共生しており、互いに権利の擁護に敏感になっていることも事実だ。住民はさまざまで、インディアン・ヒスパニック系・白人・アジア系・アフリカ系・太平洋諸島系などの人々が暮らす。

サンフランシスコには、世界中から同性愛者たちも居場所を求めてやって来る。サンフランシスコがあるカリフォルニア州では、過去に「同性婚」が認められたものの、一時は住民投票でこれが禁止されていた。ところが2012年に入り、同性婚を禁止することは、平等を定めた合衆国憲法に反するとした判決が控訴審で下り、同性婚は再び認められる動きを取っている。

サンフランシスコに暮らした月日は合計で4年半。その間、毎日のようにゲイやレズビアン、アジア系の人々、黒人の人々、女性といった、いわゆる社会的弱者の立場を経験した人たちが、自分たちの人権問題と向き合う姿を新聞やテレビのニュースなどで目にしていた。この現象は、日本ではほとんど目にしたことが無かったので、驚きの体験であった。

### **社会的立場の弱さを自ら実感した留学生活**

学生生活を送ったのは1990年代半ばのこと。キャンパスは郊外にあって、雰囲気は「おおらか」だった。芝生やカフェで、学生たちがくつろいだり熱心に語り合っていたりするのはいつもの光景。学食にある店も多種多様で、中華料理・イタリア料理・メキシコ料理などがいつでも楽しめた。

そんなのんびりとした佇まいでも、いざ授業に出ると雰囲気が一変した。学生たちは、「競争」にも近い形で切磋琢磨しているのだ。授業は活気づき、学生も教員もお互いによく発言をする。疑問を持った学生は躊躇せず、その場で先生に質問をする。先生も誠意を持って対応する。こういうところに、アメリカ社会の「自由さ」を見た気がした。つまり学びには、どのような意見を持っているかが大切という訳だ。まだ人生経験も浅い若者たちの意見を、年上の側が進んで聞こうとする文化は新鮮だった。特にこれ

が大学の教室内で頻繁に起こっていたことだから、ひどく感心した。自分もそうありたいと願うようになった。ただ一方で、自分の思いを言葉や態度で素早く表現することには、全く不慣れであることも事実であった。

授業では、圧倒的にディスカッションが多い。そして、発言のタイミングは、日本人に比べてはるかにスピーディ。たとえば、ある授業でグループディスカッションをしていた時のこと。一人のアメリカ人学生から、「ミーナはどう思う？日本ではどうなの？」と尋ねられた。その時、ほんの少しの間答えを考えていたら、「あ、じゃあ（答えなくても）いいわよ。また後で訊くから」と言われ、次のメンバーへの質問が始まってしまった。黙っていた時間は、日本人にとっては決して不自然な長さではなかった、と本人は思っている。それでも、「意見が無いから黙っているのだ」と受け取られてしまったようだ。この経験から学んだのは、コミュニケーションの最中には、何か考えているだけであっても、“Um...,”とか“Well,...”とか、とにかく何らかの音を発して、自分の存在感を示しておくことが大切だということ。その会話に参加したいという本人の意欲を、少なくとも相手に示すことになるからだ。

ある日、別の授業でのこと。ディスカッションの最中に、クラスの学生たちが黙り込んでしまった。しかし、ミーナさんには意見があった。意見がある時は、言わなければいけない。なぜなら、「黙ること」は「考えが無いこと・そこに居ないこと」を意味するから。これまで、嫌というほど経験してきたことだ。「アメリカの教室では発言することにこそ意義がある」。そんな思いから、意見を述べてみた。緊張していたし、急いで考えを述べたので、口から出る英語は、文法的にも正しくない部分があったし、じゅうぶんに言葉を尽くして表現できていなかったように思う。自分でもそれが分かった。言った後にちょっぴり後悔する。「どうしよう、誰にも私の考えは伝わっていないかも・・・」。ところが驚いたことに、考えはある程度伝わっていたようで、別の学生がもう一段階発展した意見を提示してくれたのだ。そして、続いて先生もが意見を述べられた。異文化の中で、あえて挑戦してみた自己表現が受け容れられた。これは感動的な出来事だった。

こういった経験を繰り返し、アメリカ社会における発言の「厳しさ」と「自由」を体感していった。アメリカという日本とは異なる文化の中で相手とコミュニケーションをとらなければならないことは不利な場合がたくさんあり、まるで自分までもが社会的弱者の一人になってしまったような気がしていた。

### さまざまな弱者と人権擁護

こうした試練によって、自分以外にも社会で弱者になりうる人たちに関心を持つようになった。例えば、黒人の人々や、女性、子ども、経済的に恵まれない人々、同性愛者の人々。見渡してみると、サンフランシスコという町があらゆる人権を擁護しようと格闘しているかのようだった。

大学も、学生たちが人権に対する高い意識をもつことを奨励していた。たとえば、大学がロサ・パークスさんを招いたことに、その姿勢が表れている。ロサ・パークスさんは1955年12月、アラバマ州のバスの中で、白人男性に座席を譲ることを拒否した黒人女性だ。彼女は市の条例を破った罪で逮捕され、罰金を支払わされた。しかしこの出来事は、後に、アメリカ全体に公民権運動を広げていくきっかけとなる。人種差別撤廃の運動では、マーティン・ルーサー・キング牧師も大きく関わることとなった。また別の時には、学生自らが主体となって、不当労働に苦しむ子どもや女性たちのドキュメンタリー映画を上映していたこともある。アメリカ発祥の有名ブランド数社が、国外の工場子どもや女性たちを低賃金で雇っていた。この不当な重労働の現場をアメリカ人である彼ら自身が問題視したのだ。

サンフランシスコでは、このように人々やメディアがはっきりと自分や他者の生きる上での権利を主張している。権利を声高に叫ぶ裏には、「自由に飢えている、不自由から脱却したい」という思いが強烈にある。加えて、その要求をひたすら公に発信し続けていくことができるという風土にも、アメリカ文化が持つ独特の「自由」があるようで興味深く思われる。

## ペット動物にも権利を認めるアメリカ

アメリカでは、権利の保障を重要とみなす風土がある。人権についてはもとより、ペット動物に対してさえも、虐待から自由になる権利を謳いさまざまなアクションがとられている。

たとえば、地域によっては、レスキュー隊の車が常時巡回している所がある。これは、無責任な飼い主によって虐待されているペット動物がいなかどうかを確認するため。そのような飼い主が見つければ、レスキュー隊員たちは飼い主から話を聞く。状況により、飼い主はレスキュー隊員が差し出す同意書にサインをしてペット動物を引き渡さなければならない。その後には裁判が始まる。このようなレスキュー隊の活動によって発見され、命を取りとめたペット動物は多い。ある家では、ボクサー犬が複数飼われていて、人間たちのゲームの対象になっていた(賭けに利用されていた可能性が高い)。もともとボクサー犬というのは穏やかな性質だが、人間がけしかけて犬たちが血だらけになるほどの喧嘩をさせていたのである。またある時は、犬が脚を骨折したにもかかわらず飼い主は病院へ連れて行くことを怠り、板と包帯で勝手な応急処置をしていた。別の犬は、耳の中に大量のノミを繁殖させていた。

ASPCA(動物虐待防止協会“The American Society for the Prevention of Cruelty to Animals”)では、被災地やパピーミル(商売のために子犬をつくり出す施設)からのペット動物の救護活動にあたっている。救護されたペット動物たちは、健康チェックと必要な医療を受ける。犬であればトレーナーがしつけをして、引き取りたいと願う家族が見つければ地理的に遠い場所へも届けに行く。救護活動の規模は大きく、最近では2011年10月に、それまで保護していた136匹の(子)犬を超大型トラックで3つの州とワシントンD.C.にあるそれぞれのASPCA提携施設に搬送している。ASPCAが虐待されるペット動物の救護活動に熱心な理由は、設立者であるヘンリー・バーグ氏の意志に基づいている。英語で書かれた主旨を日本語に訳すと、「動物は、人間の手により温かで敬意のある扱いを受ける権利を持っており、法律によって守られなければならない」となる(設立は1866年)。ASPCAでは、虐待されているペット動物以外にも家畜(タ

一キー・牛・馬など) の生活環境を整える活動をしている。動物が安心して健康に生きられるような環境づくりを行うため、動物に関する学習機会が多く設けられている。ASPCA を支持する人々は全米に100万人以上もいるといわれ、寄付金の額も大きい。

### 虐待されるペット保護に消極的な日本

アメリカではペット動物を虐待から守るという意識が、市民レベルで高い印象を受ける。活動の規模は大きく大胆で、対応もスピーディだ。問題が起こってから動くのではなく、「今起こっている問題はないのか」という姿勢で、調査を積極的に進めている。それでは日本では、虐待されるペット動物に対する保護活動の実状はどのようになっているだろうか。

まず、アメリカのように動物のレスキュー隊が見回っているという話はほとんど聞いたことがない。日本では、捨て犬の通報が入った後や、ブリーダーが飼育を放棄して明らかに近隣住民が迷惑しているという情報が入った場合などにはじめて、警察や獣医師が動くという印象を受ける。

しかし日本にも、数多くのペット動物の保護団体が存在する。運営の規模は団体によって異なり、すべてが大規模というわけではない。多くの保護団体は、地域の保健所から積極的に犬や猫を引き取る活動を行っている。犬や猫たちは保護されると、団体ごとに運営する施設に移動して健康チェックを受ける。必要ならば医療も施される。その後、施設で暮らして新しい飼い主を待つ。定期的に譲渡会を開いて新しい飼い主を募集する団体は多い。施設ではなく、団体メンバーや主旨に賛同するボランティアが自宅で4～5匹ずつ預かることもあるが、預かりボランティアは常に不足しており、インターネットなどでボランティアの募集呼びかけが続く。このような活動は、団体メンバーやボランティアたちの犠牲的精神の上に成り立っていると言っても過言ではない。寄付金も大切な財源である。

また、保健所でも職員たちの奮闘がある。迷い犬や迷い猫は保健所が保護するが、収容期間は7日間。この期間を過ぎると、引き取り手のない犬や猫たちは、ほぼすべてが殺処分される。そのため、職員たちは7日間のうちに最善の努力をする。迷子の情報をインターネットに載せ、健康診断

## 29 Day2 自由世界の中の不自由と向き合う旅

を行う。捨てられている犬や猫たちは、不衛生な状態であることが多く、予防注射を受けていないことなどから病気であることも多い。ブリーダーに必要とされなくなった雌犬も重い病をかかえていたり、乏しい感情表現しかできない場合がある。人間に虐待されてきた犬などは、吠えることが多いし、虐待を受けていた部分の骨が極端に弱っていることもある。飼い主から捨てられた犬は、慣れない人間になかなか心を開かない。多くの保健所では、収容期限が過ぎて引き取り手のなかった犬や猫たちの里親探しに尽力している。

### **ペット動物に自由の権利を与えるか**

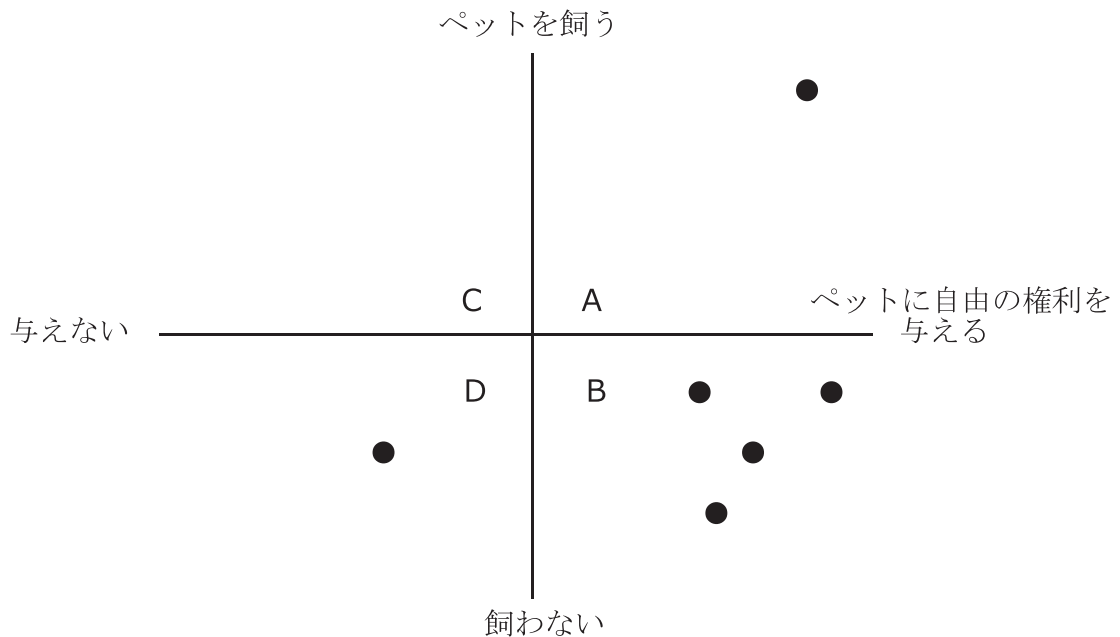
虐待されるペット動物への対応について、アメリカと日本では温度差があることが見えてきた。ペット動物が虐待から解放されて自由になることは当然望ましい。そのため、「虐待」に焦点を絞り虐待から自由となる権利について考えてきた。それでは、虐待されていないペット動物に対しては自由となる権利を与える必要はないのであろうか。この問いに向き合うためにクルーと共に共創することになった。しかしその際、いきなりこの問いに向き合うのは難しい。そこで、共創クルーと一緒に考えた結果、「ペット動物を飼うか・飼わないか」も視野に入れて考えてみることにした。

☆ 共創マトリックスの世界によろこそ！

【設問】 ペット動物を飼う自由とペット動物の権利についてどう思うか

タテ軸： ペット動物を愛好する(飼う)・愛好しない(飼わない)

ヨコ軸： ペット動物に自由の権利を与える・与えない



**Aゾーンの意見 (ペット動物に自由の権利を与える・ペット動物を飼う)**

- 自宅で犬を飼っている。この犬は、保健所から引き取られた犬たちが集まるシェルターから避妊代と注射代のみ支払って、格安でもらってきた。この犬がそのまま同じシェルターにいたら、よりよく生きる権利はなかったと思う。犬は歴史の中でペット化されてきたので、1匹では豊かに生きられない。

**Bゾーンの意見 (ペット動物に自由の権利を与える・ペット動物は飼わない)**



## 31 Day2 自由世界の中の不自由と向き合う旅

- 動物はかわいいけれど、最適な環境を与えられないのでペットとしては飼えない。仕事で小学生の子どもたちと接していると、想像もしないような所で、面白さに出会うことがある。子ども達とやり取りする中で面白さが十分あるので、ペットなどは飼う必要はない。
- 動物から自由を奪うのはまずい。ペットから人間である自分が癒しをもらうということは、動物の自由を奪うということがある。知人が猫を飼っているが、自分の孫が遊びに来る前に爪をきれいにしたり（子どもを傷つけないように）、自分が旅行に行く時には電話を掛けると猫のために一定量の餌が自動で出てくる機械を設置しているのでそれを利用したり。本人は猫をかわいがっているつもりのようなのだが、傍からだと虐待と同じに見える。本当にその猫がかわいいなら、猫にとって自然の状態を与えることが必要なのではないか。知人は、野良猫を引き取ったということで、猫に生きる権利を与えたと言うが、家の中に閉じ込めてしまっている。
- 犬などはもともと野生だったものを、人間のエゴでペットにした。生殖機能も奪ったりしている。人間の業だ。原罪を反省して、野生に戻す活動をするべきではないか。キューバでは、ホテルの近くに犬、猫が多い。それを誰も咎めない。犬や猫は、レストランには入ってこない。日本であれば、ホテルの敷地内に猫が入ったとすれば、従業員が追い出すだろう。そのホテルの敷地に入った猫には、観光客が餌をやっていた。道路では、犬がそこかしこで寝そべっているが、現地の人誰も何も言わない。
- 原罪ではあるが、それでも犬はペット化してしまったので、共存を提案する。ペットにも生きる権利がある。家の中で飼うよりは、自由にさせられれば良い。番犬や盲導犬として共存してきた側面もある。

### Dゾーンの意見 （ペット動物に自由の権利を与えない・ペット動物は飼わない）

- 人間とペットは主従関係にあるので、ペットに自由の権利は与えられない。

## ■共創マトリックスから見えてきたもの

今回の共創マトリックスでは、「ペット動物に自由の権利を与えるが飼わない」とするBゾーンにマグネットが集まった。そのほかは、Dゾーンの「ペット動物に自由の権利を与えないし飼わない」とするペット動物権利否定派と、Aゾーンの「ペット動物に自由の権利を与えるし飼う」というペット動物権利支持派であった。

縦軸の「ペット動物を飼うか・飼わないか」では、①ペット動物に魅力があるかないか、②行き場のないペット動物に手を差し伸べるか否か、③時間的・経済的な制約を受けているかいないか、という3つの判断基準が見えてきた。

一方、横軸には、ペット動物を完全に人間の従属物とみなしている意見（Dゾーン）と、ペット動物を人間と共に生きる存在だとみなす意見（AとBゾーン）がある。このことから、ペット動物と人間の関係性の違いが見えてきた。つまり、「支配－従属」の関係と捉えているか、広い意味での「仲間またはパートナー的存在」と捉えているかが判断基準となっていることが分かった。「支配－従属」の関係では、ペット動物の存在は認められたとしても自由は与えられない。「仲間またはパートナー的存在」の関係では、ペット動物の存在は認められて自由も保障される。

ペット動物に自由を保障するのはAゾーンとBゾーン。これらのゾーンは、どう違うのだろうか。Aゾーンでは、人間が思いつけるだけの自由をペット動物に与える。たとえば、医療（救急病院など）・食料や水（健康志向の製品など）・おやつ（バースデーケーキなどのスイーツなど含む）・住まい（アニマル・シェルターを含む）・おもちゃ・ドッグラン（毎日の散歩）・宿泊施設（ペットと泊まれる宿、外出時にペットを預かるサービスなど）・美容院（シャンプーや爪切り、トリミング、染毛、マニキュアなど）・おしゃれな服等。人間がペット動物を平等とみなす意識が高まるにつれてペット産業も伸びていく。しかしこれらの自由はすべて、ペット動物が本当に望んでいる自由だろうか。人間が押しつけている自由も含まれているのではないか。とすればこれも「虐待」と言えるのではないだろうか。虐待を受けているペット動物は不自由である。

Bゾーンではペット動物が求める自由を人間が尊重することで互いが共生パートナーになれるとしている。ペット動物の自由は自然の中で暮らすことで最大限保障されると考えられるため、人間に飼われることはペット動物に不自由を招くということになる。しかし、「ペット化」されてしまった動物たちを自然に返すには長い時間と賢い知恵が必要であろう。盲導犬の例を挙げてペット動物と人間は共存できるとする意見もあった。この提案に、ペット動物と人間が共生パートナーとして暮らしていけるヒントが隠されているのではないだろうか。

ペット動物は不自由であるがゆえに自由となる権利を考える旅であったが、この旅を通じて、ペット動物が望む自由を人間が本当に理解・実現することは不可能ということが見えてきた。従って、ペット動物は永遠に不自由であると言わざるを得ない。しかし、不自由の中に自由はないのだろうか。人間も不自由を感じている。不自由から自由は生まれないと思いつくことによって、不自由な状況に「ペット化」されてしまわないだろうか。反対に、自由と思っている世界が思い込みで現実是不自由に陥っていることもあるかもしれない。

この共創の旅では、アメリカから不自由な弱者に与えられる権利や“不自由”なペット動物に自由となる権利を与えるべきか、という問題をめぐって自由世界の中の不自由と向き合った。そこから、不自由な世界の中にこそ本当の自由があるのかもしれないことに気づいた。次回は、虐待されるペット動物から問われている虐待性の判定基準（ボーダーライン）やペット動物も人間も共通して持っている「いのち」とは何か、探る旅と一緒に飛び立ってみませんか。

#### ■ちょっと一言

社会的弱者の人権に絞れば、社会的弱者が犯罪を起こし、その犯罪者が犬の訓練によって自立再生していく過程を以前 TV で見たことがあります。「社会的弱者にとっての動物の役割」というようなテーマも考えられるのではないかと思います。

## 第4話 パナマ

### パナマの先住民エンベラー族の村を訪ねて

旅は心の栄養ドリンク、しばらく飲まないで心が活力を失ってしまう。そう考えている平ちゃんが、パナマの先住民エンベラー族の村を訪ねた。時は、2007年8月。きっかけは、NGO団体ピースボートの地球一周の船旅に参加したことによる。

この船は、6月9日に横浜港を出港して、アジア・中近東・地中海・西欧・北欧を經由して、ニューヨークから中米へ向い、8月18日午後1時に18番目の寄港地となる、パナマ運河の大西洋側のクリストバル港に入港した。この寄港地で平ちゃんが期待したのは、熱帯の密林の奥深い所に居住し、近代文明から隔離された先住民エンベラー族の村を訪問して彼らの生活文化に触れることであった。

パナマ共和国には7つの先住民族（人口の7%）が居住しているが、事前の船内講座で、クナ族の人からその文化についてレクチャーを受けていたので、ますます期待感が高まる。

さて、入国審査を済ませて上陸し、このツアーに参加する80人と共に港からバスに乗り、コロン市内を通り抜けて、熱帯林が生い茂る山道へと向かう。30分ほどで川岸の船着場に着く。船着場と言っても、草むらの川岸に丸太を打ち込んで板を並べただけの簡素なもの。そこには、屋根のない船外機付きの伝馬船のような小型ボート6隻が川面に浮かんでいる。岸辺には1隻しか着岸できないので、15人ずつ順番に救命具を着けて乗り込んでいく。エンベラー族の

船頭さんは、上半身が裸で下半身は腰巻姿で頭に白い鉢巻きをしている。やがて、船頭さんの合図でゆっくりと川下へと進む。

この川は、パナマ運河の中間地点にあるガトゥン湖へつながっているようだ。川幅は20メー



## 35 Day2 自由世界の中の不自由と向き合う旅

トルぐらいで、水流は感じられないほど緩やか。兩岸はうっそうと茂った密林で、所々に野生のバナナの木が生えている。時々野鳥の鳴き声が聞こえ、数頭の牛が放牧されている風景も見える。まさに熱帯のジャングルを進む探検隊のような気分になっていく。

エンベラー族は、パナマの東部から隣国コロンビアにかけての密林で、森の恵みを受けながら狩猟と農耕の自給自足の伝統的な生活を守り、独自の文化を誇っている部族で、茶褐色の皮膚に黒髪黒目のモンゴロイド系。その数は約3万人とも言われ、自治権が認められているようだ。

この国は1903年に、アメリカの画策によりコロンビアから独立し、



現在は人口340万人、1人当たりGDPは7130ドルほどで、首都パナマシティは、超高層ビル群も林立する近代都市。1914年に竣工したパナマ運河は、長さ65キロの閘門式運河で有名。

ジャングルの川を進むこと約40分で、丸太の船着場に着岸。草

むらに一本の細い道がある。この奥が彼らの集落らしいと予感した。

やや高い丘に、草葺きの家らしきものが建っている。近づくると、鮮やかな花模様の巻きスカートに、胸部は繊細な刺繍の入った幅広の装飾を身につけた婦人たちが出迎えてくれる。体は黒色の幾何学模様のボディペイントで全身を飾っている。首には何重もの色鮮やかなネックレス、手首にも同様にブレスレットをはめている。いかにも南国的な美的感覚に溢れた姿に驚くと共に感動した。

家の中では、笛や太鼓を持った上半身裸でふんどし姿の男性が待っている。家と言っても、直径20メートルほどの円形をした土間の周囲に丸太を立てて、屋根は四角錐に



丸太を組み、上に椰子の葉を幾重にも重ねてあるだけの素朴なもの。

世話係の男性が「ようこそ。エンベラー村に来てくれてありがとう。皆さんを兄弟姉妹だと思って歓迎します。私たちは、政府の支援なしで、自ら民芸品を作って町で販売しています。女性は装身具を手作りし、男性は木彫りの民芸品を作っています。今日は私たちの文化と生活を見てもらい、大いに交流しましょう」と挨拶した。彼は公用語のスペイン語を話せるが、集落内では部族語を使うそうだ。

集会場の隅には、民芸品が数多く並べられている。植物繊維を材料にした籠や皿や小物入れ、ビーズや貝で作られた首飾り・腕環などのアクセサリ、木彫りの鳥やカメ・ワニなど、竹笛や魔除けの仮面など、いずれも部族独自の感性と手先の器用さを感じる品々。私たちは、それらの品々を見学し、製作工程や込められた意味などの説明を受ける。一部の人は、土産として買い求めている。

## 自給自足でエコライフ

平ちゃんは、外の様子を見に行った。近くにバナナ畑があり、草葺きの高床式の家が林の中に点在している。その周りに鶏が放し飼いされている。電柱や電灯は無いから電気は使われていないのだろう。日本の静岡県にある登呂遺跡の原風景を彷彿とさせる眺めである。

集会場に隣接した草ぶきの小屋では、女性たちが料理をしている。大きな鍋で魚の揚げ物を作っている。燃料は薪で子どもが手伝っている。その横の台では、女性たちが大きなバナナの葉を丸めて魚のフライと蒸したタロイモを包んでいる。これが我々の夕食になるのだと思った。これを見て平ちゃんは、戦後間もない小学生の頃に、母親がタケノコの皮でおにぎりを包んで弁当に持たせてくれたことを思い出す。

そうするうちに、接待係の男性が「夕食の用意が整ったので、皆さん、どうぞ」と言う。我々は、バナナの葉で丸めたお弁当をいただく。フライもタロイモも結構な味わい。デザートには、台に並べられたスイカ、メロン、バナナが食べ放題である。果物は山に行けば十分にあるのだろう。

川で魚を釣り、畑でタロイモを作り、山から果物を取って、自給自足の生活を営むのが彼らの暮らし。我々の生活との乖離を感じた。現在の地球環境問題を思う時、彼らの生活は公害を発生させない。真にエコライフで、シンプルで自然に密着した暮らしにビックリ。社会的にも、部族が一体となり、自立した平和な伝統的な日常生活が展開されている集落。



文明社会に暮らす私たちには、彼らの真似はできない。しかし、文明の産物を過剰に多用しないで、少しシンプルにすることは可能なのではないか。そんなライフスタイルを心掛ける反省を、彼らは呼び掛けているのではないかと思った。

夕食後に彼らが踊りを披露してくれた。男性が笛と太鼓を奏で、女性たちが鳥の踊りと猿の踊りをリズムカルに順々に演じてくれた。我々も手拍子を打ちつつ体を動かし共鳴する。次第に盛り上がりを感じたのか、接待係の男性が「一緒に踊ろう！」と呼び掛けてくる。皆で輪になって踊った。

次は、私たちの返礼として、日本の歌「上を向いて歩こう」を手拍子を打ちながら合唱した。こうした交流をしている内に夕暮れ時となり、別れのボートで帰路についた。

## 厚着した文明の衣

衣食住のどれを見ても、原始的とも言えるエンベラー族の暮らしは、我々の生活から見ると貧しいとも言える。しかし、その貧しさの中に、文明社会には無いキラリと輝く人間の暮らしの原型を感じた。それは、老若男女が仲良く元気に楽しく暮らすエコライフの姿ではないのか。

大昔、人類は森の中で暮らしていた。それが18世紀後半からの産業革命が工業化を急速に進め、近代文明社会へと世界は大きく変化していった。人類の永い歴史からすると、僅か二百数十年の間に、加速度的に文明化・

近代化し、今や大量のエネルギーを消費する高度工業社会・高エネルギー社会となり、さらに金融経済・情報経済社会となっている。ますます森の暮らしが遠くなった。

その結果、自然の秩序を破壊する地球環境問題が生じ、一方、核兵器や無人兵器のような超高度にハイテク化した軍拡競争が平和秩序を脅かしている。人間が創り出した文明が、人間を不幸にする方向へと働いている。

人間が制御できない文明なら、自然回帰するという方法もあるが、一旦、文明の利便性や快適性を味わった現代人にとっては不可能なこと。しからば、自然回帰はできなくても、自然接近を試みることは可能なのではないか。つまり、文明の有形無形の「衣（ころも）」を厚着から薄着に変えることです。

文明国と言われる国々には、モノが豊富に溢れ、多様な情報が洪水のように流れ、選択の自由に満ちている。このような社会では、カネさえあれば自由が拡大すると考えて所得増大に邁進し、ややもすると人間の欲望は暴走して、物質中心・カネ中心の風潮に溺れてしまう。その結果、高度ストレス社会・高コスト社会になってしまっている。

何事も、“過ぎたるは及ばざるが如し”。シンプルライフ、スローライフの考え方に自分を近づけると、おのずと文明の衣は薄着になり、重装備から軽装備の楽な世界が広がるのではなかろうか。

### 貧しさの中の豊かさ

こんな思いに耽りながらも、小さなボートは、エンペラー族の船頭さんの操縦で、森の中の静かな川をゆっくりと進んでいく。同船した隣の人が「今日見たのは、外国人向けの観光ショーだろうね」と話していたが、平ちゃんは何も言わずに聞き流した。

ショーと見るか、暮らしの原型と感じとるかは、人それぞれの自由である。しかし、旅を人生に例えると、どの“考える自由”を取るかで、その人の得るものや人生は大きく異なる。

考え次第で、貧しさの中にも豊かさがあり、豊かさの中にも貧しさがあるのではなかろうか。平ちゃんにとって今回の旅も心の栄養ドリンクと



なった。

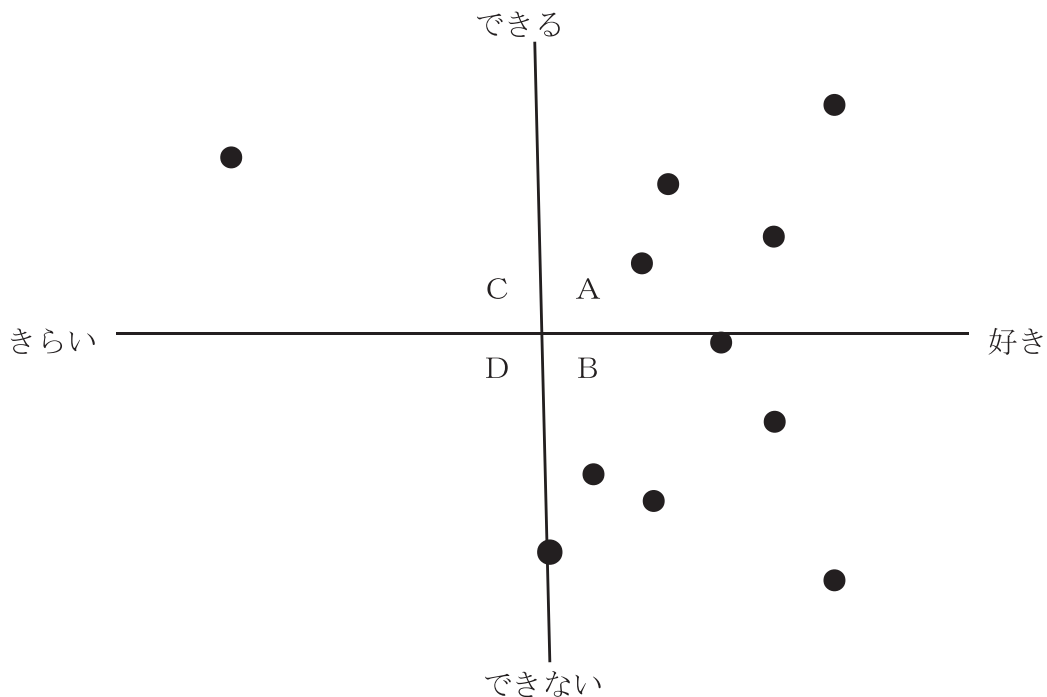
そこで、この旅をヒントにしながら、ライフスタイル研究会のメンバーと一緒に「自然に近い暮らし」をテーマとして共創することにチャレンジしてみた。

### ☆ 共創マトリックスの世界によろこそ！

【設問】 自然に近い暮らしについてどう思うか

タテ軸： 自然に近い暮らしができる・できない

ヨコ軸： 自然に近い暮らしが好きだ・嫌いだ



#### Aゾーンの意見 (自然に近い暮らしが好き、できる)

- 幼児体験が大きく影響しているように思う。自然に囲まれて育った環境は今も自分の肌になじんでいる。
- 現在住んでいる所での自然を考えると、あまり自然を楽しむという生

活にはなっていない。老後の楽しみはお金を使うことだけではないので、お金を使わず自然を楽しむ生活をしたいと思う。今の場所にもある自然に気づかずに生活していることが多い。

- 自然の中に向かっていくというより、今の自分の生活の中に自然を取り込んでいく。自分の心地よさを追求して自然を楽しみたい。
- 自然の中で暮らしたい願望がある。自然の変化を感じられる生活がよい。自分にできる範囲で自然に近い生活をしたい。

#### AとBの線上 (自然に近い暮らしは好き、両立できる)

- 自然に近い生活スタイルは好きだが、自給自足はできない。今住んでいる場所で生きる。社会生活を営む上で共同生活をせざるを得ない。時間的なゆとりを利用して、自然に近いところでボランティアなどを行い自然を味わっている。

#### Bゾーンの意見 (自然に近い暮らしは好き、できない)

- この日本で1億2千万人が自給自足できるかという点とまず不可能。人口が半分になれば可能かもしれない。自然派生活は、カッコよくみえるし、したいと思うがたぶん難しいだろう。現実の社会との接点を考えると、教育・近所付き合いなど問題は多い。
- 山は好きでよく歩く。過疎になった限界集落での体験生活に行った。若者が出て行って6千人が2千人ぐらいに減った。体験生活としては楽しいが、時々行くぐらいが限界で住むのは無理。自分には住めない。便利には勝てない。
- 野原の一軒家に住むことはできない。
- 便利一辺倒の生活を追求するのは反対。むしろそこにあるものを使って工夫するのは好き。無農薬野菜だけしか買わないとか、すべてをペットボトルの水に頼るような生活はしない。ある程度の便利さに対するコストは覚悟。それを越えて自然に近くというのは無理。

**BとDの線上** （好きでも嫌いでもないが、できない）

- 自然志向に偏ると全体を見ないところが嫌い。自然に素直に逆らわないスタイルが好き。

**Cゾーンの意見** （自然に近い暮らしは嫌い・できる）

- インドの大学のキャンパスには時計がない。不安になるが、それでも学内のシステムは動いている。病院嫌いの妻は病気になっても病院に行かない。大丈夫かと思うが自分で治す。

**■共創マトリックスから見えてきたもの**

この共創マトリックスの参加者は11名だったが、大半はAとBのゾーンに集中し、2つのゾーン各々4名で計8名という結果であった。

つまり、大半の人は好きであるが、「できる・できない」では半々の分布になっている。都会生活者にとっては、身に付いた便利さや快適さを手放すことは簡単ではない。

次に意見の内容から見ると、暮らしの外の自然環境は大いに重視するが、内面的な生活の仕方（質実・簡素・素朴・余裕・共生など）にまで、自然重視とは言い切れないことが見えてくる。エコライフ・シンプルライフ・スローライフといったイメージは、言葉では理解できても生活の中に取り入れることは容易ではない。

かつて、ルソー（1712～1778年、フランスの思想家）が唱えた外も内も「自然に還れ」は、遠くなったのかもしれない。設問で投げかけられた言葉から、参加者が自由に思いを巡らし連想して、次々と発表し、刺激を受け合って、会話が進む。連想が連想を生む過程が、あたかも連想ゲームのように楽しいことに気がついた。自然環境の破壊や精神の荒廃が問われる時代だからこそ、より深く「暮らしを考える」機会が必要なのではないだろうか。

### ■ちょっと一言

パナマの先住民の暮らし、文化に興味が湧きました。ピースボートはこんなところまで行くのですね。自然に近い暮らしが好きか嫌いか、できるかできないかは身近なテーマでした。

## Day 3 豊かさを考える旅

### 第5話 イタリア

#### シエナのコントラーダ（住民自治組織）

兼ねてから念願だったイタリアを、葉っぱさんは家族と（2011年11月）旅した。古代から近代まであらゆる時代の史跡の宝庫であるばかりでなく、多彩な分野の芸術・食文化が充実している国。イタリアが統一されたのは約150年前。それまでは地方ごとに独立した国家だったこともあって、街ごとに違った魅力がある。葉っぱさんがイタリアを旅して感動したのはシエナにみるコントラーダだ。

「スリにご用心！」と、添乗員さんからたびたび注意を促された旅であったが、シエナはそんな心配が全くいらず安心して歩ける街。イタリアではここくらい。シエナのコントラーダと言われる住民自治組織が安全を作り出している1つの要因になっている。各コントラーダは集会場や教会など住民がより所とする都市資産を持ち、住民の自治組織で運営されている。住民はこのコントラーダで幼い頃から様々な機会を通して濃密な付き合いをしている。

シエナはイタリア中部のトスカーナ州にある。トスカーナ地方は緩やかな丘陵地帯が広がり、ぶどう畑やオリーブの森の風景が大変美しい、実り豊かな大農業地帯。野菜や肉牛、ワインで有名なところでもある。

旅の途中、農家の経営するレストランでは旬の食材をいかした料理を堪能できる。そこは家族経営のレストランで、代々母親から受け継いだ家庭の味を自慢のメニューと言って提供してくれた。「愛情が家庭料理に詰まっているの。美味しく食べてくれるのがいちばん嬉しい」と店の人（母親）は微笑みながら話す。「料理はやっぱり愛だと思う。料理に込められた思い、これが最高よ！」と。

シエナは中世から続く競馬の祭典パリオが行われることでも知られている。1995年に世界遺産に登録された歴史地区は城壁に囲まれた丘の上の

旧市街地で、いまでもシエナの中心市街の機能を果たしながら、中世そのままの姿を保持している。

城壁の中に入ると、古いレンガ壁の建物が続き、その間の路地を進むと、そこにはピザの店、アート作品の店、本屋などが続く。八百屋では店構えや野菜のディスプレイにイタリア人の優美なデザイン感覚が微笑ましく感じられる。シエナは古くから



金融業が盛んで、イタリア最古の銀行の本店も営業している。立体の迷路のような路地をさらに進むと、街の真ん中には明るくて、すり鉢状の地形に広がった大きなカンポ広場があり、一面にレンガが敷き詰めてある。レンガの上に横になり昼寝をしている人、楽しそうに会話をしている学生や老紳士達、子供を遊ばせているお母さん・・・それぞれ思い思いのスタイルで日向ぼっこを楽しんでいる光景に出会う。

### シエナのパリオに見る絆

ここシエナでは、現地ガイドさんが大変興味深い話をしてくれた。

「シエナのいいところは街に出れば、必ず話し相手に出会うこと。みんな知り合いで、カンポ広場はみんなの居間のようなものなのです。シエナの旧市街には17のコントラーダと呼ばれる地区（住民自治組織）があって、ワシ、イモムシ、カタツムリ、フクロウなどそれぞれのコントラーダ固有の名前で呼ばれ、そのシンボルを旗印にしているの。人々は生まれたところのコントラーダに所属して、たとえ夫婦が別れるようなことがあっても、コントラーダとのお付き合い



は一生続くもの。コントラーダは“深いつながり”で人々の“心”そのも

のなの。500年以上の歴史があり、それぞれの中に本部や教会、博物館、キッチン、集会場などを持っている。コントラーダのメンバーは、普段から自然体で付き合いをしているし、毎週、夕食会を開いて手料理を囲むその絆は家族も同様。日頃から助け合っているのです」

「パリオは熱狂的な伝統行事で、コントラーダ対抗の競馬で、1644年から毎年続いています。パリオの前夜、各コントラーダは明日の本番を前に華やかな夕食会を繰り広げ、一方、馬屋の前では大切な馬を守るため、寝ずに番をするメンバーたちの姿が見られます。コントラーダのすべての人々がパリオの中で何らかの役割を持ち、



すべての人々がそのイベントに心躍らせます。広場を3周、時間にするとたった1分半の競馬だけど、パリオはシエナ人がお互いに精神を鼓舞しあい、自分たちの結束を確認する誇り高き競馬。シエナ人はこの日のために生きていると

いっても過言ではないほど熱狂的になるのよ」

※写真はいずれもユネスコホームページより

## 人生の豊かさとは

9日間の旅であった。歴史と自然が豊かに結びついているトスカーナ地方の美しさは格別素晴らしかった。そして、イタリアは家族を大切にする母性的な社会であり、また、コントラーダに見るように、地域ごとのコミュニティのホットなつながりを持つ社会であるという印象を受けた。人と人とが有機的なつながりをもつコミュニティの存在に心が動いた。

私たちは日々、自由で豊かな生活を味わっている。この生き方を支えているものは、豊かな物質生活、消費生活の要素が大きい。その中で生きづらさ、将来への不安、孤独感を感じることも否定できない。モノの豊かさはあくまで見える現象としての豊かさであるから、精神的豊かさを伴わなくては幻になってしまいそう。人生の豊かさとは何なのか。心のよりどころはどこにあるのか。イタリアから知恵を拝借してみるのもいいかもしれない。

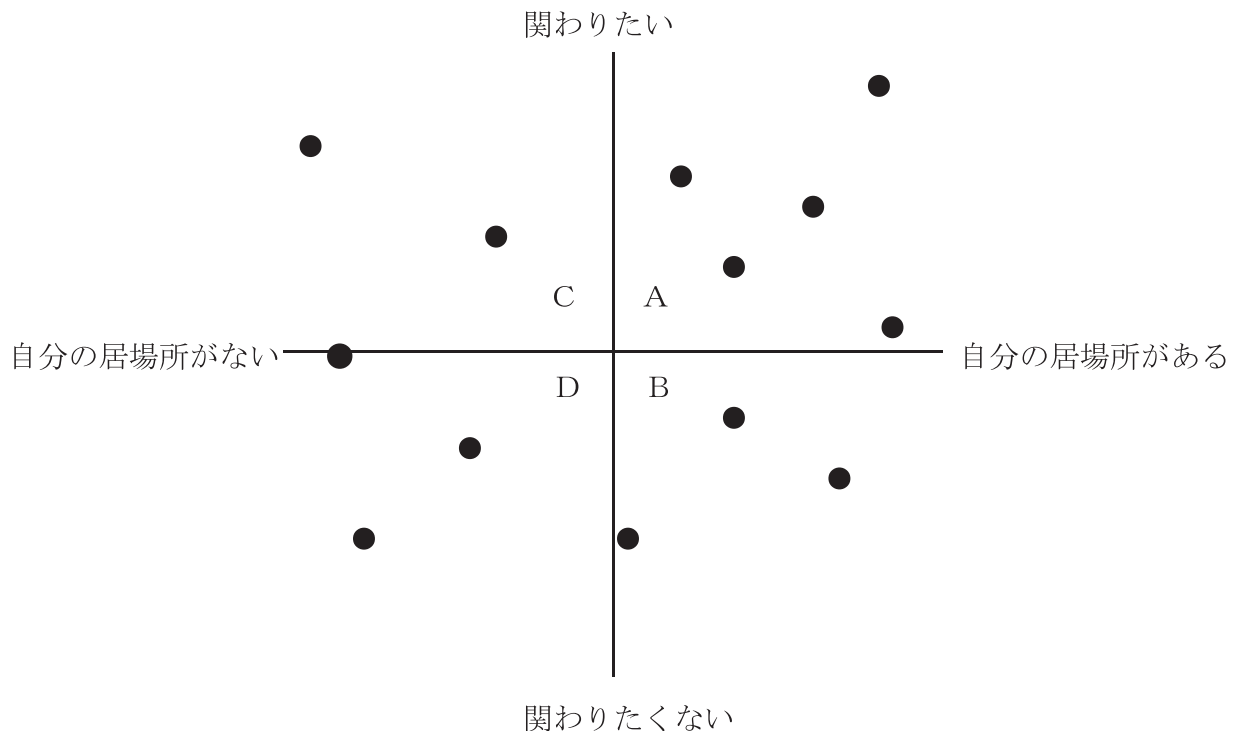
☆ **共創マトリックスの世界によろこそ！**

葉っぱさんのイタリア旅行の話を書いたメンバーから、「シエナの街から提起されている豊かさの問題は、地域のコミュニティとの関わりではないだろうか」という問いが投げかけられた。つまり、地域のコミュニティに関わることが精神的に豊かにするのではないかという問題提起です。

【設問】 地域のコミュニティへの参加についてどう思うか

タテ軸 地域のコミュニティに関わりたい・関わりたくない

ヨコ軸 地域のコミュニティに自分の居場所がある・ない





### Aゾーンの意見 （関わりたい・自分の居場所がある）

- 関わりたい気持ちはあるが、あまり生クサイべたべたしたのは関わりたくない。水が流れるようにサラサラした関わりはやってみたい。市民講座を持っている。学びを通していきいきとしたコミュニケーションできる関わりをもっていきたい。私はこのようなネットワークができています。
- 人間は一人では生きていない。いろいろな人のいろいろなつながりのなかで生きている。みんな地域の中で贅沢を言わなければ居場所がある。私は市内、県内、海外にそれぞれ 関わりと居場所をもっている。
- 団地に25年住んでいる。子供の学校、商店街、自治会などまあまあ居場所がある。できるだけ関わっていきたい。
- 個人的なコミュニティはすごく関わっている。NPOの活動、オープンカレッジ、生協の共同購入の仲間、ご近所の友人など。しかし、自治会はやったら疲れるだけ（体質古い、考えがちがう、長年同じ顔ぶれ）
- 家族形態により関わりかたはいろいろだと思う。以前のマンションも今住んでいる所も助け合い、防犯パトロール、公園ではラジオ体操、運動会などが熱心な町内会。誘いがあった時、それをきっかけにいろいろ参加してみたい。

### Bゾーンの意見 （関わりたくない・自分の居場所がある）

- 以前、小学校の役員をしていた時、町内会長に子供たちの安全策の件で頼みにいったら受けてもらえなかった。また、敬老の日に子供たちが一人暮らしの老人に桜草の鉢を配るのを見守る役をやった。「なぜ、一人住まいでいることがわかったのか」と後でお叱りの電話があったと聞く。地域でいろいろやろうとすると、いろいろなことがあって落ち込むことがあった。
- テニス、オープンカレッジ、オンブズマン活動、市民運動などその中へ入っていききたいからやっている。有機的に結びついているのが自治会かなと思うが、そんなふうに運営されていない。知り合いで、やり

たくないから自治会員をやめたという人はけっこういる。自分は必要最小限のことはやるが、構成員である以上、居場所はあると思う。積極的にシニアを引っ張りだせばよいが、「そんな面倒くさいこと、火中の栗を拾うことはない」とチョッとひらめくともうダメですネ。

- 住民税を払っているので居場所はあるかな。疎外感を感じていない。仕事が忙しくて地域のことは関わりたくない。しかし、好きなことならポーンと行ってしまう。いつも好き嫌いで判断して動いている。

### Cゾーンの意見（関わりたい・自分の居場所がない）

- 理想はAゾーン。66歳でリタイアしてマンションの理事長を仰せつかった。自転車の置き方がだらしがないので、会社でやるようなルール作りをしたら受け入れられなかった。それではと町内会に行ったら、そこは老人会でお門違いだった。自分は小学生の送り番、勉強の面倒見などの仕事がよいと思ったが、コミュニティにはなかった。現実には居場所がないが、まだ関わりたい気持ちは持っている。
- 以前は関わることは面倒くさいという気持ちが強かった。今は一生懸命関わってみたいという気持ちがある。

### CとDの線上の意見

- 自分は管理人がいろいろやってくれるマンションに住んでいるが、両親が住んでいた一戸建ての家が空き家になったのでそちらも管理している。空き家ではゴミの出し方や当番について聞くと、近所の方からいろいろな情報をもらう。地域の関わり方を初めて体験した。不安になってしまいあまり深くは関わりたくない。

### Dゾーンの意見（関わりたくない・自分の居場所はない）

- 自治会では今、役目を持っていない。近所の人たちとのお付き合いはしている。あと5年以内に地域を移る予定をしている。将来、移ってからは地域コミュニティに関わっていきたい。
- 2年前、町内会の副をやらされた。世話になった人でもあり、病気を

したその人に同情して役をやった。町内会長もその後変わり、その人とは価値判断が違った。仲良くなっていくことができず喧嘩して辞めた。本当は、自分は居場所がほしい、関わりたい。しかし、居場所がなくなるような羽目になってしまったので、ついこうなってしまった。

以上がマトリックスで展開されたやり取りの概観。マグネットは4つのゾーンに散らばって置かれた。しかし「コミュニティは楽しい！」という魅力が入ると、積極的に関わりたいというゾーンに移りそうな人がほとんどであるような印象を受ける。

日本における地域のコミュニティは市町村の地区単位で組織化されており、町内会あるいは自治会として存在している。しかし、商店街が衰退してきたり、空き家が増えたり、マンションが増加したりなど、これら既存のコミュニティに参加する者は減少傾向にある。

一方、特定の地域問題において社会貢献を目指すNPOや市民グループなどのテーマ・コミュニティが活発に活動している。ボランティア活動で社会に対し退職後に積極的に関わる人が増えている。このようにコミュニティのあり方も多様化してきている。

## ■共創マトリックスから見えてきたもの

これらのことを加えて、マトリックスから見えてくるものは「積極的に関わりたい地域のコミュニティとは何か？」という問いかけである。それに対して「あの街なら住んでみたい！という気持ちにさせる街づくり」という意見があった。

“いい街をつくろうという情熱を持とう！” 日常生活の中にリゾート、例えば“祭り”がある。祭りがあると、家族の活性化が起り、強いつながりが生まれ、活動的になる。地域の人たちが知り合い、つながり、仲良くなり会話がはじまる。そうして地域が活性化してくると、異なった世代間の交流が生まれる。ヤングもシニアもお互いに助け合う。そこには信頼が生まれる。

自分の出来ることで関わればよい。自分が動いたことで、いろいろなこ

とが見えてくる。今まで、面倒くさいと避けてきた“人と人との関係”、実はその“関係”中に宝が隠されている。そのような思いが強くなった。

### ■ちょっと一言

イタリア、シエナのコントラーダでは、毎週夕食会が開かれており、パリオという伝統行事ではすべての人が役割をもっているとか。この点が共感できました。食は人をつなぐ最適な要素ですし、組織はすべての人が役割をもって主体的に動くとうまく機能するようですから。

全国のいろいろな福祉施設取材する機会がありました。高齢、障害は個性のひとつ、それを逆手にとって一人ひとりができることをすると地域の問題を解決するビジネスとなる。雇用が生まれ、人がいきいきとし、まちが活性化する。そういう地域おこしをしている社会福祉法人が広島県の庄原市にありました。高齢者がつくる農作物を知的障害者が収穫したり、余った農作物を高齢者施設や障害者が就労するレストランで使ったり、ママさんシェフのレストランのとなりに保育所をつくったり、自然体で地域の困りごとをなんでもすぐにビジネスにしてしまうのです。最近では、近くで取れる自然水で水ビジネスも手掛け、売上の一部を共同募金に寄付。障害者が就労し、自分も人の役に立っていることが生きがいになっているそうです。

地域コミュニティって面倒なところですが、ひとつでも自分の役割があるとその人の居場所ができます。それがなくなかなかしんどいと思いました。環境が整備されすぎているとか、きっちり仕切る人がいると、新参者は出る幕がないけれど、不完全だったり不便だったりすると、何かしようと工夫する人が出てきて役割が生まれます。人の役に立っていると実感できることが大事なのですね。

## 第6話 ケニア

### マサイ族の暮らしに出会う旅

マサイ族の青年が近づいてきて、誇らしげに腕をまくりあげた。「これは、ライオンと闘った爪あとなのだ」と言う。それはケニア共和国の首都ナイロビの西方約250キロに位置するマサイマラ国立（動物）保護区内にあるマサイ族の集落での事だった。

ケニアでは国立公園と国立保護区の二つがあり、同じ国立でも違いがある。公園は動物だけが生息する場で狩猟は全面禁止。保護区は動物も生息しているが、人間も住める場所で狩猟も認められている。ただし、ライオンのような保護動物は、人間を襲ってきた場合にだけ殺害できることになっている。この特例によって、冒頭のマサイ族の青年はライオンと闘ったわけである。

平ちゃんがこの青年と出会ったのは、2004年11月にピーター・オルワ（1949年ケニア生れ）さんが案内してくれる「ケニア横断8日間のツアー」に参加した時であった。このツアーは、ピースボートが企画する地球一周の船旅をインド洋のモンバサ港で一旦下船して、北西約500キロ内陸のナイロビまで鉄道に乗る。そこから車に乗換えて西へ向い、人類発祥の地と言われるアフリカ大地溝帯を横切り、ビクトリア湖を目指す。この湖はナイル川の源流で面積は世界第3位で、琵琶湖の103倍もある。湖のすぐ手前にピーターさんが生まれたンゲタ村があり、そこで2泊する。途中で、野生動物の数ではケニア第一のマサイマラ国立保護区に2泊して、マサイ族の人達と交流する。ツアーの目的は、「東アフリカの大自然とマサイ族との交流」であった。

ケニア共和国は、1963年に英国の植民地支配から独立、面積は58.3平方キロ（日本の約1.5倍）、人口は3980万人（2008年）で、その内マサイ族は約30万人とされている。

さて、マサイ族が住むマサイマラ国立保護区での第1日目は、野生動物が自然に近い状態で生息する保護区内を車で探検ドライブする。この保護区の面積は1516平方キロで、ほぼ大阪府全体に相当するが、山が無い。

地平線のはるか向こうまで続く一大サバンナ（一部疎林のある大草原）である。一日中、車で探検してもごく一部に過ぎない。この大地で、放牧生活のマサイ族と野生動物が共存している。想像を絶する別世界が広がる。目にした動物は、象・キリン・シマウマ・インパラ・ライオン・ガゼル・ヌー・ヒヒ・カバ・ワニなど、いずれも群れをなして自然状態でサバンナの方々に生息している。

2日目は、「マサイ族の生活に触れる交流」。朝10時にマサイ族の青年3人が、我々の宿泊するロッジ（堀に囲まれた島状の場所、野生動物を避ける為）に迎えに来た。彼らは、弓矢に盾、ナタ、棒などの道具を腰や背中に持っている。サバンナを歩きながら、道具の使い方を身ぶりで



教えてくれる。早速、木の枝をナタで切り落とした。箸ぐらいの太さの枝を手に取り、先端を口に入れ噛みだした。繊維状になった部分が歯ブラシになり、樹液は胃薬になるそうだ。

次に、手にしたものは木の葉。噛むとミントの味がする。彼らにとっては、チューインガムなのだ。アロエのような葉は、液を絞ってマラリアの薬になるとか。香料に使う木の実も紹介してくれた。

すると木陰から突然、槍と盾を持った青年が現れ私たちに襲う真似をする。びっくりして立ち止まると、彼は笑いながら、「こうして、動物を狩りするのだ」と言う。このようにして、自分たちは身近な自然を巧みに利用して生活しているのだと教えてくれる。

間もなく、集落らしい光景が見えてきた。近づくと、身の丈ほどの枯れ枝を三重に立てかけたフェンス（野生動物の侵入を防ぐ）に囲まれた、直径100メートルほどのサークル状の中に、土壁と草葺きの小屋が20軒近く建っている。内に入ると、50人ぐらいが並んでいる。赤、黄、青といった色彩豊かな民族衣装をまとった人達だ。大人たち男女は、二枚の布を上半身と下半身に巻きつけ、子ども達はTシャツや半ズボンを着ている。

足元を見ると、靴やサンダルを履いている人は3割程度で、子どもは全員裸足。青空のもと、一面の草原を背景に、歌と踊りで歓迎された。

次に、私たちは5～6人のグループに分かれて小屋を訪ねる。電気ガス水道のインフラの無い集落だから、内部は薄暗い。手探りで中に入ると、床は土間で、中央部に囲炉裏があり鍋が置いてある。これを囲んで料理をして食事をする。鍋にはウガリ（白トウモロコシの粉を練って加熱したもの。当地の代表的な主食）が入っていた。この部屋を中心に、夫婦・子ども・物置・子牛の部屋が配置されている。一戸の面積は、目測では3間の4間で12坪ぐらい。建てるには、近隣の人々が手伝い約20日間で完成するとのこと。子牛部屋があるのは、肉食獣が敷地内に侵入して来た時、最も狙われ易いので、小屋の中に寝かせるとのこと。牛はマサイ族にとって貴重な換金財産という事情もある。

牛や山羊は、昼間は放牧するが、夜は集落内に戻ってくる。それを守るために犬を飼っている。ライオンが侵入してくると犬が吠える。次に集落の人が槍と弓矢を持って闘う。冒頭に紹介したライオンの爪あとを持つ青年は、その時に最も勇敢に闘い、集落の英雄になった。

この地域のマサイ族は、6才から小学校に通う。一般的には15才を過ぎると結婚し始める。結婚すると両親の小屋の隣に小屋を建てて生活する大家族制が伝統的パターンで、最近では例外もあるとか。食べ物は、山羊肉・牛乳・野采・トウモロコシ・牛の血など。牛の血は、生きた牛の血管から少量採取して飲む。これは貴重な栄養素だとか。衣服など不足する物は牛を換金して町から購入するとか。

サバンナの大自然の中で、衣・食・住を調達し、大家族の集落で暮らし、時に歌と踊りを楽しむマサイ族の生活。生き活きとした彼らの姿に接して、貧しさの微塵も感じなかった。逆に、大地の恵みに育まれて、伝統的な暮らしに納得し、これで良いのだと暮らしている彼らは、日々充実感に満ちているようであった。地域共同社会、循環型エコロジー社会の原型を発見したような気分になる。現代の日本のように、高度経済社会となり物質文明が発達し、選択の自由に溢れた生活と比較すれば、彼らの暮らしは貧しいと感じる。

確かに、物質文明を基準に比較すれば、貧しさ・豊かさの識別は明白だが、ここのマサイ族の人達はそうした比較をしない。むしろ、大地に生きることを誇りとしているようだった。誇りある人々にとっては、物質的な貧しさなんて関係ない。むしろ、**誇りの無いことを貧しい**と意識しているかのように感ずる。

このことは、ケニアから発せられた日本や私たち自身に対しての問いかけでもある。私たちにとっての「誇り」って何ですか、という問い。また、貧しさ・豊かさとはただ単に物質的あるいは経済的な基準だけではないことにも気づかされる。もしかすると、物質的な豊かさの中で見失っている美德かもしれない。例えば、「もったいない」という心を見失うという貧しさかもしれない。

平ちゃんは帰国してから、2005年に日本を訪れたケニア共和国の環境副大臣故マータイ女史（ノーベル平和賞受賞）が、「日本語の[もったいない]ほど素晴らしい言葉はない」と語っていたことを知る。もったいないを広辞苑で調べると、その意味するところは実に奥深い。マータイ女史は、日本人に、「もったいない」のライフスタイルを誇りにしませんかと問いかけているのだと感じた。

読者の皆さん。是非ここで「もったいない」生き方に向き合ってみませんか。次のマトリックス上に自分の意見をマークしてみてください。そして、一人ではなく、家族の方や友人の方と一緒にやってみましょう！

## ☆ 共創マトリックスの世界によろこそ！

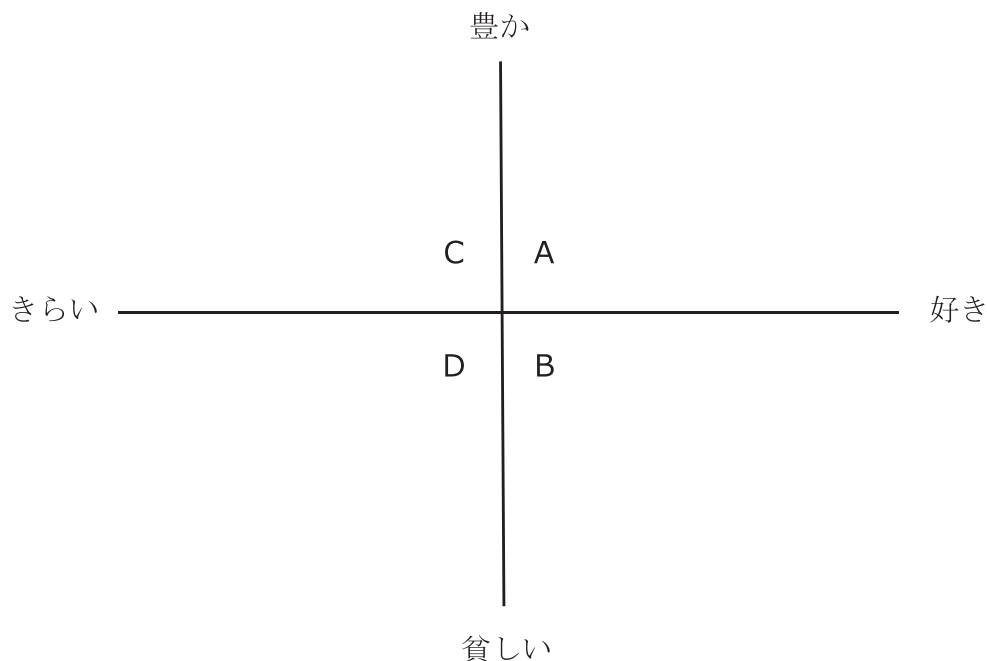
### 【設問】

「“もったいない”を重視するライフスタイル」についてどう思うか

タテ軸：「もったいない」生き方は豊か・「もったいない」生き方は貧しい

ヨコ軸：「もったいない」は好き・「もったいない」はきらい





### ■ちょっと一言

ケニアのマサイ族の暮らしを平ちゃんが教えてくれました。私も比較をしない誇りのある生き方、シンプルな生き方をしてみたいと思います。ものがあふれる豊かさは拒否したい。しかし、周りを見ると、なかなか拒否しきれないこともあるようです。本当の豊かさは内面にあるとは思いますが、都会の街歩きもおしゃれなショップを覗くのも嫌いではない。物は増やさない、衝動買いをしないと強く意識して街に出ています。食材を無駄にしない、残飯を出さないことを心がけています。雑誌はダイエット特集を組むとよく売れるようですが、腹一杯食べて、ダイエットをするのではなく、腹八部にすることが大事。「もったいない精神」は、まずは食糧問題で考えてみたいですね。

### ■共創空間の旅の途中の気づきとして：「豊かさ」って何？

私たちは、豊かで幸せな暮らしをしたいと願い、日々努力してきている。そして、豊かになり便利になると、何を信じ、どう行動するのか、個々人で決断するようになる。そこには自由があるからです。しかし、物質的豊

かさは、心の豊かさをもたらすのでしょうか。お金があれば、あらゆるモノやサービスが手に入る社会です。そんな中で、自分中心に慣れて、他者とのかかわりで心をくたくとも、他者のために行動することも遠のいていきます。そして、お金やモノが多い生活に慣れてしまうと、自分だけを頼みとすることに慣れて、他者に頼る気持ちは薄く、自らを孤立させていく。ものごとをあまり深く考えない水平軸で、精神的深みのないところで生きていくと、むなしさを感じ、悩む力、耐える力がおちていく。そして感性もにぶります。さらには、嫌なことがあるとすぐに身を引く癖を自然につけてきた。その結果、漠然とした生きづらさや無力感を抱える人が増えている。

Day3 で紹介した全く異なる2つの国（イタリアとケニア）に共通する豊かさとは、個人でモノの豊かさを追及する姿ではありません。個人で孤独な努力をするのではなく、コミュニティとか国の政策とか民族のめざす方向の中に自分がいるという認識です。その中で自分が生きていくという実感があることにこそ「豊かさ」があるという発見です。

コミュニティの中で役割を担い、他者と関わりあう中でこそ自分の存在価値を感じ、安心感を持って生き活きとした生活を送っている人々の姿でした。

他方、こうした国々を鏡とすると、私たちの価値観そのものが問われていることに気づかされます。私たちは豊かな物質生活の中で、知らず知らずのうちに能率や効率、便利さを最も大切と思いがちです。こうした近代的な価値観に則り過ごしてきたライフスタイルは、もしかすると錯覚で、もっと大切な価値があることを捨て去っているのではないのでしょうか。精神的な高みを感じられる、人生の豊かさとは一体何なのでしょう？

この問いに対する答えを探すためにも、さらに旅を続け、貧しさと向き合い（カンボジア）、豊かさを問い直す（キューバ）必要があるようです。

## Day 4 貧しさと向き合う旅

### 第7話 カンボジア

#### 平和になっても貧困は終わらない

プノンペンからシェムリアップへの飛行機の窓から見えるのは、広大なトンレサップ湖と緑に覆われた豊かな大地。そう、カンボジアはもともと豊かな国だった。農業を営み、自給自足の生活ができる人たちが住んでいた国だ。

そんなところで30年もの間、内戦に次ぐ内戦で、緑の国土は地雷や不発弾にまみれ、畑で仕事をする人たちを容赦なく襲って、仕事のできない体にしてしまう事故が相次いだ。これが障害者を生み出し、貧困の始まりを告げる。貧困は貧困を招く。いったん貧困のサイクルに入ると、奈落の底に落ちるように物乞い生活にまで落ちる。こんな状況がつい最近まで続いた。

年間200万人以上もの観光客を集める世界遺産アンコールワットのあるシェムリアップでは、今日も観光客を乗せた大型バスが行き交っている。遺跡の入口で目にするのは、手



や足を失った地雷被害者が、カンボジアの伝統楽器でクメール音楽を奏でている姿と、子供たちが手に手に絵葉書を持って、「ワンダラー！ワンダラー！（1ドルだよ!）」と観光客に懸命に売り込む姿だ。

内戦が終わったのは90年代初頭だが、カンボジア人が本当に平和になったと感じられるようになったのは、98年にポルポトが死亡してからだという。たかだか戦後まだ14、5年というところだ。しかし、大量虐殺の記憶を残したまま、資本主義経済は急速に発展し始めた。人々の生活は、自給ではなくお金がないと生活できないようになり、誰もがお金を得る手

段を持たざるを得なくなった。国の産業は乏しく、仕事に就ける人はわずかだ。生きていくためには自分で商売をするしかない。ここで社会の弱者と強者の決定的な差が出てくる。

### 国際貢献、海外支援のきっかけ

こんな国の姿を見て、トーミンさんは、かねてからやろうとしていた国際支援のターゲットを、カンボジアの地雷被害者の支援に定めた。退職後のライフスタイルとして、世界とつながりながら、誰かのためになり、自分の心も喜ぶような活動をしたいと思っていたからだ。

この日本に暮らしていると、ついつい自分の世界に満たされてしまい、途上国のかかえるさまざまな問題について無関心になりがちだ。ましてや、今、日本自体が、長引く不況で格差や貧困の問題も出てきているのに、なぜ日本人が遠いアジアの途上



国の人達を手間とお金をかけて救わなければならないかと考える人もあるだろう。でも、トーミンさんは、途上国の問題は日本にとって他人事ではないと考えていた。貿易依存国である日本での現在の平和と繁栄は海外からの輸入なしでは成り立たない。しかもその輸入元の多くは、日本の国際協力を必要としている途上国なのだ。途上国の問題は一国にとどまらずグローバル化した世界の問題になることを考えると、途上国が平和で、人々に安全で健康な暮らしがなければ、日本の平和と繁栄もおぼつかない。

トーミンさんは、人道的な意味においても日本と途上国の格差に対して自分の力でできることをやりたいと思っていた。それも、大きな組織ではできない相手の顔を見てできる直接支援をしたかった。

カンボジアでのきっかけは、地雷被害に遭って両足をなくした元兵士が起した現地NGO「アンコール障害者協会」との出会いだった。そこでは、地雷により身体の一部を失った障害者が、現金収入のための仕事ができるよう技能教育や起業支援を行っていた。両足のない人が、車いすに乗って

でもできる仕事、両腕のない人でもできる仕事も必要だ。カンボジアの伝統的な木彫を習う人もいれば、特殊な車いすワゴンで本を売る人もいる。このNGOのスローガンは、「物乞いはしません。仕事がしたい」

トーミンさんはこのNGOと一緒に、がんばる地雷被害者の応援をすることにした。

### 障害者の自立支援から子供たちの教育支援へ

カンボジアでは、手足のない障害者に対する社会的な差別は大きい。通常の就職はまず望めない。彼らにとっての障害は先天的なものではなく、地雷を誤って踏んでしまったことによる事故のせいなのに、世間には前世の因果応報であるというような見方があると聞いた。本来なら国家が社会的弱者である障害者に福祉の手を差し延べるのが普通だが、この国そのものが貧しくて、国際社会からの援助で成り立っているようなところがある。日本のような障害者に対する福祉制度は望むべくもない。生きていくには自分で何とかしなくてはならない。まして、地雷被害者は家族を持ってから障害者になる人も多く、自分一人だけではなく、家族や子どもも養えないという経済的負担と大きな心の負担を負うことになる。

ひとりでできることは小さいが、トーミンさんは何ができるのかを自分で探す旅を始めた。足しげく通って障害者と友達になり、本当に必要としているものは何なのかを言ってもらえるぐらい信頼しあえる関係を築こうと思った。

車いすの必要な人のために、日本で車いすを国際的に無償提供しているNGOを探し出し、カンボジアとのつなぎ役になった。この日本のNGOも、カンボジアで誰が車いすを必要としているのか具体的情報がなくて困っていた。旅行者が手荷物として車いすを運ぶこのNGOのやり方で、支援を始めて1年もたたないうちに30台を超える車いすが地雷被害者に届いた。

シェムリアップのオールドマーケットに行くと、毎夜、路上で音楽を演奏している障害者の音楽チームを見ることができる。義足の人が笛を吹き、両足のない人が二胡を弾く。その両足のない人にも車いすが届き、その縁

で彼の家族を知るようになった。8歳の娘と11歳の息子がいた。あるスポンサーに助けってもらって、娘は英語を習っていた。この国では英語が少しでもできると将来の選択肢が大きく広がる。私もこの娘が大きくなったときのメリットを考えて英語学習を応援していた。ところが、そのスポンサーが突然援助を切ってしまい、彼女は学校へ行けなくなっていたことをかなり後になって聞いた。これはまずい、何とかしなくては！

ここから、障害者家庭の子供達の教育支援が始まった。収入が十分でない障害者の家庭では、無料の公立学校へやるのが精いっぱい。でも将来のことを考えると、どうしても英語教育を子供のときからさせてあげたい。



これも障害者家族が自立するために必要な教育投資になるだろう。

英語を勉強したいという障害者の子供のために、私立の英語学校の授業料援助を行い、適切な環境を作るといのが、もうひとつの目標になった。

### 世界への無関心からの脱却

日本のように物質的には何の不自由もない国に生活していると、水道をひねれば水が（お湯が）出る、それも飲める水が出るのが当たり前と感じられる。テレビに流れるのはパリ、ローマ、ニューヨークの最先端ファッションと世界遺産。これで世界のすべてを理解するのは難しい。戦争の起きている国のニュースは戦闘の場所となっているところだけ。テレビ画面の外側に、どんな生活があるのかを想像するのはとてもむずかしい。というより、そんな遠い世界のことに関心を持たない人のほうが多いのだろう。

たとえ世界の貧困を知ったところで、自分のせいではないし、自分が何かできるわけでもない。できれば、そんな現実は知りたくもない。こんな無関心が延々と広がる。自分の得た豊かさを手放すのを恐れるあまり、守りに入る。自分が満足できる生活を得るために必要なお金を稼ぐのが仕事

だと割り切れればよい。

### **支援のキーワードは「共感」**

こんな自己満足の国から脱却を図ろうとしたのは、トーミンさんが“自分の生きている間にできること”を考えたからに他ならない。それも日本という国から世界を見て、国際的な視野を持って活動できる場を求めた。顔が見えて、手ごたえの感じられることをしていくことで、一番喜ぶのは、支援された人ではなくて、支援する人の心であることに気づいた。

車いすを届けるNGOで、現地に車いすを運ぶのは普通の旅行者。自分の手荷物を減らして、車いすを自分の手荷物として現地に運ぶ。NGOからもらった住所を頼りに、車いすを渡す相手を探しあて、使用者本人に手渡すのだ。なんでこんな思いをしてまで、重い車いすを運ばなくてはならないのだと、途中で一度はみんな感じるのだが、その車いすを手渡した人の満面の笑みと感謝の言葉に出会うと、その苦労が一瞬にして感動体験に変わるといふ。障害者にとって車いすはどんな高級車にもまさるかけがえのない道具。それを遠い日本から運んでくれた人に見せる笑顔は、お互いの心に深く響きあう。支援をする人と受ける人の間に共感が生まれる瞬間だ。

### **未来の幸せを夢見て**

大きな国際NGOでは年間数百億円という予算を持って、世界各国で緊急支援から持続的村落開発まで、あらゆる局面で社会的弱者の救援を行っている。トーミンさんもそんな活動を見て、国際NGOで大きな仕事がしてみたいと思ったこともあった。しかし、組織が大きくなればなるほど、できることも増えるが、援助を受ける人一人一人の顔が見えにくくなる。また大きな組織に集まる人々の善意の多くの部分が組織の維持のために使われることにも疑問を持った。しかし、大規模な支援を必要としている場所もある。大きな活動は大きな組織に任せておけばいい。その隙間で苦しむ人々に目を向けよう。必ず自分でもできることがあるはずだ。

トーミンさんのカンボジアへの旅は続く。経済発展の波の中で、障害を持つ人たちが取り残されないようにするためには、彼らの社会参加をもっと後押しする必要がある。カンボジア人がカンボジア人を助けられる社会

がやってくるまで、誰かの手助けを必要としている人がいる。

一人でできることは小さなことかもしれないが、小さなことから変化が生まれる。少しずつ友達が増える。本当は美味しいカンボジア料理が食べただけなのかもしれないが、次はいつ行けるかとワクワクしている。トーミンさんにとって、カンボジアは未来の幸せを夢見られる国なのだ。

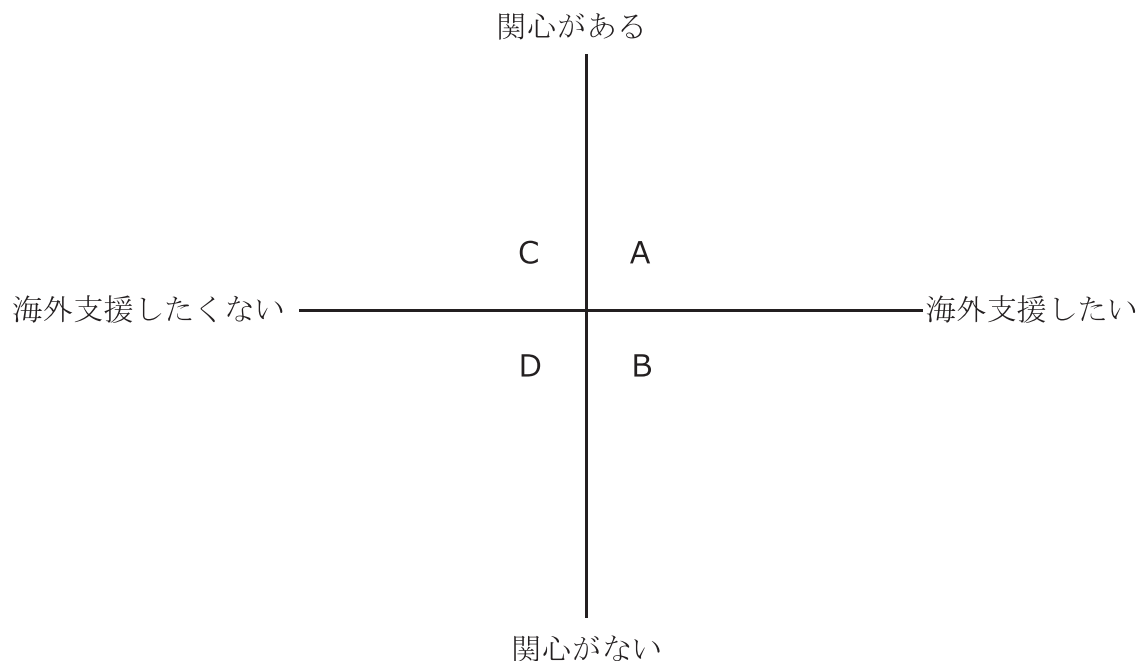
#### ☆ 共創マトリックスの世界にようこそ！

カンボジアの話聞いて、世界のかかえる課題への関心と日本の国際貢献について考えさせられた。そこで、共創空間のマトリックスの中でこの問題について考えてみませんか。

【設問】 国際支援活動についてどう思うか

タテ軸： 国際支援活動に関心がある・ない

ヨコ軸： 海外支援をしたい・したくない



#### ■ ちょっと一言

アンコールワットで知られるカンボジアは地雷の多いことでも有名。地雷被害者に出会って、その支援をしているトーミンさんは、行動力、実行力の持ち主ですね。



## 第8話 キューバ

### 物不足のキューバで見つけた「豊かさ」

カリブ海に浮かぶ最大の島キューバ、この国の生活は新聞でもテレビでもあまり伝えられず、ただサルサダンスやキューバンミュージックだけが世界を一人歩きしている。映画「ブエナビスタ・ソーシャルクラブ」を通してしかキューバのことを知らない人がほとんどかもしれない。こんなキューバに魅せられて、トーミンさんは1998年の最初の訪問から2012年3月までに、農業ボランティア経験を含めて4回訪れた。

首都ハバナの町は、スペイン占領時代の建物が保存され、今も活用されている。道路を走りかう自動車は、アメリカが支配していた50年代の色とりどりのクラシックカーだ。まるでグッド・オールド・デイズ（旧き良き時代）にタイムスリップしたかのようだ。



### 革命の心が息づく豊かな国

1959年にフィデル・カストロとチェ・ゲバラが率いた革命戦士たちは、帝国主義に対抗して米国寄りの前政権を倒し、自由と平等を目指す社会主義国を作り上げた。革命後50年を超えた今もなお、米国のキューバに対する経済封鎖で物不足には苦勞の連続だ。しかし、この国では国民すべてが、必要な教育や医療を国から保障されている。ぜいたくをしなれば、住むところも食べることも基本的には保障される。つまり、家のローンの支払いのためにシャカリキになって働くこともなく、子供の教育費に頭を悩ますこともない。老後の病気を心配して、多額のお金を使わずにせっせと貯めこむ必



社会主義国を作り上げた。革命後50年を超えた今もなお、米国のキューバに対する経済封鎖で物不足には苦勞の連続だ。しかし、この国では国民すべてが、必要な教育や医療を国から保障されている。ぜいたくをしなれば、住むところも食べることも基本的には保障される。つまり、家のローンの支払いのため

にシャカリキになって働くこともなく、子供の教育費に頭を悩ますこともない。老後の病気を心配して、多額のお金を使わずにせっせと貯めこむ必

要もない。仕事をする会社や工場は国営で、国のために真面目に働けば、すべての人が安心して暮らせる体制を国が用意してくれる。

こんな安心のある国では、人々は底抜けに明るい。ラテン系民族の血をひいた人たちとアフリカ系の人たちが、人種差別など微塵もなく一緒に住んでいる国だから、音楽を愛するDNAはたっぷりある。道端で音楽を奏でる人もいれば、音楽を聴きつけて集まってきては踊り出すような人たちだ。ハバナのミュージックシアター「トロピカーナ」では、毎夜きわめて質の高いミュージックショーが行われている。町中にライブハウスやダンスホールがあり、老若男女の憩いの場所になっている。



医療大国であるキューバには、国民1000人あたり医師が6.3人。これは欧米の2倍、日本の3倍にあたる。乳幼児死亡率は1000人あたり4.7人と先進国並みである。ハバナには小児専門の大きな病院があり、たくさんのお母さんたちが子供を連れてきていた。高度専門治療を受けても、ここではすべてタダである。子供を安心して育てられるように、産休制度や保育所など社会福祉の面はダントツに行き届いている。

さて、この国は貧しいのだろうか、それとも豊かなのだろうか。

ハバナの町を歩くと、道路は清掃され、いわゆる途上国に多いゴミの散乱した道路はどこにもない。観光に力を入れているからかと思うが、普通の住宅街を見ても同じで、家の周りはとてもきれいだ。大きな家もあれば小さな家もあるから、ある程度の暮らしの差は確かにある。教育の差もあり、就いている仕事により家も違うのだろう。

### モノのない貧しさ、安心という心の豊かさ

水を買おうとコンビニのような小さな店に入った。カウンターの後ろにある冷蔵庫に大小のペットボトルが並んでいる。手前のガラスケースには

お菓子が並んでいるのだが、あふれんばかりの商品が並ぶ日本のコンビニやスーパーの棚を想像すると、こちらは大きい。ケースの中には数種類のチョコレートやクッキーの袋が3つ4つずつ山にして置いてある程度。列の前に並んだ人が買ってしまったらもうおしまいなのだ。物のあふれた生活になじんだ私たちにとっては、「エッ！これだけ？」の感は否めない。店の数も少ないので、こっちがダメならあっちの店でという選択肢が少ないのも不便だ。



革命を成就した国だからといってガチガチのイデオロギーの国ではない。社会政策が実践的であることに加えて、歴史を大切にする文化的な一面のあることをある儀式を通して知った。

ハバナ市街の対岸にモロ要塞というスペインの作った砦が残されている。今や観光地のひとつだが、そこで毎夜行われる儀式を見に行った。この砦は跳ね橋のあるゲートで毎日閉門されていたが、ゲートを閉める前に、外に出るべき人が中に残らないように大砲で合図をしていたらしい。時間になると大砲を一発撃ってその音でゲートが閉まることを知らせていたのだ。今はもうゲートの開閉は行わないが、大砲を撃つ儀式だけは400年も前から毎日続けられている。

午後8時半になると、外国人観光客やキューバ全土からハバナに来た旅行者が、大勢モロ要塞に集まってくる。中世の衣装をつけた20人ほどの儀仗兵が大きな掛け声とともに行進して出てきて、さまざまな点呼儀式を延々とやりながら大砲の準備を行う。そして、最後に……ものすごい轟音が耳をつんざいた。本物の大砲の音を間近で聞いたのは初めてだったので思わずすくんでしまった。驚いたことに、400年も続いてきたこの儀式を、キューバは革命後の今も続けている。「文化的な歴史は大事にしなくちゃ」と、一緒に行ったキューバ人が得意げに言っていた。

## 心の豊かさって何？

人が幸せに生きていくためにニーズは9つあって、それはどんな国でも、どんな時代でも普遍的で基本的なニーズだと、南米チリの経済学者マンフレッド・マックス＝ニーフ（1932年生）は、著書「外側からの経験：裸足の経済学」の中で言っている。

その9つとは、衣食住を満たして生きたい（Subsistence）、安全でありたい（Protection）、理解し合いたい・知りたい・学びたい（Understanding）、参加したい（Participation）、創ってみたい（Creativity）、自由にやりたい（Freedom）、愛されたい（Affection）、ゆっくりしたい（Idleness）、アイデンティティ（Identity）。この共通のニーズは、文化や時代を超えて普遍であり、その違いは、これらのニーズを満たす手段だけという。

キューバの国を見ていると、これらのニーズが平等に満たされているように思える。誰もが生きられる社会で、国民は国に守られ、教育は能力に応じて平等に受けられる。社会参加は男女平等。子供たちは幸せになるために生まれてくると言ってはばからない手厚い福祉。宗教・言論も自由なら、この国にとどまるか出ていくかも自由である。あくせく働かなくても安心して老後を迎えられるとなれば、貯金の額など気にもなくなる。

確かに、基本ニーズを満たすための手段において、不都合（経済封鎖）があるのは事実だが、待てよ、本当に豊かな国というのはこういう国のことをいうのではないだろうか。

家の中にも、社会にも、モノがあふれている日本から見ると、ないないづくしは辛く見えるかもしれないが、そんなキューバがかえって幸せな国に思える。

安心と平等と連帯を人々が享受するキューバには、お金もモノもないけれど笑顔のある生活がある。何度行ってもトーミンさんがキューバへの旅の最後に思うのはいつも同じ、「あーあ、なんて素敵な国なんだろう！」

## ■ちょっと一言

4回も訪れているトーミンさんが絶賛する国がキューバ。憧れのチェ・ゲバラがカストロと革命を起こし、かっこよく去っていった国ですが、現

状はどんな国なのかと興味津々です。人が幸せに生きていくための9つのニーズが満たされていてもモノがあふれてはいない。その代わりに笑顔があふれているらしい。笑顔で暮らせることがなによりも幸せの象徴と思えます。

☆ **共創マトリックスの世界によろこそ！**

モノが豊富にあることが豊かさの象徴であった時代は過去のものとなり、人々はモノのあふれる生活のなかで心の渇きを感じ始めている。

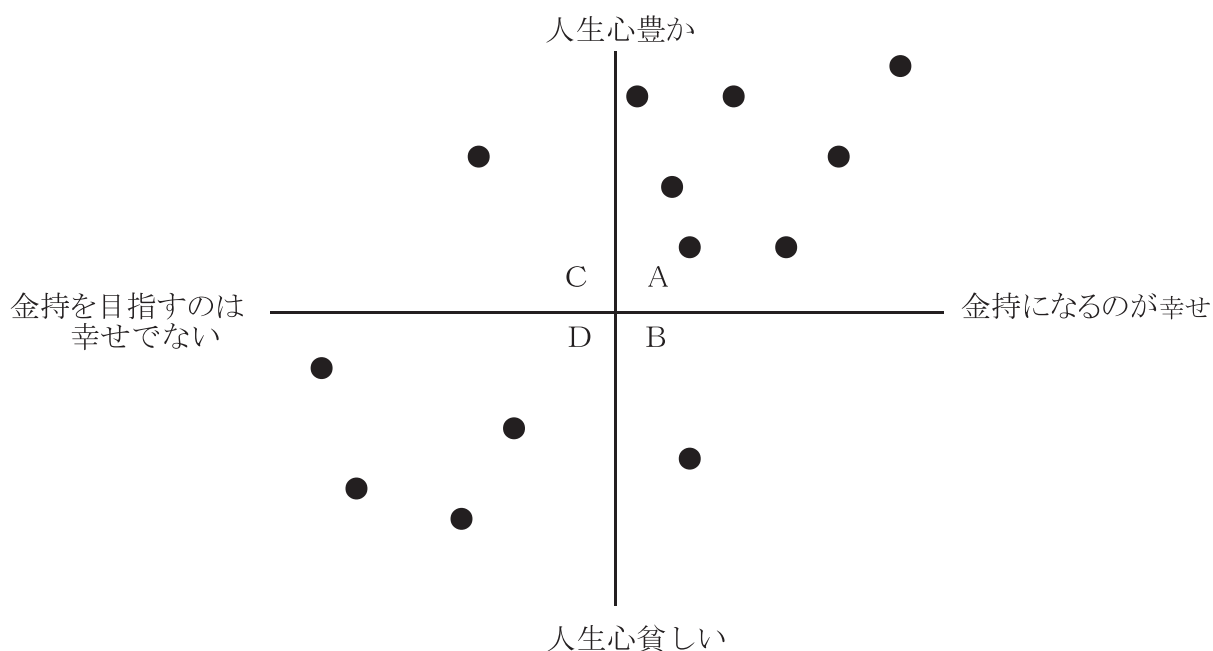
キューバの社会からの問題提起とは、物質的な豊かさの追求(金持ちになること)と心豊かな人生とのつながりではないのか。

そこで、ライフスタイル研究会のメンバーと共に、このつながりについて共創することになった。

【設問】 金持ちになることと、心豊かな人生を送ることはイコールか

タテ軸： 人生は心豊かだ・心貧しい

ヨコ軸： 金持ちになるのが幸せ・金持ちを目指すのは幸せでない



**Aゾーンの意見 (心豊かな人生にはお金も必要)**

- 貧乏を選ぶ必要はない。赤貧で心豊かになるのは辛い。人をうらやまない程度の金持ちがよい。
- 世界が成り立っているのはお金のやりとり。お金がなくてできることは少ない。お金はあったほうがいい。お金があると余裕ができる。余裕は心豊かさに通じる。
- 必要以上のお金を持つことは望まない。しかし少しのお金は必要。まったくないと自分のことしか考えられなくなる。少しお金があれば、人を見る目に余裕が出る。
- 夢に対する努力は必要だが、金持ちになる努力をすることに重きを置くと、考え方がマイナスに変わってしまう。努力に弱音はつきものだが、「弱音を吐く」の「吐」の字からマイナスをひとつ取ると、「叶う」という字になる。
- お金に関しては少しあればよい。心豊かな人生とは、人を愛し愛される人生。パソコンで言えば、幸せはOS (オペレーティングシステム) で、心の豊かさはS/W (ソフトウェア)。S/WはOSがなくては動かない。
- 金持ちには2通りあると思う。「金を儲けて何が悪い」と巨万の富を得て開きなおる人と、本当はお金持ちなのに全然そうは見えない人。そういう人はお金があるがゆえに真に豊かな人生を送れる人。
- どれだけお金を持っているかより、お金の使い方にその人の哲学が出る。お金は必要最小限あればよい。心の持ち方とお金の多寡は関係ない。

**Bゾーンの意見 (金持になって幸せでも心豊かでない)**

- 金持ちになることが幸せと感ずることそのものが、すでに心を貧しくしている。心豊かな人の幸せは、もっと別の価値にあるのではないか。

**Cゾーンの意見 (金持を目指さない方が心豊かな人生を送れる)**

- お金を稼いで物質欲を満たす行為は、それ自体で心が貧困になりそう。

金持ちになることには執着しない。品格豊かな人間になるには、金持ちへの執着を捨てること

#### Dゾーンの意見 (金持ち目指すのは幸せでないし心豊かになれない)

- 金持ちになることを目指すのは幸せではない。幸せは自分自身の心のあり方。お金がなくても幸せになれる。心豊かな人とは他人を思いやる気持を持つ人。感謝できる心を持つことが心豊かなこと。お金があると物質欲にとらわれる。幸せとは生きていることに感謝できることだと思う。
- お金を持つことにはフローの面とストック（財産）の面がある。価値基準としての金額は、名画の値段のようにその多寡により決まるものもあるが、お金でしか価値を計れない人は貧しい。
- お金は人間の作ったもの。戦争が起これば価値がなくなる。お金持ちの世界は狭いのではないか。金回りの循環がうまくいけば、社会は回り始める。
- 豊かさを求めていく人生でありたい。経済的に豊かになれば、心は貧しさに向かう。自由を求めていくことは、逆に不自由な人間を作っていく。

#### ■共創マトリックスから見えてきたもの

「金持ちである」というのと「金持ちになる」というのはイコールではない。「金持ちになる」というのは、金持ちを指向する自由を選択すること。しかし、それが幸せな人生や心豊かな人生を送ることにつながるとは限らない。「衣食足って礼節を知る」という言葉があるように、必要最小限のお金は必要で人生に余裕を与える。それでも、お金を求める人生より真の豊かさを求める人生でありたい。

## Day 5 飢えと渇きに向き合う旅

### 第9話 アフガニスタン

#### 「飢えと渇き」の意味を考える砂漠の旅

平ちゃんから日本のNGO団体によるアフガニスタン支援に関するパンフを見せてもらった。それがきっかけとなり、「飢え渇き」の意味を考える砂漠の旅が始まる。そのNGO団体とは、ペシャワール会であり、その代表は中村哲医師。パンフとは中村医師による日本での講演の紹介であり、そこには、井戸や用水路を引くにあたって、「飢えと渇きは薬では治せない」（中村哲医師講演会、2012.6.8）」とあった。

そこで、研究会メンバーはその支援活動を綴ったドキュメンタリー番組のDVDを観て、アフガニスタンで飢え渇く現実を知り、そこから「飢え渇き」の意味を探る共創空間の旅をすることになった。

#### 水・食料不足（不自由）に苦しむアフガニスタンに水路を

DVDは、NHKでも放送された『アフガンに命の水を』と題するドキュメンタリー映画。日本人医師、日本人ボランティアの人とアフガンの人々が共に水路を建設する映像を見て、このような素晴らしい地域貢献があるのかと全員感動した。日本政府は2012年7月、治安権限がアフガン政府へ移行する2015年以降も、国際社会による支援継続を約束した「東京宣言」を採択した。しかし、それよりもはるか前から、国レベルではなく、市民レベルで、戦火の絶えないアフガニスタンを支援していた事実を知ることとなった。

先にすすむ前に、平ちゃんがなぜこのNGOを支援するようになったのか、そのワケを語り始める。平和で豊かな日本を脱出して地球一周の旅を経験すると、世界には、今でも戦争と貧しさに苦しむ国があることに、無関心ではいられなくなる。なぜなら、命の危機に直面している人々に対して、同じ人間として何かをしたいと思うから。しかし、「何かをしたい」と思っても、高齢の平ちゃんには限界がある。そこで考えたのが、戦争と貧しさに苦しむ国で活動している、日本のNGO団体を支援すること。



ある日、アフガニスタンで活動しているNGO（ペシャワール会、1983年パキスタンのペシャワールでのハンセン病治療と共にスタート）の中村哲医師の活動報告会が、地元の公民館で開かれることを知り参加した。

中村さんは、「自分は医師だから、病人を治すのが仕事だ。しかし、アフガンでは、治療しても病人は減らない。それは、清潔な水と食料が無ければ、人間の健康は維持できないから。そこで、医療の限界を知り、井戸掘りと灌漑用水を引く事業に取り組み始めた」と淡々と語られる。そして「それには資金が必要です。皆さんの寄付で支えられているのです」と締めくくった。

NGOの活動には、いろいろな切り口がある。最前線での活動、背後で資金面から支援する活動、活動理念を広める活動、といった3つの方法があるが、平ちゃんは自分に合った2番目の方法で参加する決心をした。

#### 【アフガニスタン基本情報】

面積 7,652,225 平方km(日本の約 1.7 倍)

人口 3,000 万人(2005 年:国連アフガニスタン支援ミッション)

民族 パシュトゥーン人、タジク人、ハザラ人、ウズベク人等

言語 公用語であるダリー語、パシュトゥーン語の他、ハザラ語、タジク語等

宗教 イスラム教(主にスンニー派のハナフィ学派、ハザラ人はシーア派)

#### アフガンからの問題提起：何に対する「飢え渇き」なのか

中村医師の「飢えと渇きは薬では治せない」という言葉には、実に重みがある。ここでいう「飢えと渇き」とは、砂漠化や戦争で食料と水に不足しているアフガニスタンの人を想定している。しかし、飢え渇き問題とは、水・食料に対してだけの問題なのだろうか。もしそうなら、毎日の生活で食料と水に困らない私たちとは何の関係もないことになる。果たしてそうなのだろうか。この問題を共創する必要があるようだ。生きていくうえで、食料と水が必要不可欠なことは自明のこと。しかし、飢え渇き問題とはそれだけではないのではないか。何か生きるうえで、重要な意味が含まれているのではないか。

アフガニスタンから、豊かな国に住む私たちに問いかけられていることとは、水や食料が足りていても、自己満足と無関心ゆえに「飢え渇き」がないことではないのか。その結果、自分を満足させるために行動し、自分に関心のあることには熱狂するが、自分には関係がない（と思い込んでいる）ことには飢え渇きはなく、実は“動かない”という不自由を選んでいることに、なかなか気づかない。

ライフスタイル研究会（シニア世代）の中でも、また教育の現場（ヤング世代）でも、この「飢え渇き」問題について向き合ってみた。「飢え渇き」とは渇望感であり、これがあれば、飢え渇く対象に向かって行動を起こそうとするが、反対にこれがなければ、満足し行動しないことになる。また、「飢え渇き」がある（ない）ことは必ずしも良いことばかりではなく、悪い場合もある。是非、読者の皆さんも共創マトリックスで飢え渇き問題に向き合ってみませんか。

中村医師は、日本での講演の中で、井戸や用水路を引くにあたって、「飢えと渇きは薬では治せない」（中村哲医師講演会、2012.6.8）と語る。この言葉と向き合ってみよう。つまり、「飢えと渇きは薬（クスリ）では治せないのか」という問いに向き合ってみましょう。中村医師は、この問いに対して、イエスという答（治せない）をもって、井戸と用水路の建設に向かった。しかし、この答だけが唯一ではないことに、すでに気づいていると思う。ノーという答（治せる）の場合もありうる。

ここから、何に対する「飢え渇き」なのかという、より根本的な問いが浮かんでくる。読者の皆さんは、何に対して「飢え渇き」あるいは渇望感がありますか？下記の項目のうち、最も当てはまるものに◎、その次に当てはまるものに○、反対にまったく当てはまらないものに×をつけてみませんか。

ブランド（ ）、名声（ ）、権力（ ）、カネ（ ）、  
プライド（ ）、健康（ ）、環境（ ）、愛（ ）、  
癒し（ ）、真実（ ）、正義（ ）、美・おしゃれ（ ）、  
その他（ ） 具体的には\_\_\_\_\_

ヤング世代で、◎が多かったのは「カネ」、「健康」、「愛」などである。反対に×であったのは、「ブランド」、「権力」、「名声」など。なお、最も当てはまるものとして、「その他」に「人（家族・友人）との関わり」、「時間」があげられていた。一方、シニア世代はどうか。◎は「正義」、「愛」、「真実」、「健康」が多かった。×は「名声」、「権力」がもっとも多かった。

そこで、2つの世代に共通して多かった「愛」と「健康」に対する飢え渇きに関する価値観の多様性を発見すべく共創空間に飛び立つことにした。まずは、「健康に対する飢え渇き」から開始しよう。

### 「健康」に対する「飢え・渇き」

飢え渇きの対象として「健康」を重視していることがわかったが、日本だけではなく世界的にみてもそう言えるのだろうか。生活やライフスタイル全般の中でどの程度重視しているのかという問題について国際比較した調査がある。アジア・バロメーターという価値観調査がその代表的な一例である。この調査によると、さまざまな生き方や生活環境の中で、最も重視する項目が「健康」であることがわかる。

図1には、南アジア諸国の国々（アフガニスタン、インド、スリランカ、モルディブ）と日本の場合が紹介されている。2003年～2008年に実施され、各々の調査年では、800名をガイドラインとして行われた。また、図には、日本のヤング世代の意識を知るために、上記の調査項目にそって新たに調査を行った。日本のヤングとは、東京都のT大と千葉県のリ大の学生118名であり、2012年5月に実施した結果が示されている。

以下の20項目のうち、重要なものを5つ選ぶとしたら、読者の皆さんはどれを選びますか。

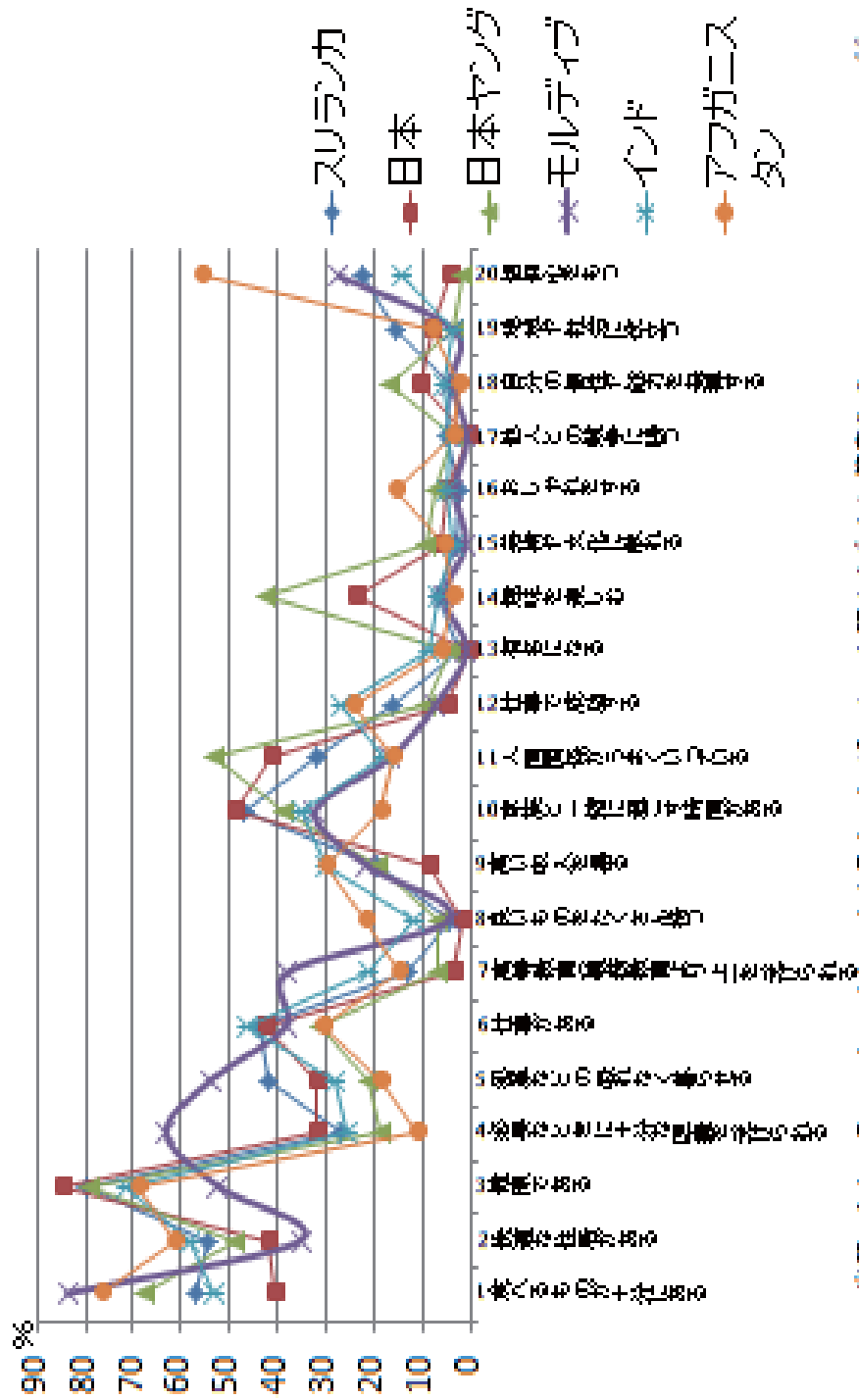
1. 食べるものが十分にある
2. 快適な住居がある
3. 健康である
4. 必要なときに十分医療を受けられる
5. 犯罪などの恐れなく暮らせる

6. 仕事がある
7. 高等教育(義務教育より上)を受けられる
8. 良いものをたくさん持つ
9. 高い収入を得る
10. 家族と一緒に過ごす時間がある
11. 人間関係がうまくいっている
12. 仕事で成功する
13. 有名になる
14. 趣味を楽しむ
15. 芸術や文化に触れる
16. おしゃれをする
17. 他人との競争に勝つ
18. 自分の個性や能力を発揮する
19. 地域や社会に役立つ
20. 信仰心をもつ

図1に示されているように、各国とも「健康」を重視する割合が、他の項目に比べて最も高い。国別では、日本が最も高い(84.5%)。日本のヤング世代も78.8%と高い。

もっとも、この調査で取り上げている「健康を重視する」と「健康に対する飢え渇きがある」ことは、厳密に言えば同じではない。なぜなら、前者の「重視」する場合には主観だけではなく、客観的事実も含まれているのに対し、後者の飢え渇きは渴望感という主観や感情の働きと考えられるから。にもかかわらず、主観的部分では一致するので、「重視」調査から飢え渇き問題を類推することは許される。つまり、健康を「重視」することとは、不健康ゆえに健康に対する「飢え渇き」があると言い換えても構わない。

(図1) **生き方・生活環境の国際比較**  
 一南アジアと日本ー(最も重要と答えた比率)5つ選ぶ

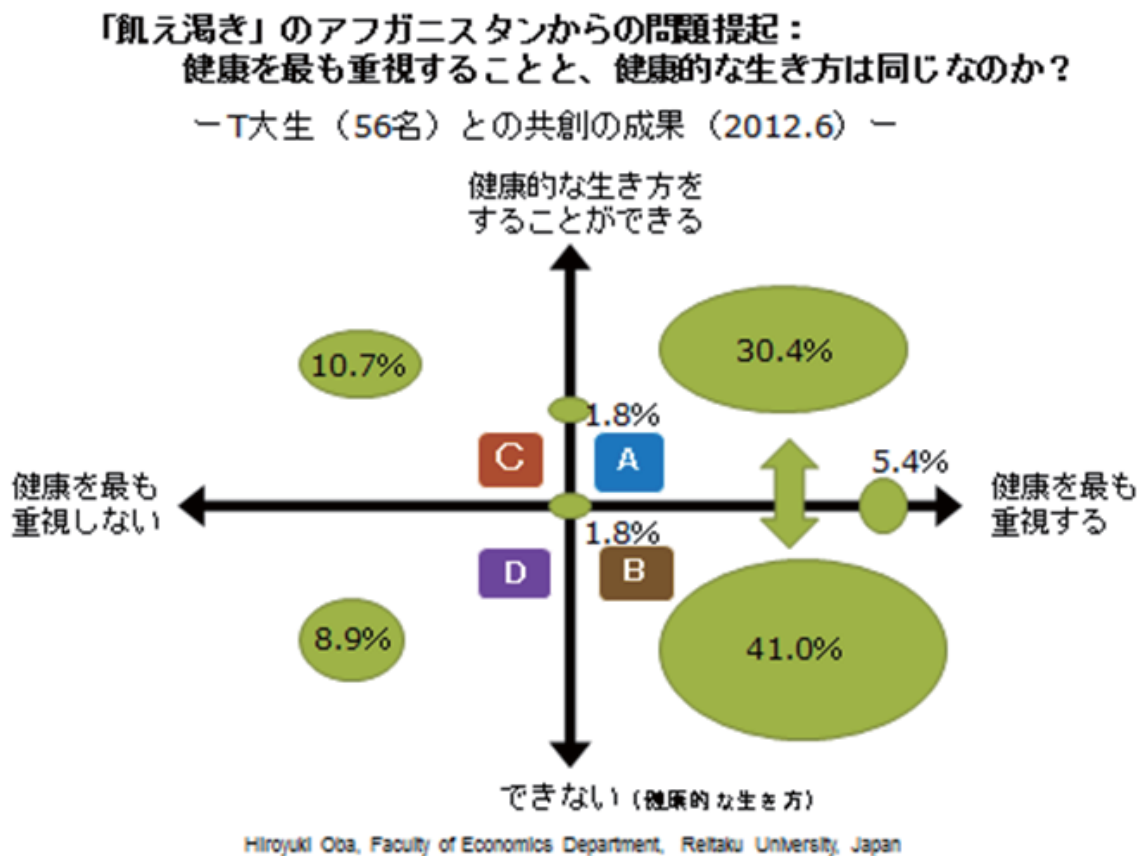


出所：Asia Barometer Integrated Dataset. アンケート調査をもとに編纂作成。  
 Hiroyuki Oba, Faculty of Economics Department, Ritsaku University, Japan

「健康」に対する飢え渇き問題をさらに掘り下げるために、この問題と健康的な生き方と同じことなのか、共創してみよう。健康を重視し健康に対する飢え渇きがあることとは、現実的には健康ではなく、不健康もしくは病気であることが想定されている。そもそも、健康を重視することと、健康的な生き方はイコールなのだろうか。ライフスタイル研究会のメンバーやヤング世代とこの方程式に向き合ってみると、イコールではないという多くの意見が続出した。そこで、健康を重視（飢え渇き）するか否かと健康的な生き方ができるか否か、ということ判断するとき、同じ判断軸にあるとは考えないで、別々の軸として共創空間を創ってみた。

図2を見ていただきたい。これは日本のヤング世代（T大学56名を対象に2012年6月実施）と共創した結果が示されている。

（図2）



健康重視（飢え渇き）と健康的生き方とは同じではないこと、また、最も多く集中したのが、Bゾーンの健康を重視するが、健康的な生き方はできていないと考える立場（全体の41%）であった。つまり、健康を重視し健康に対する飢え渇きがあったとしても、必ずしも健康的な生き方ができているとは限らない現実が見えてきた。

このゾーンに登場したあるヤング世代の男性は、「若いうちは、生活や仕事のために健康を犠牲にせざるを得ないと思っている。健康的な生き方は退職してから実現していきたい」と淡々と語る。健康的な生き方をしたくてもできない場合は、そこに健康に対する「飢え渇き」が発生していると考えられる。

ところで、健康に対する飢え渇きがあるかないかということと、幸福は無関係なのだろうか。そもそも、健康であれば幸福なのか？ 不健康（健康への飢え渇きがある）であっても、必ずしも不幸とは限らないのではないか？

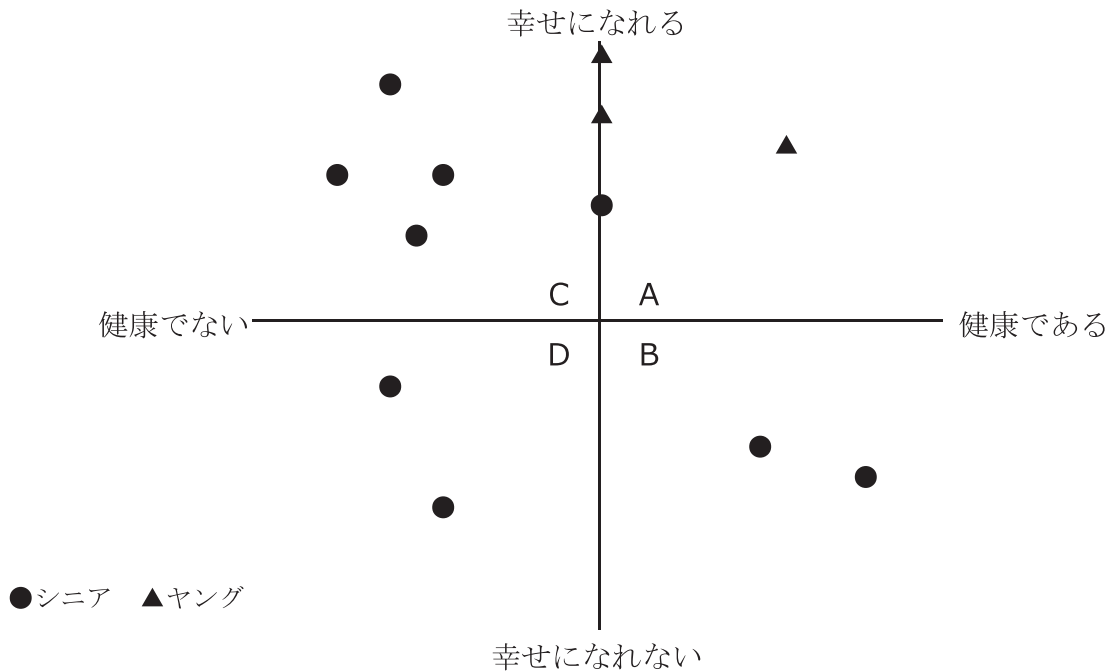
次に、健康への飢え渇きと幸福とのつながりを捜すためにさらに共創空間で旅してみよう。

## ◇ 共創マトリックスの世界によろこそ！

【設問】健康（不健康）であれば幸せ（不幸せ）になれるか。

タテ軸： 幸せになれる・幸せになれない

ヨコ軸： 健康である・健康でない



### Aゾーンの意見 (健康であれば、幸せになれる)

- 健康でなければ絶対に幸せになれないと思う。完全に主観ですけど。マズローの欲求段階説で、根底にある生理的欲求が満たされないと、僕の場合、不機嫌になってしまうので。それが満たされてから、愛情欲求、所属欲求が満たされていくと思う。だから、健康でなければ幸せになれないと僕は思っているのでA。

### AとCの線上

- 自分は健康であるとか健康でないとか、そういう、なるべく都合の悪いことを考えないようにして、今の状況をどうよくすることができるかだけを考えている。悪くいえば、快樂主義です。考え方をどうにかすれば、変わる。その人の幸せはその人のサジ加減。だから自分の意思でなれるから、考え方を变えるということに重点を置いている。どういう状況においても幸せになれるのではないか。たとえば、無人島にいたとしても、食べ物があったらその瞬間は幸せじゃないですか。



- 幸せとは対外的なものではなくて純然たる内面的なもの。戦争があろうと何があろうと、そういう意味では、幸せというものを感ずることができると思う。幸せは結果ということもあるだろうし。現在でも、貧しい中で1つのおにぎりを食べられる幸せ感もある。幸せとは純然たる内面的な話。外部の世界ではなく、心の中の幸せだと思う。健康であるかないかは、客観的な評価として見ているだけ。ヘルスとは何か？ WHOで定義しているようなもの。ここにいる人、皆基本的には健康だ。だけど幸せ感じているか！ 人生充実しているか！ というと、本当に内面的な問題になってきて、健康か、健康でないかは、幸せか、幸せでないかは、関係ないと思う。
- 自分自身は一般的にみて健康ではないと思う。血圧は高いし蛋白も出ているといわれている。悩みもあります。それでも幸せだと思います。介護関係の仕事をしていて、認知症の患者をみていて、本人はボケていてわからないかもしれないけど、幸せそうだなと思う人はいっぱいいます。家族に見守られていれば、寝たきりで健康でなくても、幸せになれるのではないかと思う。医者にしても、見守る体制をもっている。幸せとは心の持ち方だろうと思う。

### Bゾーンの意見 (健康であっても、幸せになれない)

- 健康であれば、まずその時点で幸せだろうと思う。しかし、健康であれば、必ず幸せであるかどうかは、なかなか難しい。なぜなのか。モリモリ食べるし、遊びもするし、金も無くなってくるだろうし、いずれは幸せではなくなるだろう。健康であればあるほど、病気を考え出すだろう。今の状況を続けるかどうか考えてしまう。これもまた、幸せではないだろう。真の幸せは、健康だからといって掴んでいるわけではない。世の中、ものすごく環境が変化している。健康であれば、それについていけるかという、そうでもないだろう。心身ともに健康であっても、最終的に人間というものは、悩んでいて、常に幸せと結びつけられないと考える。健康であっても悩みがつきまとう。幸せは一時的なものではないという考え方です。

- 端的に言えば、心と身体が健康であっても、今、シリアのような内乱状態のもとでは、幸せを感じている人は少ないのではないかと思うし、アフガニスタンのようなところの人は、心身が健康であっても、幸せを感じてはいないと思う。心身が健康であることと幸福とは一致しない。それは、社会的に健康、つまり社会が健康でないと、人間は幸せになれないと思うから。「健康であっても、幸せにはなれないこともあるんだよ」と、常に思いながら、社会参画、社会をよくすることを、自分の心身をよくするのと同じようにやっていかなくてはならないと思う。社会と自分の両方が健康にならないと。

### Cゾーンの意見（健康でなくても、幸せになれる）

- いずれ数十年後には死ぬわけですね。病気になって死ぬと思う。死ぬ間際に、幸せだなあと思いたい。主人も私も太っているから多分病気になると思うが、死ぬ前に幸せだったと思いたい。テレビを見ていたら、きんさん、ぎんさんの娘4姉妹が出演していた。母（ぎんさん）の教えを守っているという会話。それは、歩くこと、自分のことは自分ですること、腹八分目、魚を食べること。4姉妹は時々集まって食事をするのだが、すき焼きを美味しそうに食べ、長女は野菜嫌いではほとんど食べない。お歳は？と聞かれると、「たったの97歳よ」と。皆好きなことをやっているが、とにかく楽しそうである。世の中、健康思考で、大勢サプリメントを飲んでいるけど、そんなふうにしなくてもいいんじゃないのと思う。結局、最後は病気になって死ぬわけですから、そういうのも幸せに思っていたいなあとあってCにしました。
- 幸せとは、心の穏やかな状態が長く続くことと考えました。幸せは求めるものでなく、結果として幸せになった。健康になりたい気持ちを強く持ち、努力していくと、幸せにつながった私の母の実例がある。母は長い間リウマチを患い、痛い、痛い思いをしてきましたので、心が健康でない時もあったと思います。お陰さまで、今はその痛みが消えて、指の関節の変形があり不自由なこともあります。長い間、パラサイトをしてきた兄も、ようやく

前向きな姿勢になり、今では兄が老いた両親の食事の世話などをする生活が送れるようになりました。感情表現が無器用な家族が、お互いのことを大切に思いやる気持ちが、感じられる場面が多くなり、ありがたいなと思っています。

- 私も平和が一番だと思っていますが、私がCにつけたのは実際、病を持っていても、愛されている人がいるとか、愛する人がいるとか、精神的に自由な空間を持つことができる状態にいれば、健康でなくても幸せになれると思ったからです。
- 先日、茨城県阿見町にある予科練の記念館を見学してきました。86歳のサークルの仲間の方（戦前、戦中、中国に従軍看護婦として2年位派遣されて、戦死者を何人も看取った看護婦さん）が、是非、自分の足で行けるうちに、予科練の記念館に行きたいとおっしゃいまして私と他の1人、計3名で土浦からバスで行ってきました。

17歳～20歳位までの若者を全国から募って、予科練の練習場は全国に何ヶ所もあり、予科練生は約24万人。阿見町はそのうちの何百名かがいたところでした。そこには、訓練を受けている当時の様子が展示してありました。私がいちばんショックを受けたのは、17歳～19歳まで、自分から志願していったほとんどが亡くなっていること。優秀な若者が、特攻隊として突っ込んで行って亡くなった。指導者が方向を間違えると、若者はいかに健康であってもそのような死に方をしなくてははいけない。

今、私たちは医療も発達して、私は高齢者の真ただ中で、挨拶といえば病気の話が、まず第一なのです。病は気からという言葉があるけれど、いろいろな病気もストレスとつながっていると思う。ストレスが何もない人はいない。数値もOK、すべて健康という人は、ほとんどいない。半健康であっても、日々無事に過ごせていくことが、幸せなのではと思う。過去を振り返って、あの時がいちばん幸せであったと、この歳になれば思うことが多いのです。それもいいじゃないかと思ってCを選びました。

### Dゾーンの意見（健康でないと、幸せになれない）

- 健康でないと幸せになれないは、そのままストレートに結びつく話ではないかと思っている。心身ともに健康であれば、幸せになれるのはその通り。仮にいま、健康でなくても、考え方が、これから今の状況から抜け出すという、ある種、健全な気持ちを持っていれば、幸せになっていけると思う。肉体ではもちろんながら、気持ちの方でも健全さを持っていないと、いつまでも幸せでない状況から抜け出すことはできないのではなかろうか。言いかえれば、心身とも健康でさえあれば、幸せに向かっていくことができる。その対極にあるのがDである。
- 今、子供の頃から糖尿病とかが多いと言われるし、小さい頃からダイエットしているのを見てみると、精神的にそういうのを健康というのかなと思うのです。人の方ばかり気にして……。そういうのが幸せであるのか、ないのかもあるし、それが健康であるのか、ないのか、よくわからないので、Dに置いて、健康ではないとしてみた。

### 健康に対する飢え渇きと幸福をつなぐ共創から見えてきたもの

健康に対する飢え渇きがない（健康である）場合でも、幸せにならないことがある。反対に不健康であっても幸せになるかもしれない。つまり、いくら健康を追い求めても、幸せにならない可能性がある。

共創マトリックス上では、Cゾーンの「健康でなくても幸せになれる」に付けた意見が多い。このゾーンだけではなく、他のゾーンの意見を突き合わせたとき、見えてきたものは一体何か？まず、何を「健康」と捉えるかで、ポジションが一瞬のうちに変わる。なぜなら、「健康」と一口で言っても、身体的な健康だけではなく、精神的な健康も含まれるからだ。

健康に対して飢え渇きがあるということは、身体的、精神的に健康でないこと、つまり不健康や病気であることを意味する。ガンなどの身体的な病気というのはわかりやすい。しかし、精神的な不健康あるいは精神的な病気とは具体的に一体何をさすのだろうか。統合失調症やADHD（注意欠陥・多動性障害）などの精神障害だけではなく、日本に多い鬱の症状や孤独、依存症さらには無関心や自己満足も精神的な病とも言える。

こう考えると、病気がない人って、この世に存在するだろうか。長寿大国と言われる日本だが、身体が健康でも精神的に不健康（心の病）という場合はかなり多い。一言でいえば、この世界は、病院かもしれない。いくら物質的にかつ精神的に豊かになったとしても、どこまでいっても自分を義とする自己中心性という自分勝手な病は治せないのではないか。

心も身体も健康でありたいと思っても、そうではない現実がある。しかし、健康でなくても、あるいは病気であっても幸せで祝福された人生を送る秘訣をご紹介してこの旅を終わりたい。

その秘訣とは、ニューヨーク・リハビリテーション研究所の壁に書かれた「病者の祈り」という一患者の詩の中にあります。

## 病者の祈り—作者不詳

Japanese translation by Nicky's Partner 日本語訳: ニッキーの相棒

I asked God for strength, that I might achieve,  
I was made weak, that I might learn humbly to obey.  
私は神に求めた、成功するために強さを。  
けれど弱き者とされた、謙虚と従順とを学ぶために。

I asked for health, that I might do greater things,  
I was given infirmity, that I might do better things.  
私は求めた、より大きなことをなすために健康を。  
けれど病を与えられた、よりよいことをなすために。

I asked for riches, that I might be happy,  
I was given poverty, that I might be wise.  
私は求めた、満足するために富を。  
けれど貧しさを与えられた、賢明になるために。

I asked for power, that I might have the praise of men,  
I was given weakness, that I might feel the need of God.  
私は求めた、人の賞賛を受けるために権力を。  
けれど弱さを与えられた、神の御心を知るために。

I asked for all things, that I might enjoy life,  
I was given life, that I might enjoy all things.  
人生を楽しむためにすべてを求め、  
けれど、すべてを喜び楽しんで受け容れる人生を与えられた。

I got nothing that I asked for -- but everything I had hoped for.  
求めたものは何ひとつ与えられなかった—けれど、すべてはかなえられた。

Almost despite myself, my unspoken prayers were answered.

I am among all men, most richly blessed!  
こんな私のあるがままで、無言の祈りは聞き届けられた。  
私は、すべての人の中で最も豊かに祝福されている。

([http://blackdog.whitesnow.jp/servicedog\\_nicky/inori.htm](http://blackdog.whitesnow.jp/servicedog_nicky/inori.htm))

## 「愛」に対する飢え渇きがありますか

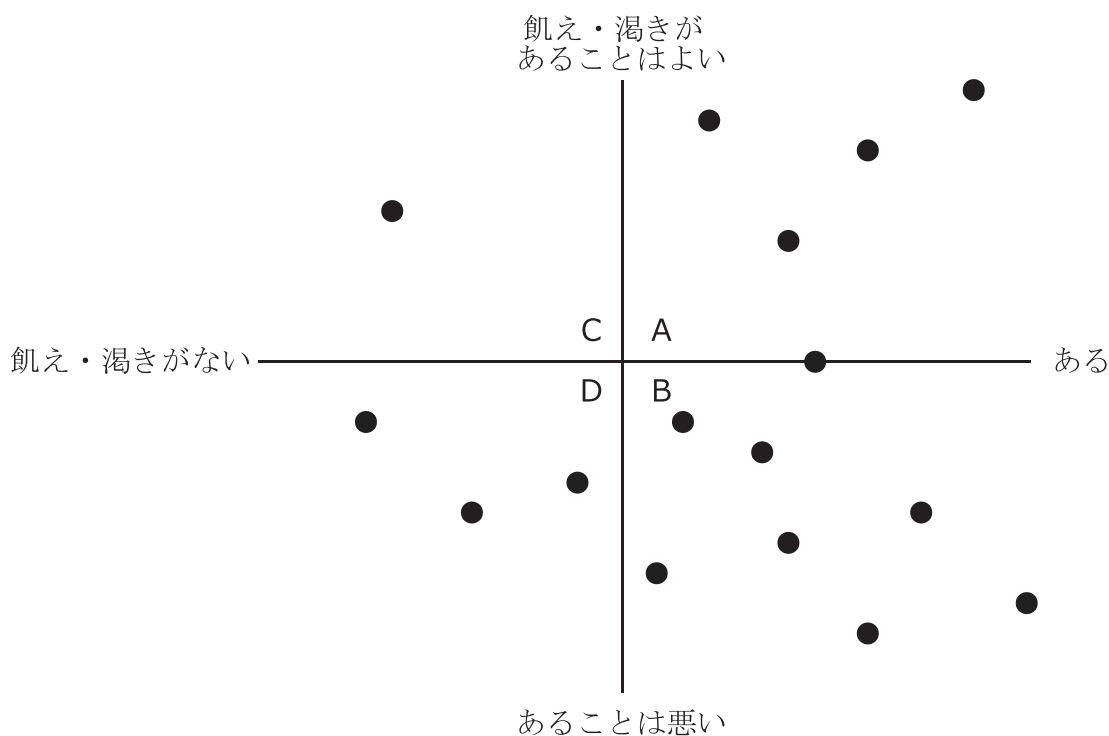
「健康に対する飢え渇き」問題について共創空間で向き合ってみると、以上のように実に多様な見方、感じ方が存在することがわかる。また、この問題には水や食料が満ち溢れても、飢え渇き問題は人間の力では決して解決できない深い本質（自己中心性）があることが見えてきた。にもかかわらず、この問題は、一見無関係に見える幸福と強いつながりがあり、健康に対する飢え渇き（不健康）があっても幸福となる（祝福される）秘訣があることもわかってきた。家族の支えかもしれない。そして、それは「愛」と呼べるものかもしれない。

そこで、次に、「愛」に対する「飢え渇き」という問題についても共創してみよう。私たちはどのような愛に飢え渇きを持っているのだろうか。また、とても大切な愛があることに気づいていないばかりではなく、今、愛と思っているものへの飢え渇きが、とても危険な場合があることにも気づく必要があるのではないのでしょうか。なぜなら、「愛」という曖昧な言葉に金縛りとなっている私たち自身を発見するからです。

【設問】「愛」に対する「飢え渇き」はありますか

タテ軸： 飢え・渇きがあることはよい・あることは悪い

ヨコ軸： 飢え・渇きがある・飢え・渇きはない



**Aゾーンの意見（愛に対する飢え渇きがあり、あることはよい）**

- 「飢え・渇き」を強い欲求と捉えた。現代の社会は物質中心で、自己中心的な考えがかなり浸透してきている。社会の流れの中で、殺伐とした感じを受けている人が、かなり多いのではないか。なぜなのか？それは、愛というものが無いからではないか。愛とは、相手の立場に立って、相手の気持を思いやる気持。それが愛に近いと思う。思いやる気持が、現代の社会の中に欠けているのではないか。学校のいじめ問題などに顕著に表れていて、それに対して今の日本人は辟易しているのではないか。飢え・渇きは、日本人が、失われてしまった愛や思いやりの精神を取り戻したい気持ちを強く持っているということではないか。それを持っているからこそ、今ないものを取り戻す原動力



になるのではないかと思い「よい」と考えた。

- 愛というのは、ヒトを愛するという意味ではなく、人間がみんな幸せになっていく、生きることを生産的に考えていく方向性、そういうものを愛として考えてみたい。価値観が多様化している今の世の中では、何に価値をおいて考え行動してよいのか、わからなくなっている。そういう意味で、愛に対する飢え・渇きは「ある」とした。失われた価値観を見つけるためにはよいと思う。
- 飢え・渇きは、求めているけど不足しているから感じるもの。人類愛が不足しているから、またそれを求めているから、Aにした。
- 愛は理屈ではなく感じるもの。人間の愛ではなく神の愛に飢え渇きがあることは良い。なぜなら、自己中心で我儘な者であっても、そのような自分を、そのまま受け入れてくれるから。そして、決して裏切らない。日々、十字架の犠牲の愛によって励まされている。この大きな愛は絶対的であり、永遠の愛であり、理屈では決してわからない。聖書には、神は愛そのものとある。また、「愛には恐れがない」とある。だから、理解できなくても嬉しくなる。辛くて苦しくて大変な時に、いつもあなたを見捨てないと、声をかけてくれる。嬉しいです。その愛の中で自分が生かされている。それによって自分がどこに向かって生きているのか、はっきりわかるから嬉しい。

#### Bゾーンの意見（愛に対する飢え渇きはあるが、あることは悪い）

- 愛情不足による片寄った愛（所有欲のようなもの）ではないのか。ひとつの例をあげる。自分の幼少期に愛に対する飢え・渇きがあった人が次の世代（自分の息子や娘）に暴力をしたりする。そういう問題を持っている人は、自分の育った家庭で、愛に対する飢え・渇きがあって、それを埋めるために次の世代で愛という名の暴力を繰り返してしまう。
- 愛とは、人間と人間との絆、優しさ、ぬくもり。こういうものに飢え・渇きがある。悪い状況としては、いじめ、孤独死、自殺、うつ病。今こういう話題が多い。人間的な弱さが出てきている。絆とかお互いの

人間関係が、薄まってきているのではないか。

- 人間関係が希薄になっている。それは逆にいうと、人が生きやすいか生きにくいかを考えたとき、生きやすい社会は、愛のある社会だ。生きにくい社会は、愛が欠乏し愛に対して飢えている社会ではないかと思う。今の人間関係にみる暗い現実とは、親が子を殺すとか、いじめがあることだ。人が生きにくい世の中。愛に飢え・渇きがある状態だと思う。愛は理性的に考える世界ではないかもしれない。愛とは感性的な世界。愛は感じるもの。
- 職場の人間関係に信頼関係がない。信じる気持ちがわからない。ギスギスしている。
- 対価を求める愛に飢え渇きがあることは悪いことではないのか。人には見返りを求める欲求というものがある。私は、相手に愛を与えようとする人は、対価を求めていると思う。無意識でも・・・。
- ストーカー的な（他人に依存する）愛に対する飢え渇きは危険。今の社会は殺伐としていて、スピード感がある世の中だからこそ、取り残されるような人が出てくる。そういう人は、面倒みてほしい、思いやってほしいなど依存する欲求が強い。また、ギスギスしている世の中だからこそ、他人に甘えたいという愛に飢えている人はどんどん増えている。このような人は、人より恵まれていないと思い、一方的な思いやりとか、自己責任があまりないストーカー的な愛とか、他人のせいにする傾向が見られる。
- 母への愛に対する飢え渇きも危険かもしれない。昔は、モーレツサラリーマンで母子家庭。今は、母親もモーレツに働くから、子供だけが家に取り残される家庭が多い。愛のはじめは母親への一目惚れから。それをうまく誘導していくと、人類愛へ発展して行くのかな。しかし、そこにも落とし穴があるのではないか・・・

**AとBの線上の意見（愛に対する飢え渇きはあるが、よいか悪いか不問）**

- 愛についてあまり考えたことがないが、愛するためには、伝え合うことが前提となるのかもしれない。天津中学校のいじめで、自殺した生

徒のことを思った。自分の集団の中で、自分と違う人に対して、ほんの少しうまくチョッカイを出すことが、お互いにできなかった。違う相手に対して、お互いにうまく伝え合うことができなかった。伝え合うこと、それが愛にもつながっていくかもしれない。

### Cゾーンの意見（愛に対する飢え渇きはなく、ないことはよいこと）

- 愛というものに対して、飢え・渇きという言葉を使って欲しくないです。愛というのは、代償を求めず、崇高なものだと思いたいし、思っている。どこまでいっても崇高なものだと思いたい。私はひとりで暮らしているが、私を思いやってくれる人の存在が、ものすごく力になっている。それも広い意味で愛だと思っている。そういう人に恵まれていることが私の力にもなっている。あくまでも、愛はそうであって欲しいという願いからCにした。

### Dゾーンの意見（愛に対する飢え渇きはなく、ないことは悪い）

- 家族愛が当たり前となっている。歳のせいかもしれないが、家族は水とか空気みたいになってしまっていて、あるのが当たり前。飢えとか渇きとかいうことは、あまり実感がない。そういうことはよくないかな、悪いかなと思ってDにした。飢えは腹がへった、渇きは喉がかわいたということであり、努力しなくても、手に入ってくることに危険を感じず。家族の愛を当たり前と思った瞬間に飢え渇きはなくなり、感謝する心が失われるところがよくない。
- 無償の愛に対する飢え渇きがないことが問題。愛の究極の形は無償の愛。典型的なものは、親の子供に対する愛。最近、親が自分の都合で、子供を殺すことが増えている。それが今、日本の社会の持っている問題を象徴的に表していると思う。自己都合的愛は悪い。これを変えていって、無償の愛というものを、そのまま表現できること、また貫き通せるような社会に変えていくことが、日本をいい国に変えていくことになる。無償の愛に対する飢え・渇きがないことが悪い。本質的な愛すら失われている。

- 偏愛ではなく無償の愛に対する飢え・渇きがないことは悪い。なぜなら、それが無い故に引きこもり、登校拒否の子供が、60万～100万人いる。その子供たちが成長して、1票投じるとき、この日本はどうなるのだろうかという懸念も出るくらい現実には厳しい。一例として、母親の男の子に対する異常なまでの可愛がり方がある。大学生になっても、母親が何かをしないと気がすまない。ふだんの生活の中で、父親不在の中で。男の子は女の人に対して母親の愛を求める。恋愛しても母親と同じものを求める。片寄った愛によって悪い傾向が見える。

### 偽りの愛と真実なる愛：「飢え渇き」はどちらに

このように、共創マトリックスで向き合うと、愛に対する「飢え渇き」について実に多様な価値観があることがわかる。全体的にバラツキがあるものの、Bゾーンの意見（愛に対する飢え渇きがあることは悪い）が多い印象を受ける。このゾーンの意見の理由として、無償の愛や愛情が欠乏していること、愛が冷めてしまっている現実があることをあげている。また、エゴ的愛に対して、飢え渇きがあることも悪い。もともと、飢え渇きがあっても、愛というものによいとか悪いとか、意識したことがないという意見や、その反対に、愛は崇高なものだから、飢え渇きというコトバを使ってほしくないという意見も登場した。さらには、人間の愛だけではなく、神の愛があり、この大きな愛に対する飢え渇きがあることは、心を平安にするという意見が披露された。

愛とは、相手の立場にたって相手を思いやる心に近いという意見があるが、その相手が自分に敵対する場合や、嫌いな相手ならどうだろうか？自分の感情を捨て、自分の立場を捨てても、人は相手を思いやることができるのだろうか。私たちは、この問いに対して、イエスと答えるのか、それともノーと答えるのか、自由意思が問われている。

ここから、さらに本質的な2つの問いがあることに気づく。ひとつは、私たちは、日々生活するうえで、愛に対する飢え渇きを持っているのだら

うか。ここでいう「飢え渇き」を「ある対象（いま想定しているのは愛）を強く求める欲求であり意思」と考えてみよう。なぜこの欲求が起きるのか？それは、自分にはその愛が欠乏しており、自分がその愛の中にいない不自由な状態にあるから。つまり、豊かさの中で不自由さを感じるのは「愛が欠乏している」からではないのか。そう、愛の冷めた人間関係が豊かな社会で横行している。

もうひとつは、どの愛に対する飢え渇きを持てばいいのか、という問題を考えることも大切。なぜなら、愛は多義的で、さまざまな顔を持っている。この世では、愛という名を使って自分の欲望を満たすことも日常茶飯のように行われている。「飢え渇き」に関する共創マトリックスで、よい・悪いについて吟味したのはそのためだ。

愛には、無償の愛（見返りを求めない愛）と、その対極にある有償の愛がある。また、自己犠牲的愛があれば、当然その対極には、自己肯定的、自己中心的なエゴ的愛がある。無償の愛、自己犠牲的愛に対する飢え渇きが強くなればなるほど、現実世界では有償の愛やエゴ的愛が支配的となっていることを物語っている。

愛について、Everyday Blessings(祝福の人生、2004年)の著者、Max Lucadoは同書で次のように語っている。

「愛は、果物の実（フルーツ）のようなもの。その実は、誰がもたらしたのか？ 人間の勤勉さですか。人間の深い信仰心ですか。それとも、人間の固い決意ですか。いいえ、いずれも違います。愛は人間ではなく、神の霊（聖霊）がもたらす実です。なぜなら、聖書では、『御霊の実は愛』（ガラテヤ書5章22節）とあるからです。」

## ■ちょっと一言

アフガニスタンで支援活動するペシャワール会の中村哲医師は井戸や用水路を現地の人とつくっています。水と食料がなければ人間は生きていけないということは、日本でも被災者が実感したところですが、長いこと活動を続けていくことは並大抵のことではありません。「飢えと渇きは薬では治せない」という中村医師の言葉から「飢え渇き」が問題提起されま

## 93 Day5 飢えと渇きに向き合う旅

したが、渴望感として捉えると、今はないけれどほしいものという捉え方ができましたが、重要なものを選ぶとなると若干違ったニュアンスでした。健康に対する飢え渇きと幸せ感はわかりやすいのですが、愛に対する飢え渇きは、愛の概念が曖昧で考えにくい気がします。

## Day 6 自由の中にある貧しさに気づく旅

### 第10話 インド

#### 自由の中の貧しさを考える

自由の中に貧しさがあれば、ほんとうの意味で自由とは言えない。インドに自由を求めたら、インドではなく自らの貧しさに気づき、「救い」を体験したというゼロ君のストーリー。これはまさに「自分の貧しさを知ることで見つけた喜びの旅」。自由で豊かな日本から、貧困の現実を求めてインドに向かったゼロ君だが、目にした現実は厳しく、インドのカオス的な世界の中に飲みこまれそうになる。しかし、随分後になって、ほんとうの貧しさは、自らの心の中にあり、インドという「外なる世界」をみているゼロ君自身の「内なる世界」(心の貧しさ)にあることに気づく。

人生には選択の自由がある。だから、人生の岐路に立った時、どの道を選ぶか悩む。ゼロ君も例外ではない。大学を卒業する時、日本での就職ではなく、インドに留学する道を選んだ。もっとも、その時は、2000年に起きたある出会いを通じて、インドではなく自分自身の心の中にある「貧しさ」と格闘することとなるとは、知る由もない。

#### インド留学と躍進するインド経済

ゼロ君がインドに留学したのは、今から30年以上も前の1970年代の後半。日本で自分の将来像が見えず、苦悩の末の決断。当時のインド経済は停滞し、世界のお荷物とまで言われた。大学の友人からインドに留学するとき「水杯を交わそう(もう会えないという意味)」と言われるほど、一般的な日本人にとって、インドは遠い存在であった。

もっとも、今でもそうかもしれない。インドと言えば、貧困、あるいはカレーばかり食べているとか、カーストという身分制度がある国というイメージが強烈で、今でも、地理的にも心理的にも遠い存在であることに変わりはない。しかし、このインドが今日では、BRICSの一角として、世界経済をけん引しようとしている。まさに隔世の感がある。この高成長

のインドに導いたものは、1980年代に幕開けした経済自由化への政策転換であった。インドは、それまでの閉鎖的、社会主義的な計画経済から脱皮し、規制を緩和し、国内の民間資本と外資を導入することにより非効率な経済体質を変える方向に舵を取った。その結果、1980年代以前の慢性的な3%前後の低成長から、10%近い高成長経済（最近はややスローダウン気味だが）に見事に脱皮した。

【インド基本情報】 外務省のホームページより

面積 328万7,283平方km（インド政府資料：パキスタン、中国との係争地を含む）  
 人口 12億1,000万人（2011年国勢調査（暫定値））  
 人口増加率 17.64%（2001-2002年：2011年国勢調査（暫定値））  
 民族 インド・アーリア族、ドラビダ族、モンゴロイド族等  
 言語 連邦公用語はヒンディー語、他に憲法で公認されている州の言語が21  
 宗教 ヒンドゥー教徒80.5%、イスラム教徒13.4%、キリスト教徒2.3%、シク教徒1.9%  
 仏教徒0.8%、ジャイナ教徒0.4%（2001年国勢調査）  
 識字率 74.04%（2011年国勢調査）

## インド (INDIA)

面積328万7283平方キロメートル（インド政府資料：パキスタン、中国との係争地を含む）12億1,000万人（2011年国勢調査（暫定値））  
 人口増加率17.64%（2001-2002年：2011年国勢調査（暫定値））  
 民族インド・アーリア族、ドラビダ族、モンゴロイド族等  
 言語連邦公用語はヒンディー語、他に憲法で公認されている州の言語が21  
 宗教ヒンドゥー教徒80.5%、イスラム教徒13.4%、キリスト教徒2.3%、シク教徒1.9%、仏教徒0.8%、ジャイナ教徒0.4%  
 （2001年国勢調査）識字率74.04%（2011年国勢調査）



2012年は日本とインドの国交樹立60周年にあたります。

2011年12月の野田総理大臣のインド訪問時にシン首相と署名された共同声明「国交樹立60周年を迎える日インド戦略的グローバル・パートナーシップの強化に向けたビジョン」では、2012年に国交樹立60周年を祝うにあたり、「日インド関係は民主主義、人権、法の支配等の普遍的価値並びに幅広い戦略的及び経済的利益に基づいており、両国は深い相互理解と活発な人的交流を有すること」が改めて確認されました。



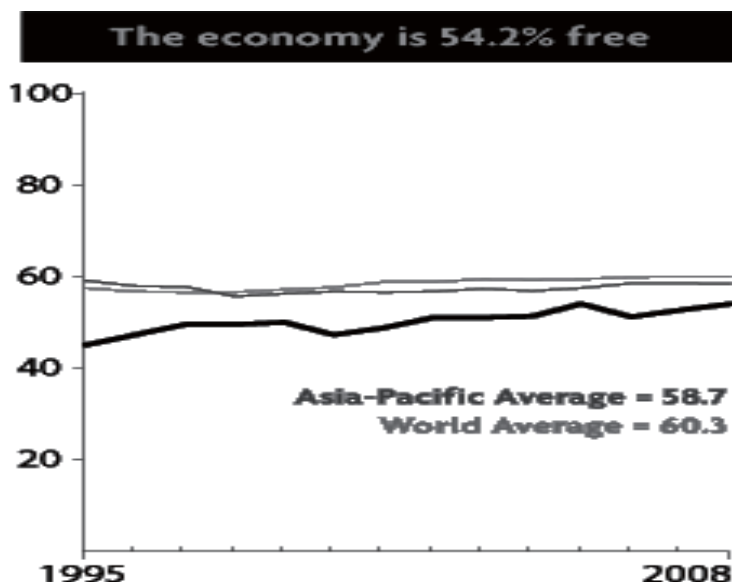
### インド経済の自由化が緩やかに進行

もっとも、経済自由化が進行し、勢いのあるインドではあるが、インド人の人生に対する自由度は逆に低下しているという現実があることは見逃せない。まず、インドの経済自由度はどの程度なのか？アメリカのシンクタンクであるヘリテージ財団の、経済の自由度に関する調査結果を紹介する。同財団は、経済の自由度を、経済の市場開放度を基準として測る。157カ国を対象に、1995年より毎年実施している。

経済の市場開放度は10項目（①企業活動、②貿易、③財政、④政府の介入、⑤価格統制、⑥投資、⑦金融、⑧私的所有権、⑨腐敗、⑩労働移動）について各々10点評価し、総合得点（100点）で、国別に順位づけた。

2008年の調査によると、インドの経済自由度は54.2で115位と中国（52.8、126位）、ロシア（49.9、134位）よりも高い（ちなみに、日本は72.5で17位）。また、インドの1995年の経済自由度は、45.1であったので、過去13年間で9.1ポイント上昇したことを意味する（図1）。

図1 インドの経済自由度は54.2%（2008年）



出所：K.R.Holmes et al. [2008] 2008 Index of Economic Freedom,  
The Heritage Foundation

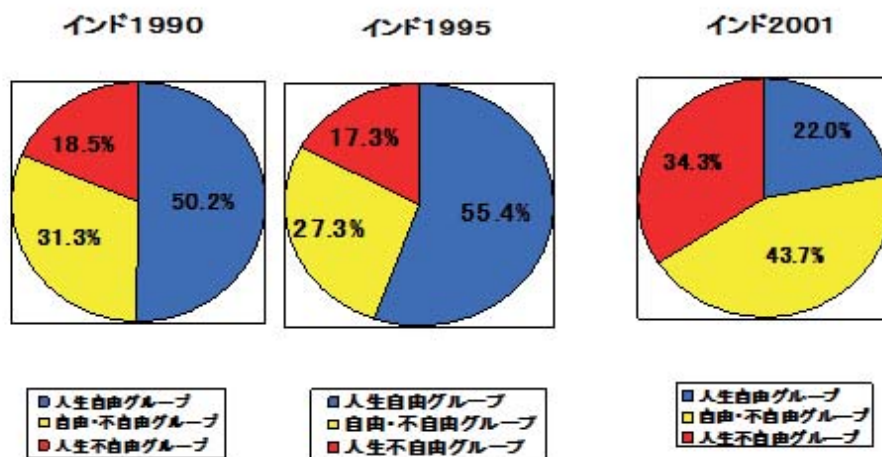
## インド人の人生自由度は低下

この経済自由化の流れは、インド人の人生に対する自由観をも変えたのだろうか？世界価値観調査(以下WVS)では、全世界80カ国以上の国、10万人以上(WVS2000年調査、インドのサンプル数2002名)を対象に、さまざまな価値観を調査している。

その中に「自分の人生をどの程度自由に動かせる(自由に選べる)と思うか」という質問があるので、これを参考にインド人の人生自由観の変化の有無を探ることとする。この質問に対する答えとして、「完全に自由になる」場合10点、その反対に「まったく自由にならない」場合と1点として選ぶ。

そこで、回答者の属性を3つのグループ(「人生自由グループ(7~10点)」、「自由・不自由グループ(5~6点)」、「人生不自由グループ(1~4点)」)に分ける。

図2 インド人の人生自由観に関する変化(WVS調査結果)



出所:インターネットで公開されたWVS調査データ(Values Surveys; Online Data Analysis)をもとに筆者作成。

図2には、人生自由観に関する3つのグループが、3時点（1990年、95年、2001年）でどう変化したのか示されている。1990年から2001年の約10年間で、「人生自由グループ」は50.2%から22.0%へ低下する一方、「人生不自由グループ」は、18.5%から34.3%へ上昇する傾向を示している。

これは、経済自由化がインドにおいて進行しつつあるものの、人生を自由に動かせる、あるいは自分の人生を変えることができると思う自由志向のライフスタイルを持つ人々の比重が、必ずしも増えていないことを意味している。むしろその反対に、人生不自由という価値観を持つ人々の比重が、増大する傾向にあることを示している。

「人生不自由グループ」の主な担い手は、低所得者層、50歳以上の中高齢者層、女性、低学歴者（初等教育のみ）、無神論者なのだ。このことは、経済自由化という上昇気流に乗れる層と、そうでない層との間において、人生の自由度に関する価値観格差が拡大していると読み取ることができる。

「人生自由グループ」を国際比較してみると、WVS 2000年調査では、インドの場合、22%であるが、これは世界80カ国中79位とかなり低い。ちなみに、ロシアは38%で74位、中国は64%で34位。実は、日本も低く39%で73位と、ロシア、インド並みでありビックリする。

このインドの経済的自由や、人生に対する自由度をめぐる現実から見えてきた問題とは、インドを鏡として、私たちもシェアすべき大切な問題ということに気づく。私たちが考えるに値する問題とは、「経済的に自由になれば、自分の人生を自由に（自分の思い通り）動かす」という態度（合理的行動）ではないのか。つまり、経済的自由度＝人生自由度ではないのではないか。

経済的により自由となっても、必ずしも自分の人生をより自由に動かせるとは限らないのではないか。そもそも、自分の人生を自由に動かすことができるのだろうか？さらに、自由に人生を動かす・動かさないという態度をとる背後にある価値判断とは一体何か？

そこで、この「自分の人生を自由に動かす・動かさない」という態度を

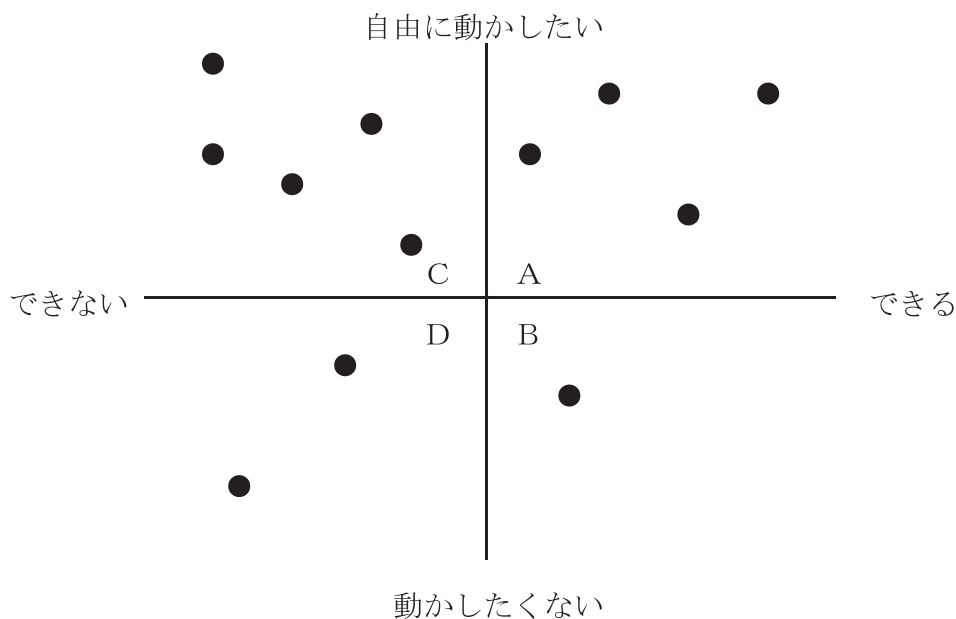
規定する自由意思（できる・できない、したい・したくない）の多様性を知るために、共創マトリックスで考えてみよう。

### ☆ 共創マトリックスの世界によろこそ！

【設問】 自分の人生を自由に動かすことはできますか

タテ軸： 自由に動かしたい・動かしたくない

ヨコ軸： 動かすことができる・動かすことはできない



#### Aゾーンの意見（自由に動かしたいし、動かせる）

- 年齢や体力を考えるとこれから「やれること」と「やれないこと」がはっきりしている。自分の意志を明確にして、努力すれば可能なことに挑戦したい。
- 家族のしがらみも減って今までより時間を自由にできるようになり、経済的にもやりたいことはできる状態になった。したいことはできる

が、これから何をすることができるのか、何がしたいのか、それを見つけない。

- 最近の若者は仕事の上で安定を求める力が強く、何もチャレンジせず事なかれ主義に陥っているのは大きな問題。自分はこれまでもやりたいことを通してきたし、これからも自分の意思に従って自らの人生を動かしていきたい。
- 表に出したくても出せない自分に無意識のうちに鎧をかぶせて押さえつけていることに気づいた。これからは自分らしい自分を前に出し、「生きづらい」から「心地よい」人生に動かしていきたい。そのために必要なことは面倒がらずにやっていきたい。

#### Bゾーンの意見（動かすことはできるが、動かしたくない）

- 自由なことができる立場にはあるし何でもやりたいとは思っている。しかし制約もある。何かをやろうとするときの家族からの反対や不満などは自分にとって制約となる。制約条件を取り除いて挑戦する自由を得たい。（自分自身を変えていくことが必要）

#### Cゾーンの意見（自由に動かしたいが、できない）

- 家族や社会のしがらみから逃れられない。自分のしたいことを表明したときに家族の合意が得られず反対されると、それ以上強硬に出ることができない。つまり、そこまで強硬に主張するほど自分が欲しているのか迷う。意志と行動は別の次元にあるように思う。悟ることが必要かもしれないが、仏教を勉強して知識を得ても悟れるわけではない。
- 長年ずっと会社人間だったので、終わったら何をしたいかわからなかった。町会委員をやって地域の人と関わりを持つことでその重要性がわかってきた。範囲を町内から市のレベルに広げて、市民社会の中で発信し受け取りながら生きていきたい。すべての物事に対して自分の意見で通してきた人生を反省し、人に対して聞く態度に変えていきたい。
- 自分のタイプとしてはAであるが、敢えてCと思っていたほうが周囲

とぎくしゃくしないし、それを考えるとできないこともある。自分の意見を強硬に通すことで果たして自分が自由になれるのか疑問。

- 「できないこと」より「したいこと」のほうが多い。与えられた中でベストを尽くす。
- 「やりたいことがやれる」ことと「やりたいことをやって自分の思うようになる」ことは別物。やりたいことをやっても、動かすことができないものは動かさない。

#### Dゾーンの意見（自由に動かすなどできないし、動かしたいと思わない）

- 今、自分のやりたいことができないところ（時点）にいる。家族の面倒をみるために「やりたいのにできない」ことばかり考えるとイライラするので、今は思い通りにはならないものと受容している。むしろ、家族を十分に面倒みてあげたい気持ちを自分で選択しているのだと思いたい。
- 自分の努力の限界を超えて動かしたくないし、動かすこともできない。無理やり動かそうとせず自然に任せるのがいいときもある。亡くした妻のガン治療であらゆる選択肢があっても必ずしもいい結果に結びつくとは限らないことを知った。なるがまま、なすがままに、自分の努力の及ぶ範囲内で動かしていければよい。

#### 共創マトリックスを終えてトーマンさんが気づいたこと

さまざまな意見を聴いていると、「やりたい」ことが「できる」ときに、それを「できない」と思い込んだり、「できないのは本当はやりたくないのだ」と自分に思い込ませたりする外的要因・制約が、いったい何なのかを見極めることが、自分を自由にするスタートなのではないだろうか。

自由とは、自由である状態をいうのではなく、どんな状態に自分を置くかを選択できることではないだろうか。

その意味で、上記のDゾーンの意見は素晴らしい。主体的に選択した状

況は、たとえ困難であっても容易に受け容れることが可能で、むしろ積極的に困難にも対峙できることになる。

楽を選ぶ人生もあれば、困難を選ぶ人生もあってよい。先の先まで見える平坦で楽な道より、この坂道を登りきった向こうには、何かワクワクすることが待っているのではないかと思えば、先の見えない道を選ぶのも自由のひとつなのだと思う。

自由とは単に不自由のないことだけではないはずで、苦悩の先に歓喜を見出す自由をも人間は持っているのではなかろうか。

### **ゼロ君の目が開かれた “貧しさの中にある自由”**

ゼロ君も、トーミンさんが気づいた「自由は“状態”ではなく、“選べる”こと（選んだ結果、状態が変化する）」に共感。しかし、自由＝“選べる”とすると、どんな自由を選んでいるのか、依然としてわからない。つまり、自由とは選ぶという行為の根っこにある“(選ぶ)意思(freewill)”なのではないか。選ぶ意思を問わなければ、「思い込み」で選んでいることになる。「思い込み」は行動を引き起こす起爆剤だが、同時にそれに囚われるという不自由さが存在する。

インドに行く自由があり、この自由が自分の夢を実現し、自分の人生を自由に動かせると「思い込んで」インドに留学した。しかし、実際には、様々な苦しみと肝炎という病気とが待っており、全く自分の思い通りにならないことだらけのインド留学であった。しかし、それでも自己実現という生き方、自由の道を変えなかった。

ところが、こうした生き方はインドから日本に帰国して体験したある出来事によって、これまで心の奥底で信じてきた自己実現という価値観が粉々に砕かれてしまった。それは、インドから帰国してから20年経った2000年のある「出会い」であり、それまでの価値観が全く的外れであることに気づかされた。その結果、自己実現こそが人生を自由にすると考えたAゾーンから、自己実現とは実は罪そのものであり、自分（の人生）

を不自由にし、貧しくするというDゾーンへと変化する体験をすることとなる。

その出会いとは、2000年5月16日の父の死を通じて訪れた。薬害によるスモン病で、全身の神経がマヒし盲目となり、車いすで長年闘病生活を続けていた父が、療養先の養護施設で亡くなったとの連絡を受ける。

一週間前には元気な父をみていたので、あまりにも突然のことだった。遺言もない。ショックのあまり床から起き上がることもできない。そんな時、聖書が目の前にあった。なぜ父が亡くなったのか、聖書をみてもわかるわけがないと思いながらも聖書を開く。父が亡くなった5月16日を頼りに、5章16節の箇所だけを聖書のはじめ(創世記)から終わり(黙示録)まで片っ端から読んでみた。しかし、わからない。

父の葬儀の日、聖書に触れる家庭集会在浦和で行われた。そこでドイツ人宣教師ベックさんにお会いした。ベックさんは、父が亡くなる2ヶ月程前に、養護施設で父に会ってくださった方だ。5章16節の話をしたら、ニコツとして笑顔で、「それは、テサロニケ人への手紙第1(にある5章16節)だよ」と語ってくれた。急いで、その箇所を開いてみると、「いつも喜んでいなさい」とあった。

その時、父の死や葬儀の問題が起こり、辛くて悲しくて、とても喜べる状態ではなかった。なので、正直言って、心の中では聖書を捨てようと思え思った。

しかし、それから2週間後、依然として辛い状態ではあったが、再び同じ言葉があった。今度は「いつも喜んでいなさい」という“声”として聞こえてきた。なぜなら、(あなたがどのような状態の時でも)「私がいつもそばにいるから」と。その時、理由もなく、涙がドツと出た。問題を抱えながらも喜びが湧きあがった。これが、ゼロ君の「救い」の瞬間。自分の小さな理性とか感情では到底測り知ることのできない体験。今から13年前の出来事。父の死を通じて、自分は我儘でどこまでも自分中心に生きる罪人であることに気づかされた。罪という病を負っている者に「救い」がもたらされた。これは体験しなければ決して理解できない。

この体験以来、自己実現こそが自分の目指す理想であり、自分を自由に



する道と「思い込んでいた」自分が壊され、自分の人生そのものが、大きな神の愛の計画の中にあることを知らされた。万物の創造主である神を無視して、自分を神とする自己実現の道。この生き方こそが、実は罪そのものであり、その罪からは自分の力では決して自由になれないことを辛い経験を通じて知らされた。罪のかたまりである自分のような者のために十字架で死んで罪から解放してくださった主イエス・キリストに心から感謝した。亡くなる前の父にベックさんはこう語ってくださった。「大切なことは3つ。主イエス様に対し、(あなたと向き合わず背を向けていたこと) ごめんなさい。(私の我儘のために私の代わりに十字架で死んでくださり) ありがとう。(あなた様とともに歩みたいので) これからもよろしく。」

ゼロ君にとって、そして、真理を求めるすべての人にとって、共創マトリックスはその入り口であり、「思い込み」という心の暗闇に真理なる光が差し込む空間となっている。なんと素晴らしいことか！

### ■ちょっと一言

インド人の自分の人生自由度が低下していることは知りませんでした。すごく自由そうなイメージを勝手に持っていましたから。

「自分の人生を自由に動かせるか」というのは切実な問題ですね。自由でいたいけれど、どこか自己規制しているところがありますし、できない理由を並べたりしている自分を反省してしまいました。

## Day 7 自由のワナと豊かさのツケに向き合う旅

### 日本帰還

#### ～自己満足と無関心からの脱却～

##### 経済的豊かさで満足できなくなった日本

自由のワナ、豊かさのツケ、これを、一言でいえば、自己満足と無関心のことを指す。えっと思っていないですか。この意識あるいは態度こそが、自己満足と無関心さそのものではないのか。しかし、自己満足と無関心という道の先にあるのが、人類の最初の状態であった「束縛」に舞い戻ってしまうと知れば、目が覚めるではないか。

人生は自己満足のためにあるとすれば、いくら豊かになったとしても、それは自我に「束縛」された人生となる。また、豊かな世界とは、選択の自由が限りなく広がる世界で、自分の関心のあることを自由にできる世界。しかし、自分の関心のあることに夢中になることや、その関心あることに共鳴する仲間と群れることは、反面、自分の関心のないことと向き合わなくても済み、無関心もしくは冷淡な態度を取りやすい。

そこで、経済的、物質的に豊かになったが故に、自己満足し、無関心となる危険と向き合う旅を試みよう。具体的に共創空間でこの問題の持つ広がりや深みを知るために、豊かな先進諸国で起きている「ニート」現象に着目し、日本の事例を中心にヤング世代とシニア世代が向き合い対話することにした。

##### ニート問題について、ヤング世代とシニア世代が向き合う

ミーナさんが所属する大学の授業で、「ニート」現象について共創空間で考えてみようという案が浮上していた。ニートとは、Not in Education, Employment, or Training (NEET) の略で、教育、労働、職業訓練のいずれにも参加していない状態を指したイギリス生まれの造語。日本では、15歳～34歳の若年の無業者をさし、日本には推定で100万人いると言わ

れている。

これを聞いたライフスタイル研究会の一人は、「ニート」現象についてヤング世代とシニア世代が、教育の現場で向き合っていないのではないか。これこそがまさにより重要な問題ではないかとけしかけた。そこで、早速、共創マトリックスでニートについて実際に向き合い、向き合う意味とその背後にある価値観の多様性を探った。

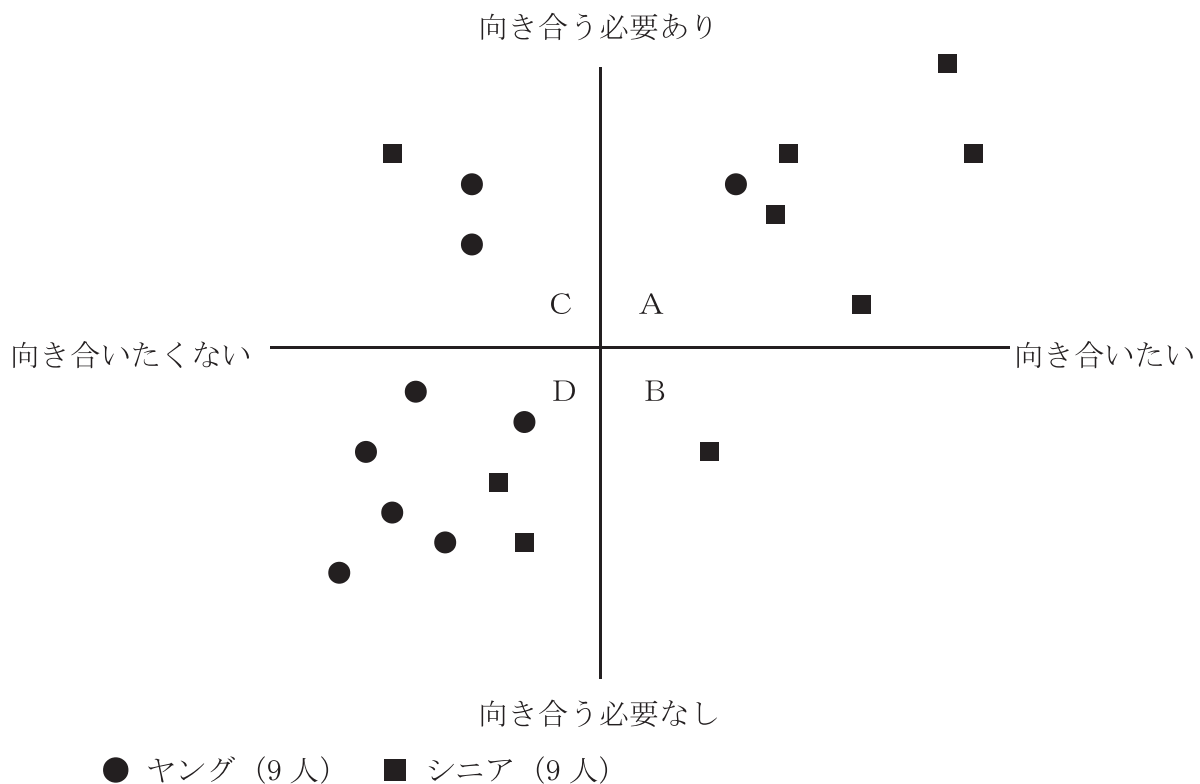
### ◇ 共創マトリックスの世界によろこそ！

【設問】ニートと向き合うことについてどう思いますか

タテ軸： ニートと向き合う必要あり・ニートと向き合う必要なし

ヨコ軸： ニートと向き合いたい・ニートと向き合いたくない

最初は、ヤング世代とシニア世代が共創空間上で同時に向き合ってみた。



### Aゾーンの意見 (ニートと向き合いたいし、その必要がある)

- シニア：私は、ほんとうはニートを認めたくない。しかし、社会の現状として100万人近くいることを認めなくてはいけないと思う。なぜそうなったかは個人差があるでしょう。社会がそうさせたということもあるし、家庭にも問題があるのではないかと。若い人の将来の芽を摘みたくないということもあって理解していききたい。これから社会保障の問題もでてくるでしょうし、ニートは社会に住む私たち全員の共通した問題として考えていききたい。
- シニア：全国に80万人以上いるニートの親も苦しんでいるという記事を読んだことがあるが、ニートになっている本人が、いちばん苦しんでいると思う。今の豊かな世の中で、ちょっと自分の意に反したことに会おうと嫌気が差し根気が続かない。ますます自分の立ち位置が混乱し、どういうことをしたらよいのか見えなくなっている。本人の自分を見つめる力の弱さ、自分をどう活かしているのか、ベクトルをどう向けたらよいのかが分からない。まさに、心の不自由人間だと思う。私の兄も長いことパラサイト、ひきこもりをやってきましたが、親が老いてきて、他者の助けが必要になってきて、ようやく兄は気づきました。やる気がない本人がいちばんの問題ではあるが、やる気がない人を沢山つくっている世の中に、目を向ける人が増えていくといいと思う。気づく空間を創っていく大切さ。家庭でも社会でも。たとえ小さなことでも、自分が他者から、うまいね！とか、いいよね！と認められていることに気づかない。他者からの肯定的な眼差しを知らない。
- ヤング：もし身近にニートになっている人がいたら、あるいはこれからなろうとする人がいたら、まず話を聞くことだと思った。実際に、私の姉が「ニート予備軍」的だったので、姉の話をしてします。大学4年生の時、急に航空会社のグランドスタッフのような英語を話す職の道に進みたいと言ったけど、英語の勉強をしていないし、英語の力もない。すると、その職業につけないのなら就活しないと言い始めて、今すぐ就活しなくても来年すればいいと言い始めた。私が思うに、英語

の仕事はそれだけではないし、何かしら自分の就きたい職に携われることができると思う。もしなれなくても働くことは自分にとって社会にとっても大事なことから、姉に志している職を投げ出してほしくないと思いいろいろ話をした。すると今度は、大人と関わりたくないといい始めた。アルバイトをしてお客さんがクレームを言うので、そういうのが「面倒くさい」からとりあえず大人と関わりたくないと言って、今度は幼児系に進みたいといい始めた。大人と関わりたくないから子供を対象にする幼稚園の先生になりたいという。でも、姉は妹の私に言われるのが嫌みたいでした。姉は悩んでしまって、親がこういう仕事もあるよ、といろいろ話をしていたら、はじめて姉はブライダルの道に決めて今は就活をやり始めた。やっぱり迷っている人、ただ単にやりたくない人もいるかもしれない。けれども、面倒くさいという一言だけで判断するのではなく、何かしら理由があって面倒くさいとかやりたくないと言っていると思うので、向き合って話を聞いてあげることが大切だと思いました。

- シニア：個人的にはニート問題にはあまり向き合いたくない。ただ先ほど言われたように自分の身近の人がニートになっていたら、まわりで見栄、世間体ではなく、20年後、30年後、40年後、悲惨な人生が見えるので直してあげたい。面倒な問題なので知らない人には向き合いたくないかな。80万人以上もニートの人がおられる。本人にとっても不幸な人生、社会にとっても損失が発生。仕事とは、やっている内に好きなことが見つかっていくもの。自分自身で仕事をおもしろくしていくのが仕事じゃないかなと思う。
- シニア：人間、共同体の中で住んでいてその核となるのが家族です。そういう衣食住の中で自分がやらなければならない義務がある。ニートの人はその義務感が薄れているなあ。私の家庭は貧しかった。私はふんばって、その結果人並みの生活を送れるようになった。息子は鬱からニートらしきことになった。今、一生懸命仕事を探しているので成功するだろうと信じてやりたい。そのためには話し合いをしてプラスになるようなことをしてやりたい。本当は相手の方から話をしてき

てほしいが、私の方から話すようにしているのが現状です。

- シニア：ニートとは経済成長してきた国が作り上げてきた言葉かなとも思う。真面目に働いていても、先進国になればなるほど選択の自由が増えニートは増えていくと思う。自由で豊かな時代になっても、そのような人たちが出てくるのは止むを得ない。ニートを救っていく、社会の責務としてニートを減らしていくという考え方を持つ必要があると思う。

### Bゾーンの意見（ニートと向き合いたいがその必要はない）

- シニア：社会全体として、ニートという人たちがいるということは、社会的な損失だと思う。なくしたい。そういうことがないような社会であってほしい。そのためには、向き合う必要がある。向き合う必要についてですが、ニート本人と向き合う、というよりも、そういうニートを創りだした悪しき環境（家庭・社会の環境）と向き合う必要があるのではないか。本人と向き合っても、大きな問題解決にはならないのではないか。

### Cゾーンの意見（ニートと向き合う必要があるが、向き合いたくない）

- ヤング：ニートについて知る必要性は認めている。が、向き合いたくない。実際に、私の兄が大学を中退して、バイトもしないでニートをしている。好き勝手にして親に養ってもらっている。私から見て、兄は人間関係がそんなに得意ではなくて、本人は、「バイトをしてもうまくいかないからいやだ！」と、働きたいと思っていないようだ。そんな兄を見ていて、自分は大学にきてやりたいことを見つけてやっていることが、兄には通用しないから、兄を見ていてイライラしてきてしまう。自分には、兄のそういうところが考えられないから、向き合おうとしたことはあるが、理解できないから向き合いたくないな…という立ち位置になりました。
- ヤング：社会問題にもなっているので必要かな。向き合いたくないのは、たぶん向き合ってもどうすればよいのかわからず、対応できなく

なっちゃうかもしれないので。

- シニア：最初はDにしようかと思ったのですが、社会的責任、家族の責任があると思うのでCにした。私が学校をでたのは60年近く前のこと。卒業前にすでに10社位内定を受け、4年生の12月にやっと就職先が決まった。今もその当時とあまり変わっていないと思うのですよ。私の感触では、要は甘えというか、自分に適した仕事というのは贅沢ではないかと思う。私自身は生まれてから22年間、大学も出してもらい、親に世話になってきたので、早く稼がなくてはという気が先にあったので、この仕事が自分にあっているとかいないとか考えている余裕は全くありませんでした。自分の好みだとか、きついとかきつくないとか、賃金が高いとか安いとか、そんなことを考えなければけっこう働き口はあるんじゃないかと思う。

#### Dゾーンの意見（ニートと向き合いたくないし、その必要もない）

- ヤング：怠け癖がついて仕事をするのが億劫になってしまったような人たちとは向き合いたくない。そういう人たちは、こちらから何を言っても変わらないだろう。自分で自分を奮い立たせて頑張ってほしいと思う。私たちは税金を納めているのに、なぜそこからニートの人たちに払わなくてはいけないのかと思う。代々木公園で冬場、お雑煮を配っている団体さんはすごいと思うが、なぜそこまでする必要があるのであるのかな。
- シニア：ニートを積極的なニートと消極的なニートとに勝手に分けた。積極的なニートとは、今の教育は自分には合わないから、たとえば全国を歩いて、それなりに自分を高めようとしている人は問題がない。問題は、消極的なニートで、なんとなくそっち（何もしない道）へ行っちゃった人。できるだけ何かをしてあげたいけれど、そうするとますます甘えてくるような気もするので、冷たく感じるかもしれないけど、まあ、ほっとけ！積極的なニートに対しては、アドバイスをしますが、消極的なニートは・・・もう好き勝手にせい！それはおかしいよ！と。皆さんから反論がでるのを楽しみにしています。

- ヤング：家族の力が必要。まわりの第三者が本人に、なぜ働かないのかと言っても、自分の考えがあるから、あまり聞いてくれないと思う。だから自分の力でなんとかやってほしいし、向き合う必要はないかな。
- ヤング：何でもかんでも面倒くさいと思ってしたくない人、精神的に病んじゃって、まわりの人とは関わりたくない人。自分が変わらなくちゃ変わらないし、人に言われて、それによって悩んでしまう人もいる。自分がまずい〜と思ったら変わると思う。
- ヤング：やる気のない人に話す労力を使うのはもったいないから、向き合いたくないし、必要もないと思う。
- ヤング：自分は体力も労力も使いたくない。そういう人と向き合うためには体力・精神力を使うから向き合いたくないしその必要もない。
- Dの補足です。ニートとはひとつのうつ病のようなものだと思う。うつ病は、下手に第三者が入って、頑張れとやると、かえって悪化する。ニートもうつと同じ心の問題なので専門家を交えてやらないと、下手にいじくりまわすとおかしくするような気がする。
- ニートはうつと同じようなところがある。うつは今では誰でも罹りやすい病気だが、精神的な病に対してまわりは冷たいところがある。接し方とか社会の考え方や理解も必要なのかなとも思う。だから私の意見はDではなくてAなのかもしれない。ある程度、身近な人でないと身を削ってまで、そこまでしてあげられない。

## ニートについてシニア世代同士でさらなる共創

ヤング世代とニート問題について向き合って、興奮冷めやらないライフスタイル研究会のメンバーは、場所を移してさらに共創を続けた。

Aゾーンに立ったあるシニアはこう語る。

「昔は社会的弱者のような人は、社会が取り込むようなところがあった。少し精神障害があっても、社会が取り込むようなら温かい社会かな。豊かな社会で育ってきたヤングは、切り口が分からない人が多い。こういう切



り口があるんだよと気づかせてあげたい。向き合うとなるとハードだが、こういう人がいるよとモデルのようなものを提示してあげる。どうしたらよいか分からない人がいるのではないかな。パラサイトシングルとかモラトリアムとかいろいろな人がいますけどね。イメージが豊富にもてたら生き方も多少出てくると思いましたね」

Aゾーンのシニアはさらに語る。

「日本では20歳過ぎると健康保険、国民年金を払わなくてはいけない。食べさせてもらって、のん気にはしてられないというのが現実ですよ。払うには仕事をしなくてははいけない。それをしなくては最終的には生活保護者になってしまう。また税金で賄っていかなくてはならない。循環が悪い。障害者に軽い人から重い人がいるように、ニートの人も個々違うパターンがあると思うので、そのへんはよく研究して、それなりに対応していかないとね。社会全体が最終的には憲法で保障されているから、最低の生活ということになると、最終的には生活保護者になってしまう。これが社会の本質だなと思っている」

これをきっかけに、一人一人が次々とキャッチボールを始める。以下がその白熱したストーリーです。

「驚いたのは、学生のお姉さんがバイトをやっていて、大人にクレームをつけられて、それがきっかけでニートになっていく。ものすごく抵抗力が弱い。これからニートが増えるばかりだ。それに対して何が手を打てるか・・・」

「そういう人たちは甘えだと思う。自分で何かをしなくてははいけないという社会的責任が、自分のものになっていないし、そういうところに気づかせられる人が周囲にいなかったことはすごく不幸だ。5年後、10年後の姿が想像できない。今のままでいいやという人がいる。そういう人たちには今日と明日しか見えていない。自分の問題として引き寄せる力がすごく

少ない。そののところが気がつかないで大学生まで育っちゃうことがすごく怖いなと思いました」

「大学生になっても学費を親が払ってやっている。そうすると子供も親離れできなくて寄生的になっていく」

「ニートの問題は大事ですよ。甘さをどう抜くか！」

「本人たちが甘えていると思っていない」

「むしろ被害者だと思っている」

「多様な生き方ができる選択肢が増えてきたことは顕著ですよ。基本的に社会システムの中で生きていかななくてはならないから、最低限の責任などがあります。そののところが無視して。昔風にいえば落ちこぼれちゃった人たちみたいの、あふれちゃった・・・」

「無気力」

「ホームレスをする力もない。(ホームレスはエネルギーがいる)」

「面倒くさい。とにかく面倒くさい症候群」

「大卒ニートが多い。豊かな時代の甘えですよ」

「親の世代が子の世代を育てたので、親の意識も変えなくてはいけない」

「しかし、親の世代には戦争など色々なことがあったりして無理かな」

「このテーマを見たとき、向き合うこと自体が大事なことなので、そこにマグネットを置いた。ニートであろうとニートでなかろうと、向き合っていない人が多い。社会と向き合うとかね、時代と向き合うとかね、自分と向き合うとかね、世界と向き合うとかね。向き合うということは人間にとっての必須科目で、向き合うことを否定するC、Dゾーンの人の方に問題がある。学生に限らず、大人の人にも向き合うことの欠乏症が多い。選挙などの投票率が低いのもまともに向き合っていないから」

「僕はまるまるAです。これは今の世の中の最大の問題ですよ。まず向き合いたい。あの手この手で話してみても体験させてみせて、それでもだめだったらギブアップ。いま、マンションでお助けネットを立ち上げているのですが、若い人にも参加するように進めている」

「ニート問題は老人問題と似ているところがある。(家庭の)老人と家族が家の中で、息が詰まっちゃうことがある。介護者のように社会経験の豊かな人が入って行って風通しをよくしたら、少し行き詰ったところから息苦しさがなくなるのかな」

「時代が変わっていても、根本的なところで、コミュニケーションがとれるかどうかというところではないですかね。面倒くさくなったら、もう心は動いていない。家庭内で威圧感のある父親の前に座らされて、心のうちを話すように言われても、何も話す気になれない。日々の生活で、言葉を交わす心遣いがあることが大切だと思う」

「これからは孫のことが心配だ。小5から高1までいる。彼らはこれから何を考えてくるかな。親と考えが合わないときは何を言ってくるかな。そのときはどう答えてやろうかなと」

「昔の向こう三軒両隣のつながりが、これから必要だし持つべきじゃないかな。千葉県美術館で、今、山下清展をしています。彼が生きてこられたのは、その力があつたと思うのです。家族だけで解決しようとしても、できないことがいっぱいあると思う」

「人間というのはどこかいいところを持っているわけ。社会がそれを摘んじゃっている」

「家族が皆集まるのは食事時。その時をうまく利用して少しずつ少しずつ、時間がかかるけれど、それしかないかなというのが私の意見です」

## 共創マトリックスから見えてきたもの

ニート問題について多様な価値観があることがわかった。異なる価値観では、特に、ヤング世代はDゾーンに、シニア世代はAゾーンに多くのマグネットが置かれた印象を受ける。

Dゾーンのヤングからは、怠けぐせ、面倒くさいと何もしたくない人とは向き合いたくない。その必要もない。他者が何を言っても自分が変わらないと変わらない。もし、自分が向き合う立場になっても何も言えなくなってしまう。やる気のない人に話す労力をもったいないという意見があった。

それに対して、Aゾーンのシニアは、個人的には向き合いたくないが、現状を無視できない。本人も不幸。社会の損失。甘えている。義務感がうすい。ニートをしている子どものプラスになるような話し合いをしてやりたい。しかし、本当は自分のほうから話なんかしたくないという苦しい胸の内を吐露した人もいた。ニートは先進国になればなるほど増えていく。社会の責務と向き合うのは必要。社会共通の問題。気づかせてあげたいという意見が多い。

ゼロ君は言う。

Dゾーンに立つ人は、向き合いたくないし、その必要もないとする立場だが、そこにマグネットをつけた時点で実は『向き合う』という態度に変化することに気づく。だから、共創マトリックスは大切。この空間につくということ自体に意味がある。Dゾーン自体を排除してしまうとおかしくなっちゃうんです。自分の無関心さに気づき、向き合う空間こそが大事なのではないのでしょうか。

葉っぱさんも気づいたことを語り出す。

日本は自由な国なのに、資本主義や競争社会の中から生まれる特定の価値観に縛られている感じがする。そして、この豊かな社会で蔑ろにされてきたことは「心の存在」ではないだろうか。たとえば、幼児が砂場で一人遊びに夢中になっている。それは、後ろから母親の温かい眼差しを受けて

いるという安心を感じられるから夢中になれる。「背中に温かい眼差しを感じる」という本気で愛された経験が必須条件ではないだろうか。おじいちゃんでもおばあちゃんでもよい。近所のおじちゃんやおばちゃんや自分自身からでもよい。この経験から安心感が生まれ、強い目的意識を持って行動できる力が育つのではないだろうか。今までの日本社会で大事にしてきただろうか。

学校も社会も家庭も企業も、本来は人が人をケアする現場。人が人をケアするという役割の価値が薄れてきた。家庭においても、女性の社会進出があり、育児・介護において家族がお互いに提供してきたケア、思いやりが、経済的豊かさ追求の時間に追われて激減してきた。自己実現・利便性・個人の願望のニーズのためにいろいろなサービスが提供されている。だが、人間的温かさとは程遠い。

この共創空間で繰り広げられたニート問題とは、人間は人間とどう向き合っていくのかという、人間の人間に対する接し方の問いかけではないか。私たちシニアは、たとえば、親は子に、子は親に依存しない、自立した人間になるように教育を受けてきた。他者に迷惑をかけるのはよくない、依存するのはクールでないというように。その結果、人間の情の問題・人間のケアの問題は、自立できなくなった人（例えば病人など）に限られるというイメージで育ってきた。

共創空間での発言からも、自分中心、自分への関心が大きく占められている。他者に迷惑をかけたくないという反面、他者からの迷惑は困る、煩わしいことは関わりたくない、ニートをしている人はわがまま、自分勝手、社会保障の損失の原因になる、不条理人間とか。ヤングからもシニアからも自分中心的な意見が多くでた。

もしかすると、この共創空間にも「ニート」が存在しているのかもしれない。先ほど、長い間ニートをしていた兄の話をした。兄は20数年間ずいぶん遠回りをして、自分が親に必要とされることで気づいた。本気になって兄と向き合う人が早くにいたらと、この過ぎた月日を残念に思った。しかし、ある時ニートをしていたのは、兄ではなく、私かもしれないことに気づいた。興味がもてない。やる気がおこらない。面倒な感情。心が動

かない世界で、どんなに生きづらさを感じていたのだろう。ニートをしてきた兄の立場に立って、自分が生きている姿を想像したら、つらく苦しくて涙が溢れてきた。

兄は長い間、そのような状態で頑張ってくれた。ありがとう。気づかないでごめんね。そんな思いをしてから、不思議に兄が“心”を少しずつ開くことができた。今まで兄を見ていてイライラしたマイナスの感情は、兄を見ているようで実は、自分の中にある見たくない、見ようとしらないものにふれていたのだろう。自分が気づかなかった自分の心の姿を気づかせてくれた。同時に兄のやさしさを受容できた。

ニートの人を含め、豊かな社会を構成している私たち一人ひとりの生き方(心の使い方)の間違いが、ニートの人をつくっているのではないのか。ニートの人を変えるのではなく、私たち一人ひとりの生き方・ライフスタイルを変えることによって、社会が変わっていくのではないのか。

私たちは豊かで便利な生活になれ、さらに便利さを追い求め、漫然と生きてきたところがないだろうか。不満があれば国に求める、政府に求める。自ら働きかけようとはしなくなっている。その反面、他者に対しては、自分以上に自立を求め、完成型を求めることになってはいないだろうか。

共創マトリックスに参加するというのは、ニートをしている人にあなたの甘さを抜けというのではなく、私たち一人ひとりのなかにある甘さを抜け、あなたはこれでよいのかと問われている空間だと思う。自分が問うのではなく、自分が問われている空間だ。

最後に、「ニートと向き合う」とは何であろうか。それは「自分の中にいる自分を愛せないもう一人の自分と向き合う」ということではないのか。自分自身を徹底的に好きになろう。すべてはそこから始まる。

## ニート問題について、トーマンさんとゼロ君の会話

**T**：向き合うことについてはすべて賛成なので、ニートにも向き合う必要がある。向き合いたいといっても、本人を探し出して「あなたねえ・・・」とお節介をするようなつもりはないですね。

**Z**：人間には主観的要素と客観的要素がある。向き合いたい・向き合いたくないという軸は、主観的要素で判断する軸で、意思・本気度をみるために必要なのではないか。実際に自分がそこにいたとき、その人のことをどれだけ考えられるか、その人に愛情をこめて向き合っているかが試されているわけで、軸には意味がある。

**T**：ニートというものを、社会が生み出したものと考えると、社会システムでサポートする必要があると思う。そういう仕組みというものができてこないといけない。そういう人たちを支えられる仕掛けが、社会にうまく埋めこまれればよいと思う。個々人でまわりの人たちを叱咤激励したり撫で撫でしたり、これはその問題を解決の方向へもって行ってないと思う。どんどん生まれてきます。その元を断たないと。その元がどこにあるか考えないと。

**Z**：ニート現象の根っこにあるものとは一体何か？ニートの定義を平たく言えば、「学ばない・働かない・訓練されない」人のこと。これって、「何もしない」人のことですよ。みんな“楽（ラク）”をしたい。そのラク志向を実現してきた現代の便利さと快適性を追求する経済社会。その結末がニートを生み出し、無関心と自己満足を加速させている。3・11（東日本大震災）があっても私は関係ないという人が結構多い。つまり、無関心病と向き合っていない。また、自由は人を甘くもする危険がある。自分の甘さを抜かず、ぬるま湯的なところで、自己満足してしまう。葉っぱさんが話しているように、ニートその人ではなくて、ニートをみている自分の心の中にいる「何もしない」という敵ではないのか。その甘さをどれだけ抜けるかが問題。ニートという嫌なものを見ている感じだけれど、実際は

自分を見たくない、見ようとしてない。だから、そういう問題を突きつけられると自分ではどうしようもない。でも、そういう環境を与えられると気づくではないですか。そういう時に自由意思を働かせて、たとえば、ぬるま湯的な生き方をしたくない、もっと熱くて冷たい生き方をしたい、そういう選択の自由があるのだと思う。自由意思が根本的な問題ではないのか。

**T**：私は、ふつうは、やりたいかやりたくないかがはっきりしている人間ですけど、ことニートだけは中立の立場なんです。結局、本人の問題だから。本人が変わらなくては絶対変わらない問題だから。おそらく、その人たちに一生懸命お節介しても変わらない。

ニート現象について共創空間で向き合ってみた。そこでハッと気づかされたことは、自由のワナ・豊かさのツケとはまさにこのニート現象なのだという事です。

同じ価値観を持つ者同士ならいざ知らず、価値観が全く異なる者同士は本当に向き合えるのだろうか。お互いに関心を装っていても、本心から向き合えないのではないか。つまり、価値観の異なる者に対して無関心となり、同じ価値観を持つ同士で満足してしまう。決して自分（の価値観）を手放さず「動かない」ことも自己満足の現われ、無関心さの源でありニート現象に通ずる。つまり、ニートを見ている私たちの心の中にほんとうのニートが潜んでいる。果たして、価値観の異なるヤングとシニア世代は、無関心や自己満足を乗り越えて、ほんとうに向き合うことができるのだろうか。

## **価値観の異なるヤングとシニアはほんとうに向き合うことはできますか**

ヤングとシニア世代では、経験の違いと育った時代環境の違いが大きい。

### **1. 経験の違い**

ヤングは一般的に経験が少ない。即ち、感情で動き主観的である。ヤン



グの中でも、ニートを身近に見ている人は、その経験によって、向き合いたいという人と向き合いたくない人とに分かれた。

シニアは一般的にヤングより経験が多い。即ち、理性が働き客観的である。個人的には面倒だ、嫌だと思っても、この状態はまずい！社会全体として大きな損失だ。社会システムでサポートする必要があると思えば動けるといふ。

ヤングとシニアは向き合っていない。価値観の違う世代間の意見交換をしたり経験を交流したり、向き合う環境が必要であろう。

## 2. 育った時代環境の違い

シニア世代は、戦後の日本経済の貧しさを知っている。東京オリンピックを経て、右肩上がりの高度成長期、バブル崩壊を経験。甘えてなんかいられない、努力して豊かになった世代である。

一方、ヤング世代は一億総中流といわれた豊かな社会に生まれ、最初からモノが何でもあり、何でも与えてもらえるという環境の中で育った人たちばかり。核家族が多いので、おじいちゃん、おばあちゃん世代の生活はほとんど知らない。つまり、社会的責任を気づかせてくれる人が、周囲に少ない。甘えや面倒くさい症候群を許してしまう社会で育った世代である。

ヤングは漠然とした自分中心のイメージのなかで生きている。すぐに働くのも嫌だから、とりあえず大学へと大半の人が進む。時代のブームにのり、イメージで職業を選ぼうとするが、なかなか仕事が見つからない。また、職場で面倒なことに出会うとすぐやめてしまう。悩む力が育たず、悩む場面に直面しないような生き方をしている。

シニア世代からは、「仕事とは嫌でも頑張っている内にだんだん面白くなっていく」と。しかし、ヤングはスタート時でイメージ通りの完璧を求める。不安だから、絶えず心のどこかに虚しさや満たされなさを抱えて生きている人が多いように思われる。

シニアの多くが、ニートは社会の問題として考えたいと発言している。行政組織がいろいろ案を出して仕組みをつくれれば、ニートの人たちは少なくなるのか。疑問である。自分が具体的に関わることにはネガティブに反応する人が多い。シニアは過去の成功体験を武器に、ヤングと向き合っ

いない。また、ニートの人たちは無気力だ、無責任だ、甘えている、贅沢だと多くの発言があるが、自分から直接、働きかけるのは面倒だ、相手から話にきて欲しいという姿勢が多い。

自分はニートとは関係ないと思っているシニアこそが無関心の域に入っている。あえてDゾーンにマグネットを置き、いろいろな価値観と向き合いたいと試みたシニアの意見もあった。

ヤングは、自分が変わろうとしない人とは向き合いたくないという意見がほとんどであるが、見たくないものは見ないと無関心になっている。ニート問題に関わることを放棄している意見もあった。

しかし、Dゾーンにマグネットを置いたヤングが、他者の意見を聞いているうちに、自分が考え方を考えることで世界が変わることに気づき、Aに跳ぶ人も現れた。また、Aに置いたヤングからは、身近にいたニートになりそうな人（姉）の、気持ちや思い、立場や考え方を推し量り、相手の目線で考え、話し合った経験が披露された。

共創空間に降り立ち、そこで様々な異星人（価値観の異なる人）と向き合い、聴く耳を持って自らの意思でその空間を動き、真理を発見することこそが、自由のワナと豊かさのツケから解放されるヒントとなるのではなかろうか。聖書は語っている。「真理が（不自由な）あなたを自由にする」と。

## ■ちょっと一言

日本帰還。ここにニートが出てくるのですね。ヤング世代とシニア世代が混じって共創したことがとても意義のあるように思えて面白かったです。

3年くらい前からパーソナル・サポート・サービスの国のモデル事業が始まり、横浜市では若者をターゲットにした自立支援、就労支援をしています。誰もが持っている可能性を開花する伴走型の支援をするもので、貧困、ニート、家庭の問題、メンタルヘルスなどさまざまなトラブルを抱えている人をさまざまな専門分野で活動しているNPOが企業、自治体と連携したネットワーク組織をつくって、相談から問題解決支援、アフターフ

オローまでを行っています。

人間は働くことが基本。仕事、趣味、地域活動などのバランスがとれていることが理想のように思ってきましたが、若者が働かないことは大きな社会問題で、みんなが向き合わなければならないことだと思います。ニートが増えると高齢者社会を維持できませんし、少子化がますます進み、お先真っ暗です。

身近にもニートは存在しています。しかし、何かしてあげたくても、個人でアプローチできることは限られています。本人の意識を変えることはできない。本人が目覚めないことにはどうしようもない。ですから、そういった環境を整備して、意識を変えてもらおうしかないのかと思いました。

## 第2部 なぜ地球を旅するのに「共創空間」が必要なのか

### 1. はじめに

ちょっと変わった共創空間での旅、いかがだったですか。地球という地理的空間を旅するのに、何故さらなる「共創空間」という空間が必要なのだろうか？同じような疑問を持たれた方も多いのではないかと思う。むしろ、その必要はない、なくてもよいのではないかと思われるかもしれない。この空間がなくても、あまり知らない国を知るだけでもいいのではないかと。

では、この空間で地球を旅する意味は一体どこにあるのか？無意味なのか？否、実は、生きるうえでの重要な意味が潜んでいるにもかかわらず、それに気づいていないだけなのかもしれない。そうであれば、「共創空間」とはその意味を隠している心の中にある暗闇と闘う空間なのかもしれない。どこを旅しようと、さらに、どんなに一見素晴らしく見える人生の旅でも「共創空間」で映し出された闇に隠された自分がある。その自分と向き合わない旅とは実は孤独であり、暗闇なのではないか。この真実をこの空間で知り、光の中を歩むライフスタイルを選ぶ自由があることに気づくこと、このことが共創空間で旅する目的なのではないでしょうか。

この旅で気づいた衝撃的な真実とは、心を不自由にしているのは、他者でもなく、世の中でもなく、実は自分であることに気づく。全人類に向けた愛の言葉である聖書はこう語っています。「・・・あなたがたは、私たちの（住む社会の）中で制約を受けているのではなく、自分の心で自分を窮屈にしているのです。」（コリント人への手紙第1、6章12節）。

## 2. 「共創空間」を開発するって何？

人間は、物事を考えたり感じたりする生き物で、理性基準と感性基準の両者を併せ持っている存在であると、本書の旅前夜の節で述べた。

一方、最近の大学生の多くは、例えば、卒業論文を書く時期になると「どうも嫌なんだよな！」と言って倦厭<sup>けんえん</sup>する傾向がある。また、就職活動でも「好きな仕事が、なかなか見つからない！」と言う。このように、好き・嫌いが先にきて、次のステップに進んでいかない。

この傾向に対して、「それでは、好きなことは何なの」「嫌いなことは何なの」と問いかけると、素直に答えが返ってくる。

この現象は、学生だけでなく一般の大人にも見られる。自由で豊かな時代の特徴かもしれないが、そもそも人間は、行動や判断の初期には感性基準で決断する生き物であることを示唆していると考えられる。しかし、世の中は好き嫌いだけの感情で過ごせるわけではない。人が集まって社会を構成すると、共通の価値基準がないと社会は烏合の衆となって混乱する。

そこで、感性基準から入って、理性基準でチェックをし、共通の価値基準を「共に創る場」を用意して、「なぜか、どうしてか」とお互いに問いながら会話と討論を重ねる機会を持つことが必要となる。

かくして、個人と他者とが相互に尊重しつつ理解を深めて、**共通の価値基準の形成**に近づく場づくりができる。また、個人にとっても自分の思いこみや硬直した考えを改変し、ものの見方・考え方を柔軟にすることができる。

情報革命でネット社会となった現代は、情報があふれ交錯している。こんな時代こそ、対面交流によって、ものの見方・考え方を磨くことは発想法としてばかりでなく、教養としても重要であると思う。

自由で豊かな社会となり、価値観が多様化した現代にふさわしいものの見方・考え方とはどのようなものなのか。また、見方・考え方の基礎をなす発想法とはどんなものなのか。問い続ければ好奇心が次々と湧いてくる。

現代の日本は、民主主義社会である。民主主義とは「平等な権利を持つ自由な市民全員が、社会の決定に参加する仕組みである」と言われ、「最

大多数の最大幸福を目指すしくみ」とも言われる。

このしくみのもとでは、多数決の原理で物事が決められる。つまり、賛成か反対かの二項対立（二者択一）で多い方で決められる。この方法は、社会の合意形成には一見有効なやり方に見えるが、排除された少数意見は無視されて不満が残るし、理性では納得しても感情のしこりが尾を引く。

従って、たとえ意見が違って、根気よく会話してお互いの共通部分を最大限見出していく方法はないものか、激しく対立しても同じ土俵で議論し、議論倒れにならない土俵を創れないか、つまり、**共に創る土俵（場）**づくりが問われるのです。

**共創空間**とは、文字通り「共に創る場」を指している。その場を**開発**するとは、よりよい場づくりを探求し、成果を生む作業・行為です。

（英語では、Co-Creative Development、略称はCCD）

前記の「賛成か反対かの二項対立」の場ではなく、第一部の旅で提示したように、タテとヨコの2本の軸を描き、タテ軸を理性軸とし、ヨコ軸を感性軸とすると、十文字の場は4つの場に区分される。

この場面を念頭に置いて「設問」を設定する。設問に対する個人の思いや考えが、4つの場のどこに位置するかを決めて、そこに決めた理由を順番に話し始める。場を決めかねる人は、十文字のどこかの線上または中心に自分の仮の位置を指定して、決めかねる理由を話す。

話された思いや考えは、平等に尊重し、互いに共有して、新たな答え（意見）を共に創りだし、共感の輪を広めることにつながる。

人間は、ものごとを判断し行動する時には、理性基準と感性基準とが混ざりあうか、どちらかに重きを置いている。よって、共創空間では、本音で会話が進み、理解や共感が生まれやすい。

このような方法で会話を進め、議論を交わすと、二項対立の場よりも、共感や合意や第三の発想に至る確率が高まり、排除の弊害も減少する。

人間は共感する存在であり、共感によってつながり社会を形成してきたともいわれる。共感が生まれやすい場づくりが、共創空間開発なのです。深い意味では、共創空間開発は、民主主義のインフラづくりに貢献できるのではなかろうか。

また、人生は選択の連続であるとも言われる。個人が選択するときにも、共創空間開発的な発想で行えば、理性軸と感性軸を頭に描き、自己を観察し、よりよい選択へと自己を導くことを可能にしてくれるのではないだろうか。

前節で、学生の卒業論文の例を述べたが、論文を書く場合も、自説に固執せず、多面的に総合的に考えて、共創空間に自説を一旦投げ出し、第三者の観察の目にさらして客観的に論考することで、より真に迫った論文にすることができるのではなかろうか。特に、人間や社会を対象とする学問の論文は、理性軸と感性軸を併せて論考しなければ、全体を考察したものにはならないと考える。

### 3. 共創マトリックスとは

前節では、共創空間開発についてやや抽象的に述べたが、それを「見える化」することにより理解が深まる。お互いに意見や思いを出し合い、共有して、向かい合うにしても、一定のルールがあると、会話も議論も進めやすいし成果もあがる。

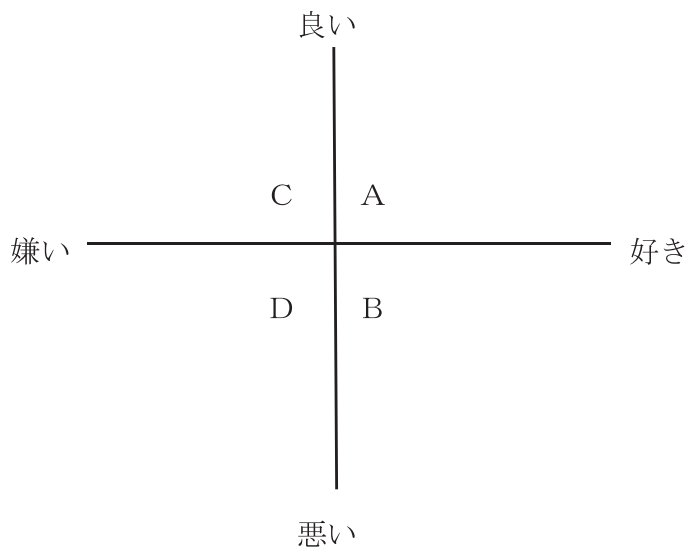
そこで、「共創マトリックス」と名付ける技法（手法）を開発した。それは、**ボード**と**マグネット**、そして**ボール**の三つの道具から成り立っている。その使い方と手順は、次の通り。

- ① まず、共創空間に参加する人たちが、関心のあるテーマや問題を話し合って決める。それを「設問」（**ボール**）として掲げる。
- ② その設問に対して、各人が思いや意見を表明する場として、**ボード**（鉄製の白板）にタテ軸とヨコ軸を十文字にクロスさせた線を描く。
- ③ タテ軸には理性的な項目（例えば、良い・悪い。必要・不要）を軸の上下に対になるように書く。

129 第2部 なぜ地球を旅するのに「共創空間」が必要なのか

- ④ ヨコ軸には感性的な項目（例えば、好き・嫌い。欲しい・欲しくない）を左右に対になるように書く。
- ⑤ 分けられた四つのゾーンに、A. B. C. Dの記号を付ける。  
(例)

【設問】 タバコを吸うことについてどう思うか



- ⑥ 次のステップは、参加者がこのボードを見てしばし考える。そして、考えた結果があてはまる位置（A, B, C, D）に、マグネットを置く。（例えば、タバコを吸うのは悪いと思っているが、好きな人はBゾーンに置く）
- ⑦ 次に、ボールを手渡された参加者が、自分の思いや意見を発表する。他の参加者は、それをじっと聞く。
- ⑧ 発表の終わった参加者は、次の発表者を指名してボールを渡す。次々とボールを回して全員が発表する。

このようにして、参加者は順番に思いや意見を発表し、全員の発表が終わったら議論・討論を始める。質問や意見を述べる人は、必ずボールを受



け取ってから発言する。意見交換の間に自分の考えが変わった人は、マグネットの位置を変えてもよい（この変化がとても大切）。

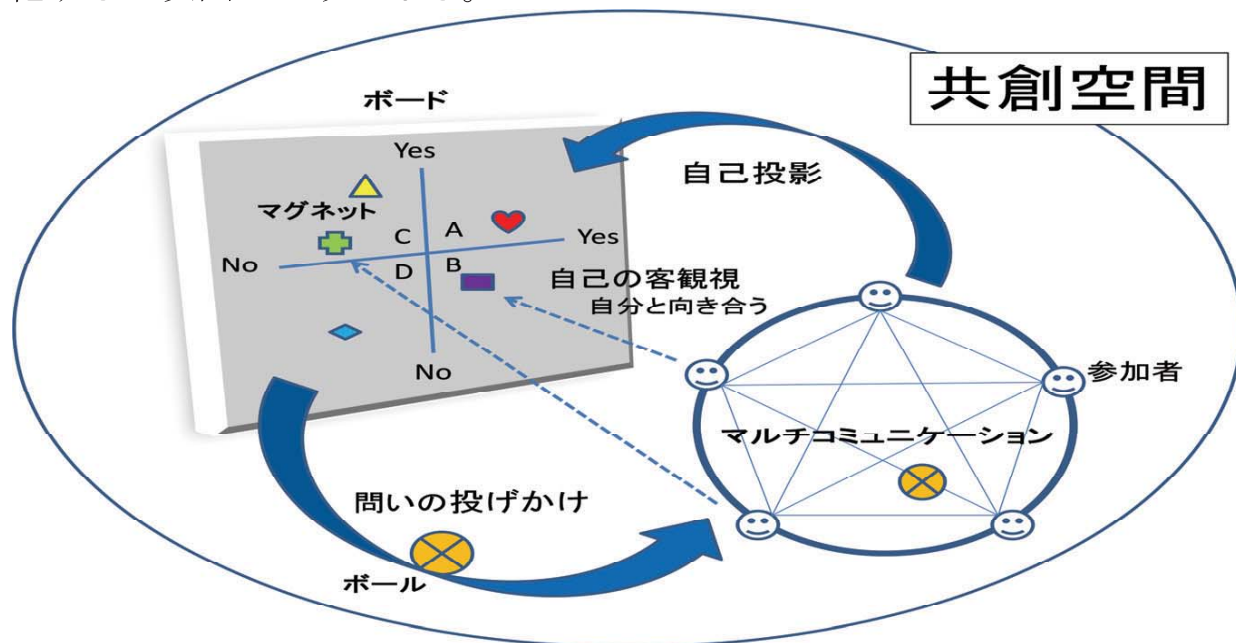
議論するときには注意すべきルールは、相手に反論したり攻撃したりしないことである。マルチコミュニケーションでは、キャッチボールをするのであって、攻撃的なドッジボールをするのではない。

共創マトリックス（二次元空間）は、参加者の思いや意見を「見える化」し、会話し議論する技法。従って、他者の発言を聞いて、異なる意見や価値観を理解・共有し、あるいは共感して自分の考えを改めながら、新たな発想を共に創りあげるのに有効です。

ここで使用する3つの道具には、深い意味が込められている。次にその意味を紹介する。

## 共創マトリックスで使う道具の意味

三つの道具の個々について説明する前に、共創空間の全体像をイメージ化すると次図のようになる。



この図では、5人の参加者が、設問に対して自分の位置（A、B、C、D）を決めて、ボード（鉄製の白板）に向かって各々1つのマグネットを置いたことをイメージ化している。ボードへの自己投影を意味する。

また、参加者が、マグネットを置いた場所への自分の思い（意見）を話した後に、次の人にボールを渡そうとしている姿をイメージ化している。

5人の参加者がボールを順番に受け取って会話する姿を五角形の対角線で表している。

この全体像は、文章で説明すると複雑に感じますが、一度体験すると実にシンプルなことがわかります。

それでは次に、三つの道具の意味について説明する。

### **ボードについて**

前節の「共創マトリックス」で述べたように、ボードには設問と、タテ軸・ヨコ軸を記入する。これはマグネットを置く前段階の準備である。

設問に対する自分の思い（意見）は自分の頭の中にあり、それがボードのどのゾーンに位置するかは他者にはわからない。しかし、頭の中を整理してマグネットを置くと、他者にも明示的にわかり、自己と他者との比較検討をすることもできる。つまり、自己を客観視して自分と向き合うことができる。ボードは、参加者ひとり一人の心と頭を映す鏡となる。参加者はその鏡を見て全員の思い（意見）を相互に理解・共有して会話を進めるのに、ボードは有効な道具となる。

### **マグネットについて**

自分の頭の中にある思い（意見）をマグネットに託し、どこに置くかを決めた段階で、マグネットは自分の分身（マグ・セルフとも呼んでいる）となる。ボード上に置けば、一定の距離をおいて自分を眺めることができる。かくして、客観的に自分と向き合うことで、新たな自己を発見し自分を知ることにもなる。また、他者との距離に気づき自己を見つめ直すことができる。

## ボールについて

ボールは発言者を指定する道具である。ボールを持っている人だけが発言を許される。自分の発言が終わったら、次に聞きたい相手にボールを順々に渡していく。

ここで重要なルールを共有しておく必要がある。ボールは相手に反論し攻撃する（ドッジボール）暴力の道具ではなく、お互いが向き合っただけでキャッチボールする対話の道具であるとの共通認識に立ち、このルールを守ることが大切です。また、質問のやりとりは理解を深め、付加価値をつけるために行うのであり、個人を追い詰めるためのものではありません。

キャッチボールで会話を進めると、設問に対する答えは一つではなく、さまざまな答えが存在することを知る。これが本の表紙にある  $1+1=2?$  の意味です。ボールを次々に他者に渡すことにより、マルチコミュニケーションを円滑に進めることが可能となる。

これだけではありません。白板にマグネットを付け、それを動かしてみることとは、強制ではなく、自由意思によってなされる。この行為は自己表現だけではなく、それを手放す意思を働かせることによって、自己解放を味わうことが意図されている。生き方の新生・更新を味わう空間です。

以上が、私たちが考えている「共創空間開発」技法（手法）の概要です。この技法（手法）は、まだまだ発展途上であり、一つの発想法として活用するためには、理論的にも意味づける必要があると考えている。

読者の方々のご意見ご指摘により、普遍的な知のイノベーションの技法（手法）として完成度を高める努力をしたいと考えている次第です。

## ■ちょっと一言

第2部は、共創空間、共創マトリックスのことが具体的に示されています。読者として、読み始めたころは共創空間、共創マトリックスが何だかよくわからなかったけれど、この手法の素晴らしさを実感し、どこかでやってみようと思いはじめています。

## エピローグ

### 旅の振り返り

地球儀を前に置いて、あらためて取り上げた国々を振り返ると、地球を一周したことになる。

- ・アジアでは、日本・韓国・カンボジア・アフガニスタン・インド。
- ・アフリカでは、ケニア。
- ・ヨーロッパでは、イタリア。
- ・南北アメリカでは、米国・キューバ・パナマ。

これらの国々は、政治・経済や社会・文化そして歴史においては、それぞれ特色をもっているが、人々が暮らし生活を営んでいることには変わりはない。世界の暮らしをみることは、自分の暮らしをみることに通じている。そんな遠いところなんて関係ないと思われるかもしれないが、同じ空の下、太陽のもとで暮らしている。

人の暮らし方・生き方を「ライフスタイル」と名づけた旅は、地球一周とは言え、わずか 10 カ国のごく一部を見聞感考したに過ぎないが、その場所ごとに自由と豊かさ、その逆の不自由と貧しさがあった。そこから、ほんとうの自由とは何か、また真の豊かさとは何かを考えるヒントを得られたのではないのでしょうか。

「人生行路（ライフコース）は旅なり」とも例えられる。旅は心の栄養ドリンクと考える私たちは、旅の先々で見たり聞いたりして、感じて考えたこと（見聞感考）をもとに、それぞれキーワード（道標、道しるべ）を探し、問いを見つけ、共創マトリックスを試みてきた。

振り返れば、第1話では「自己回復」、第2話では「家族」、第3話では「ペットの権利」、第4話では「自然との共生（文明の衣）」、第5話では「地域社会」、第6話では「もったいない」、第7話では「国際貢献」、第8話では「豊かさ・貧しさ」、第9話では「飢え・渇き」、第10話では「自

由)、DAY 7で日本へ帰還してからは「自由のワナ・豊かさのツケ」としての「ニート」問題に向き合ってきた。

これらのキーワードは、ライフスタイルのすべてを表現しているわけではないが、生き方の本質に迫るものがあつたのではないか。現代の日本では当たり前となっている「自由と豊かさ」に向き合い、その世界の中での生き方を共に探る「キッカケ」となつたのではないか。

自由と豊かさを求めることを否定する人は、おそらく皆無だろう。しかし、旅を通じて、自由をいくら追いかけても自由がやってこない「自由のなかの不自由」や、豊かになつたと思ひ込むところに貧しさがあることに気づくキッカケにもなつたのではないか。

7人の旅人の紹介文をベースに、共創マトリックスを使って意見を交わし、「ライフスタイル研究会」のメンバーだけではなく、多くの日本の若者たちと共に共創マトリックスで考えてきた。かくして、一風変わった「日本発7日間で世界を巡るライフスタイル再発見の旅」が終わりを迎えた。

はたして、旅を通じて私たちはこれから進むべき自らのライフスタイルを再発見できたのだろうか。

### 「ライフタイム」と「ライフスタイル」

私たちの人生は、1日24時間、1年365日の積み重ねとも言える。現代の日本では、人生80年とか90年といわれる長寿社会を迎えている。

一般的に人生を大きく区分すれば、社会人となるための知・徳・体を整える成長期、社会人となり何らかの職業に就いてからの成人期、体力は衰えるが過去の経験を生かして次世代に貢献（ボランティア等）するリタイア後の成熟期、の3つの区分が考えられる。

この成長期、成人期、成熟期の3つの年齢的な区分けは、個人差があるし、3区分の呼称にも人によって異論があるだろうが、一般論として、学業を終えて、仕事（職業、家事等）に就き、歳をとったらリタイアするという人の一生（ライフタイム）は、共通している。

もちろん、人の一生には山もあれば谷もあり、喜怒哀楽はつきものである。このライフタイムを通して、どのような生き方（ライフスタイル）をするか、これまた個人によってさまざまであり、十人十色、百人百様。ライフタイムの時期やその時の境遇によって、ライフスタイルをチェンジ（変える）することもある。

### **ライフスタイル再発見？**

人は、なかなか自分の思いこみ（自分軸・自分基準）を、捨てたり変えたりできない存在。しかし、あることをキッカケに「目から鱗が落ちる」の言葉のように、急にものごとの真相や本質が見えることがある。是非、共創空間がそのキッカケになればこれほど嬉しいことはありません。私たちは、世界を旅しながら共創空間という「鏡」を通じて新しいライフスタイルがあること、真実の愛に触れる生き方があることを発見できた。

読者の方々も、今の生き方について共創空間で向き合うことにチャレンジしていただければ嬉しい限りです。この本には、そのキッカケやヒントがゴロゴロあります。しかし、それを押しつけることを全く意図していません。共創空間に立つことによって、これでよいと思っている今の自分の生き方が実は問題であることに気づく。今の生き方は実は暗闇かもしれない。このまま暗闇の道を歩むか、それとも共創空間を通じて光の道を歩むか、読者一人一人の自由意思に係っている。

### **共感する言葉**

昨年（2012年）秋に、プロ野球を引退した金本知憲氏（44才）がテレビ番組の引退インタビューで次のような会話をしていた。

司会者の「鉄人といわれるような数々の記録を達成された影には、何があったのですか」との質問に対し、金本氏は「苦しい練習や身体トレーニングを積み重ねて自分を磨いた。その原動力は、一皮むけた新しい自分を見たときの喜びである」と答えていた。

この「一皮むけた新しい自分を見た喜び」の言葉に、今日の自分から明日の自分へとチャレンジするプロ魂を感じた。

西洋に目を向ければ、フランス系スイス人の哲学者フレデリック・アミエル（1821～1881年）は、たくさんの名言を遺したが、その一つに次のような言葉がある。

心が変われば、態度が変わる  
 態度が変われば、習慣が変わる  
 習慣が変われば、人格が変わる  
 人格が変われば、人生が変わる

## おわりに

私たち凡人にとって、「一皮むける」ことや「変わる」ことは、実は難しいことです。しかし、第2部で述べたように、共に創る「共創の場（空間）」で、共創マトリックスを使えば、案外変われるものです。共創マトリックスは、一方向や双方向のコミュニケーションではなく、参加→共有→会話→気づきを繰り返すマルチな（多数の、多面的な）コミュニケーションだからです。また、自らのこれまで生き方の軌跡を確認し、将来を方向づけるためにも役に立ちます。読者の方々も「ライフスタイルを問う」という大きなテーマの中で身近な個別の設問をたてて、共創マトリックスにチャレンジしてみてもいいでしょうか。

私たち麗澤オープンカレッジ講座のライフスタイル研究会のメンバーは、善きライフスタイルを再発見する共創空間での旅を、いのちある限りこれからも続けていくつもりです。

真の豊かさと自由を求める、価値ある人生のために！

絶望の中であっても希望の光に向かって歩む人生のために！

囚われた自分からの解放のために！

真実の愛に触れる生き方を発見するために！

《我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか》という問いをご存知でしょうか。この問いは、フランスの画家ポール・ゴーギャン（Eugène Henri Paul Gauguin 1848～1903年）が南太平洋の島タヒチで描いた自作の絵画を通じて問いかけたものです。

このゴーギャンの問いかけこそがまさしく私たちの共創空間の旅につながっています。

私たちはこの問いかけの通り、道迷うものです。この本を出そうと思った時もそうでした。一体、どこから出発すればよいのか。そんなことで迷っているとき、アメリカの映画「チョイス！」（2008年）を見て素晴らしいヒントがあることに気づきました。主人公の娘が学校で「すべての文明がたどる同じ道」というテーマで語り始める以下のようなシーンがあります。人類は最初「束縛」(bondage)の状態にあった。そこから人類が求めたものは「自由」(liberty)、その次に求めたものが「富」(abundance)。しかし、「富」を手にした人類が直面したものは、「自己満足」(complacency)であり、「無関心」(apathy)です。その結果、人類は自らの心に縛られるという「束縛」(bondage)に舞い戻ってしまう。このメッセージは、今生きているわたしたち一人一人に対するメッセージであり、真摯に受け止める必要があることを実感しました。

そこで、わたしたちも、地球を旅しながら、人類が辿って来た、束縛(貧しさ)・自由・富(豊かさ)・自己満足(その対極にある飢え渴き)・無関心・束縛への道を辿り、ライフスタイルという観点から共創空間で自分自身と向き合い、自分の生き方を吟味してきました。

「共創空間の旅」が、この束縛から束縛への悪循環から解放されるヒントを得る旅となることを心から祈ります。

(完)



## 感謝をこめて

本書の構成に参加した人は次の通りである。(氏名のみ、五十音順)

### <紀行文>

内田加奈美、大場裕之、竹内葉子、露木かおり、遠峰喜代子、橋本正子、山岡平三。

### <共創マトリックス>

内田加奈美、大場裕之、太田禮、大野光雄、竹内葉子、高畠達美、露木かおり、甘楽秀夫、遠峰喜代子、鳩原吉也、松尾亮平、濱田千栄子、橋本正子、山城信以子、山本達郎、山岡平三、綿引恵子、大学生約 200 名。

### <全体の構成>

大場裕之、遠峰喜代子、山岡平三

上記のメンバーは、麗澤オープンカレッジで大場裕之教授が担当する講座「ライフスタイル再発見」の2010年度以降の受講者である。この講座は2006年(平成18年)春から開講されていたが、2010年度の受講者有志から「講座で実践した“共創マトリックス”を講座録として冊子にしよう」との提案があり、翌年分も含めて2012年3月に42ページのブックレットを発刊した。これを契機に、大場裕之教授の主導で受講者有志による「ライフスタイル研究会」が発足した。この研究会をベースとして、次なる目標として世界に目を向け、地球を旅した者に耳を傾けながら共創空間で共に意味探しの旅をしてみようと思い、本書製作への構想へと結びついた。

本書は、共創空間開発プロジェクト(麗澤大学経済社会総合研究センター、2012年度)の一環として、当センターのみならず実に様々な人たちのご協力によりまとめることができた。心から感謝したい。

まず、麗澤大学の「共創空間開発論」にもとづくユニークな講座企画と進行、それに参加した受講者の熱意と人生経験豊かな発想、

講座時間をオーバーした時の大学事務局の配慮、本書全体を通読して下さった石渡秋さん、そのほかの関係者の方々に、心から感謝し、お礼を申しあげたい。

また、拙稿にもかかわらず、出版を快く引き受けてもらったスパークル企画社の滝口輝彦さんには、深く感謝したい。

最後に、この本を通じて今直面している現実の世界がたとえ絶望的に見えても、喜びに満ちたライフスタイルとなる秘訣があることを知るためのヒントとなりますように。このことが、ライフスタイル研究会メンバー一同の心からの願いです。

今度は、読者としてだけでなく、「共創クルー」として次なる共創空間の旅に是非参加してみませんか。

お待ちしております。

2013年（平成25年）3月  
ライフスタイル研究会  
共創空間開発プロジェクトチーム

# 経済社会総合研究センター Working Paper 発行一覧

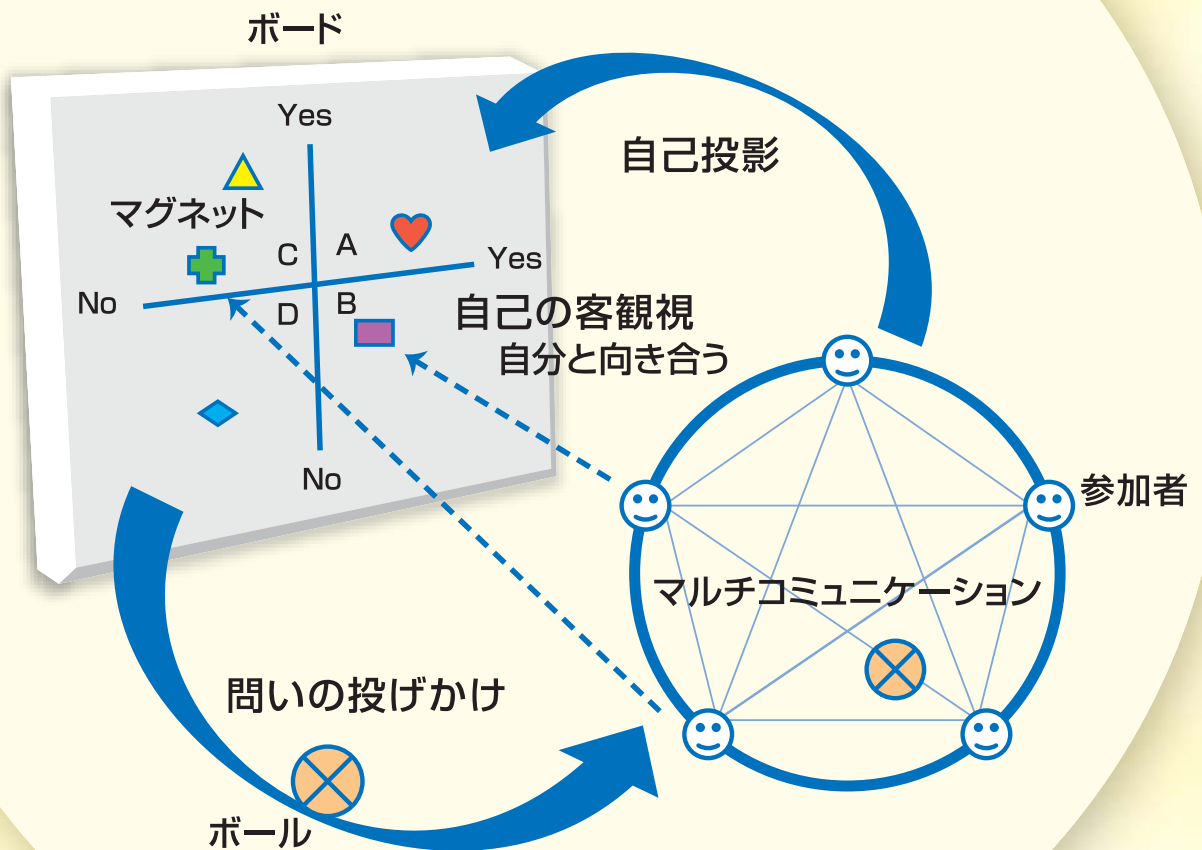
No.	発行 年月日	題名 / メンバー
1	2001/04/29	■品質を考慮した中古マンションの価格モデルの推定 [ 小野 宏哉・高辻 秀興・清水 千弘 ]
2	2002/03/01	■国家の在り方に関わる基本問題 －日本国家の戦略的危機管理を考える－ [ 大貫 啓行 ]
3	2002/04/01	■首都圏中古マンション市場を対象とする品質調整済住宅価格指数 の開発 －市場の構造変化と指数の接続－ [ 小野 宏哉・高辻 秀興・清水 千弘 ]
4	2002/03/12	■日本のアイデンティティと外交政策 [ ロナルド A・モース ]
5	2002/03/15	■イスラムの拡大と21世紀の国際社会理解の為に －イスラム拡大が引き起こす諸問題－ [ 保坂 俊司 ]
6	2002/03/27	■地理情報システムでの利用を考慮した地域経済環境データベース の構築 [ 籠 義樹・高辻 秀興 ]
7	2002/03/31	■Real Options研究の現状 [ 高辻 秀興・小野 宏哉・佐久間 裕秋・籠 義樹 ]
8	2002/09/25	■技術革新と景気循環システム [ 永井 四郎 ]
9	2002/10/22	■地方自治体財政の現状分析 －普通会計ベースで見た全国団体別財政力比較－ [ 佐久間 裕秋 ]
10	2003/03/06	■財政赤字、公債と家計消費 [ 中村 洋一 ]
11	2004/02/01	■地方自治体財政の現状分析 －普通会計ベースで見た全国団体別財政力比較－ 平成12年度決算 [ 佐久間 裕秋 ]
12	2004/03/01	■デフレーション下の経済政策 [ 永井 四郎 ]
13	2004/03/20	■産学共同プロジェクト ～論理的企業風土確立に向けての組織改革～ [ 中野 千秋・山田 敏之・福永 晶彦・野村 千佳子・長塚 皓右 ]
14	2004/03/25	■私立大学財務の脆弱性と安定性 [ 浦田 広朗 ]
15	2004/03/25	■インフォーマルな金融システムの発展と政府の役割 －「合会」(無尽)の発展における公的対応に関する日中比較研究－ [ 陳 玉雄 ]

No.	発行 年月日	題名 / メンバー
16	2004/03/25	■生命表形式による労働力と就業構造の分析:1987-2002年 [ 別府 志海 ]
17	2004/07/10	■日本ベンチャーキャピタル産業の発展プロセスとインプリケーション [ 李 宏舟 ]
18	2004/11/25	■Conjunct method of deriving a hedonic price index in a secondhand housing market with structural change [ 小野 宏哉・高辻 秀興・清水 千弘 ]
19	2005/03/01	■地方自治体財政の現状分析 －普通会計ベースで見た全国団体別財政力比較－ 平成14年度決算 [ 佐久間 裕秋 ]
20	2006/03/25	■Incorporating Land Characteristics into Land Valuation for Reconstruction Areas [ 小野 宏哉・清水 千弘 ]
21	2007/02/15	■土地利用の非効率性 －東京都区部・事務所市場の非効率性の計測－ [ 清水 千弘・唐渡 広志 ]
22	2007/02/18	■モンゴルにおける国際援助の経済効果、人口ボーナス [ セリーテル・エリデネツール ]
23	2007/02/20	■大正時代初期の宇都宮太郎 －参謀本部第二部長として－ [ 櫻井 良樹 ]
24	2007/03/31	■東アジアにおける企業家活動と地域産業の発展に関する研究 [ 佐藤 政則・陳 玉雄・連 宜萍・丘 紫昀 ]
25	2007/11/29	■Change in house price structure with time and housing price index -Centerd around the approach to the problem of structural change- [ 清水 千弘・高辻 秀興・小野 宏哉・西村 清彦 ]
26	2007/11/29	■炭素税による温暖化対策の不確実性 [ 清水 透・小野 宏哉 ]
27	2008/03/31	■『人民日報』からみた「改革・開放」 －中国の国際情勢認識と経済制度－ [ 佐藤 政則・陳 玉雄 ]
28	2008/03/31	■中国の環境問題を考える [ 三瀆 正道・陳 玉雄・金子 伸一・汪 義翔 ]
29	2008/12/25	■近代日中関係の担い手に関する研究(中清派遣隊) －漢口駐屯の日本陸軍派遣隊と国際政治－ [ 櫻井 良樹 ]
30	2009/01/25	■Econometric Approach of Residential Rents Rigidity -Micro Structure and Macro Consequences- [ Chihiro Shimizu ]

No.	発行 年月日	題名 / メンバー
31	2009/03/27	■日本の経営は“意欲的労働力”の創出によって効果的か －“理念共有化”仮説の提唱－ [ 大場 裕之 ]
32	2009/03/31	■サブプライム問題以降の大きな変化と世界経済、オバマ政権の経 済外交政策 [ 成相 修 ]
33	2009/03/31	■「銭荘」の発展と衰退 －「中国式銀行」の衰退要因に関する試論－ [ 陳 玉雄 ]
34	2009/04/13	■Investment Characteristics of Housing Market －Focusing on the stickiness of housing rent－ [ 清水 千弘 ]
35	2010/02/01	■What have we learned from the real estate bubble? [ 清水 千弘 ]
36	2010/02/01	■Structural and Temporal Changes in the Housing Market and Hedonic Housing Price Indices [ 清水 千弘・高辻 秀興・小野 宏哉・西村 清彦 ]
37	2010/02/12	■日本の経営の海外移転は成功しているのか －職務意識による理念共有化仮説の検証:メキシコ進出日系M社工 場の事例を中心に－ [ 大場 裕之 ]
38	2010/03/31	■中国の社区を考える [ 汪 義翔・三瀨 正道・金子 伸一・陳 玉雄 ]
39	2010/03/14	■日本の雇用形態の多様化に関する研究調査 [ 成相 修・佐藤 純子 ]
40	2010/07/01	■Will green buildings be appropriately valued by the market? [ Chihiro Shimizu ]
41	2011/03/10	■緊張が増す朝鮮半島と日本 －「2010 東アジア共同体への課題」プロジェクト研究報告－ [ 成相 修・金 泌材 ]
42	2011/03/31	■自動車リコール届出による不具合データの収集および整理 －報告書－ [ 長谷川 泰隆 ]
43	2012/01/31	■内外国債市場と高橋是清:1897-1931 [ 佐藤 政則・永廣 顕・神山 恒雄・武田 勝・岸田 真・邊 英治 ]
44	2012/03/31	■中国における伝統的文化の再評価と産業化・国際化 [ 三瀨 正道・汪 義翔・金子 伸一・陳 玉雄 ]
45	2012/03/31	■市民の環境意識と環境配慮行動への取り組みの現状 －千葉県柏市の事例－ [ 籠 義樹 ]

No.	発行 年月日	題名 / メンバー
46	2012/05/01	<b>■都市基盤整備財源はどのように調達すべきか？</b> －都市の老朽化への対応と開発利益還元－ [ 清水 千弘 ]
47	2012/05/08	<b>■売却／購入過程における住宅価格</b> － 募集価格と成約価格 － [ 清水 千弘・西村 清彦・渡辺 努 ]
48	2012/10/15	<b>■Biases in commercial appraisal-based property price indexes in Tokyo</b> - Lessons from Japanese experience in Bubble period - [ Chihiro Shimizu,Kiyohiko.G.Nishimura,Tsutomu Watanabe ]
49	2012/10/15	<b>■Commercial Property Price Indexes for Tokyo</b> - Transaction-Based Index, Appraisal-Based Index and Present Value Index - [ Chihiro Shimizu,W.Erwin Diewert,Kiyohiko.G.Nishimura,Tsutomu Watanabe ]
50	2012/10/15	<b>■The Estimation of Owner Occupied Housing Indexes using the RPPI: The Case of Tokyo</b> [ Chihiro Shimizu,W.Erwin Diewert,Kiyohiko.G.Nishimura,Tsutomu Watanabe ]
51	2012/10/15	<b>■Office Investment Market Becoming More Selective</b> - Selection of the Winning Market in Tokyo's 23 Wards - [ Chihiro Shimizu ]
52	2012/11/17	<b>■住宅価格指数の具備すべき条件</b> －国際住宅価格指数ハンドブックの論点を踏まえて－ [ 清水 千弘 ]
53	2013/01/01	<b>■不動産投資リターンはどのように決まるのか？</b> －資産価格・不動産収益と割引率のマイクロストラクチャの推計－ [ 清水 千弘 ]
54	2013/01/26	<b>■戦前日本の経済道徳</b> －その形成に関する試論－ [ 道徳経済一体論研究会 編 ]
55	2013/03/29	<b>■1932年日銀引受国債発行はどのようにして始まったのか</b> －大蔵省・日本銀行・シンジケート銀行からの考察－ [ 佐藤 政則・永廣 顕 ]

# 共創空間



[問い合わせ先]

〒277-8686 千葉県柏市光ヶ丘2-1-1 麗澤大学経済社会総合研究センター  
Tel:04-7173-3761/Fax:04-7173-1100 <http://ripess.reitaku-u.ac.jp/>

[問い合わせ先]

〒277-8686 千葉県柏市光ヶ丘2-1-1  
麗澤大学経済社会総合研究センター  
Tel:04-7173-3761 / Fax:04-7173-1100  
<http://ripess.reitaku-u.ac.jp/>

掲載されている論文、写真、イラスト等の著作権は、麗澤大学経済社会総合研究センター及び執筆者にあります。これらの情報は著作権法上認められた場合を除き、無断で転載、複製、翻訳、販売、貸与などの利用をすることはできません。